

靈界物語 第六八卷 山河草木 未の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十八卷』天聲社

1971(昭和46)年05月28日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 名花移植 めいくわいしよく

第一章 貞操論 ていさうろん 〔一七二五〕

第二章 戀盜詞 こひとうし 〔一七二六〕

第三章 山出女やまだしをんな（一七二七）

第四章 茶湯ちやのゆの艶えん（一七二八）

第二篇 戀火れんく狼火わらうくわ

第五章 變裝へんさう太子たいし（一七二九）

第六章 信夫しのぶ戀こひ（一七三〇）

第七章 茶火ちやび酌しやく（一七三一）

第八章 歸鬼ききい逸迫いつぱく（一七三二）

第三篇 民聲みんせい魔聲ませい

第九章 衡平かうへい運動うんどう（一七三三）

第一〇章 宗匠そうしやう財ざい（一七三四）

第一章 宮山嵐みやまめらし〔一七三五〕
第二章 妻狼の囁さいろうつ ねみ〔一七三六〕
第三章 蛙の口かはづ くち〔一七三七〕

第四篇 月光徹雲げつくわうてつうん

第四章 會者淨離あしやじやうり〔一七三八〕
第五章 破粹者やぶれするしや〔一七三九〕
第六章 戰傳歌せんでんか〔一七四〇〕
第七章 地の岩戸ち いはと〔一七四一〕

第五篇 神風駘蕩しんぶうたいたう

第八章 救の網すくひ あみ〔一七四二〕

第一九章 紅の川（一七四三）

第二〇章 破滅（一七四四）

第二一章 祭政一致（一七四五）

））））））））））

序文

大正甲子は古來稀なる變つた年であつた。世界にとつても、大本にとつても、また著者自身にとつても、大革新の氣分の漂うた不思議な年である。まづ世界の出來事はさておいて、大本の過去一年間の活躍史を見れば、エスペラント語をもつて綴りたる大本雜誌を世界四十八力國に發送し、かつ世界の各地より大本を求めて來る者もつとも多く、次いで大本瑞祥會を龜岡より綾部に移して、教務の統一を計り、役員職員を新任し、規約を制定して、大いに神人愛のため鵬翼を張つて天下に高翔せむとする機運に向かつた。次いで黑龍會との精神的提携、普天教

との關係はますます濃厚の度を加へ、支那道院紅卍字會と提携して神戸に道院を設け、廣く各宗の信徒を集め、宗教統一の大本が理想の實現に着手した。また回教徒吾が派遣したる公文直太郎氏の復命をはじめ、田中逸平氏の參綾、支蒙學者の石山福治氏その他數多名士の參綾となり、大本は愈この年より復興革新の曙光を認むることとなつた。

また著者個人にとつては、正月九日より亞細亞聊盟の基礎を造らむため、祕書長松村氏外二名と共に朝鮮を經由して奉天に渡り、蒙古の英雄蘆占魁その他の豪傑連を率ゐて蒙古救援軍を起し、深く奥地に入つて、索倫山に軍の編成をなし、大本喇嘛教を設立し、日地月星の教旗を翻し、着々として人類愛實行の緒に就きしが、大神の攝理によりて白因太拉の難を無事突破し、支那ならびに日本領事館の監獄生活を嘗め、新曆七月二十五日再び内地に歸り、警官に護送されて、十一月二十七日大坂若松町の刑務所に投げ込まれ、九十九日の獄舎生活を了へて、十一月一日やうやく綾部に歸り、靈界物語第六十七卷として蒙古人の梗概を口述し、表面上野公園著として天下に發表することとした。それより寸閑を窺ひ、六十八、

九の巻を口述し、また更に正月五日より七日に亘り、古稀の巻（七十巻）を口述し了ることとなつた。五日の五は嚴の御魂に因あり、かつ大正十年著者が始めて京都の刑務所に投げ込まれたる記念すべき日である。六日の六、水火の調節に仍つて萬物萌え出づるといふ言靈であり、七日は天地完成の意を含んだ吉日である。この目出たき五六七の三六の三ヶ日は瑞の御魂に因んでゐる。また五六七殿の七五三の太鼓は甲子九月八日より五六七と打つことになり、この日は印象深き神島詣の際、二代澄子が紫の玉にも譬ふべき、尉と姥との神像を迎へ歸りし瑞祥の日である。また二女の梅野、三女の八重野の結婚も甲子の年に執り行ふこととなつた。何につけても千變萬化、端倪すべからざる事物の續出したる記念の年である。

月光いよいよ世に出でて萬界の暗を照破す、とは靈界物語の發表に對し、神界より示されたる聖句である。古來稀有と稱する七十巻の巻を編述するに當り、月光閣において、始めて完成したるも、御幣擔ぎか知らねども、著者にとつては、實に何かの神界の經綸が祕んであるやうにも考へられる。筆録者松村眞澄、北村

隆光たかてる、加藤明子諸氏かとうはるこしよしの筆録ひつろくの勞苦らうくを謝しゃし、後日ごじつの記念きねんの爲ために茲ここに誌しるしおく次第しだいである。

六日むゆかの夕方ゆふがたより七日なぬかの午後ごごにかけ黄白色くわつはくしよくの降雪かうせつあり。地上ちじやうに積つむこと殆ほとんど二寸にすん、これまた實じつに古來こらい稀有けうの現象げんしやうといふべしである。惟かむながらたま神靈ちん幸倍ちへ坐世ま。

大正十四年正月七日 新一月三十日 於月光閣

（編輯者から）本卷は都合により第六十八卷として發行されます。以後も引續き順送りとなりますから御諒承下さい。

本卷は前卷の後をうけて、印度タラハン王國の太子スダルマンを中心とせる、
 同國の祭政一致の維新に至る波亂重疊たる經路を口述せられたるものにして、太
 子および舊左守の娘スパール姫の燃ゆるがごとき初戀の描寫より、太子唯一の寵
 臣アリナの活躍によつて、深山の名花はタラハン市の片ほとり、茶の湯の宗匠夕
 ルチンが離れ座敷に移植されて、満足せられたる兩人の戀の焰は、ますます暴威
 を揮ひて、太子の變裝脱出、アリナの身代り太子などの苦肉策は却つて滑稽味を
 帯び、アリナもまた魔の女信夫の毒手に危ふく翻弄せられむとする折柄、豫て特
 權階級資本家などの横暴に反抗して立てる謎の女バランスの率ゆる民衆團の爆發
 暴動となり、民衆怨嗟の炎は城下の過半を焼き盡し、タラハン城下は阿鼻叫喚の
 地獄道と急變し、太子はスパール姫と驅落ちして右守の魔手に捉はれ、大王は城
 下内外變亂を焦慮して病重態に陥り、アリナの脱走より、右守司サクレンスの大
 陰謀はこの機にその効果を收めむとする時しも、三五教の宣傳使梅公司の出現に

よつて善悪は立別けられ、正邪は各その處を得、大王の國替へ、太子の即位なら
びに結婚披露、舊左守シヤカンナの復活、アリナ、バランスの登庸、大宮山の神
殿造營などを主たる問題として、滅亡の淵に瀕せしタラハン王國は、階級打破、
上下無差別、祭政一致の理想的地上天國と蘇生したる綱領を、戀愛問題、貞操論
乃至奇想天外的の滑稽諧謔をもつて潤飾せられたる教訓、情味津津々として盡きざ
る神示の物語であります。神意の存する處は何時もながら、讀者の各自各様に會
得せられることと思ひます。惟神靈幸倍坐世。

大正十四年正月七日

新一月三十日

於月光閣

第一篇 名花移植

第一章 貞操論（一七二五）

樹々の緑も浅倉山の嫩芽、巻紙を擴げて一枚一枚橢圓の舌をはみ出し、晩春の風に揺られて無言の囁きをつづけてゐる。春の終りとはいへ、高地帯の山奥では都路に比して一ヶ月ばかり木の芽の生立ちも遅れてゐる。

虎、狼、獅子、熊の哮り聲、小鳥の百轉り、春風の木々の梢をもむ音、それより外に聞くものもなきこの山奥に、その昔タラハン國の左守の司と仕へたるシャカナは、年老いたりといへど勇氣は昔に衰へず、一朝、時を得れば潜龍の淵を出でて天に躍るが如く、天下國家のために昔とつたる杵柄の逞しき兩腕を國政の上に試みむとし、數百の部下を人跡稀なる山奥に集めて回天の神策に身心を傾けてゐたが、フトした事より、行く年波と共に天命を知り山寨に火を放ち、數多の

部下を解散し、今年十五の春を迎へた最愛の一女スバル姫を老後の力となして、一陽來復の時を待ちつつあつた。

あたかも天から降つて湧いたるごとく思ひがけなきタラハン國のスタルマン太子が、吾が政敵なる左守の倅アリナと共に、雨露を凌ぐにたゆべき茅屋の破れ戸を叩くに會ひ假寝の夢を破られ、十年振りにて主従の對面をなしたる數奇きはまる運命に、大早になやんで萎れかかりし木の葉の、雨露の恵みに遭ひて生々と復活したるが如き心地し、日夜腕を扼してタラハン城の空を眺めて再生活躍の希望を漲らしつつあつた。

日頃淋しく感ずる猛獸の聲も、悲哀に満ちた百鳥の囀りも、この頃は何となく生氣澆滅として己が出慮を促すものの如く、谷川のせせらぎの音にも、梢をわたる風の音にも、希望の聲が満ちてあるやうに感じられた。

俗臭紛々として罪惡に満ちたる暗黒の社會、人面獸心の化物どもが白晝を横行闊歩する都大路の塵にも染まぬ天成の美人スバル姫が、淺倉山の山奥、玉の川のの上流、清く流れて激潭飛沫をとばす岸の片邊、千疊の岩石をもつて區劃された

川の淵、淋しげに立てられた掘り込み建ちの茅屋に、鬼をも挫ぐ父のシャカンナ
と共に、無心の生命を保ち、千歳の苔に玉の肌を包まれて、今まで社會に落伍し
た人間の屑小盗人どもに、女帝のごとく、王女のごとくもてはやされ、人生の春
を過ぎすこそ、せめてものスバル姫が心の誇り、もしこのままにして世に出で
ずば、獸臭き山男の妻となるか、泥棒の妻となつて女盜賊の頭目として一生を終
るか、但は見見るべき花として時の力に散り失せ實を結ばず、木の根の肥料となる
か、さもなければ可惜美人の生涯を眞黒の毛脛に抱き通され、果敢なき一生を送る
より外に道なき姫の運命、人間としては餘りに艶麗に過ぎたるその容貌、諺にい
ふ美人の薄命、結縁の神に憎まれてこの山中に葬らるべき可惜もの。さりながら、
父の權威と吾が身の年若きに過ぎたるを幸ひ、悪性男の暴力に木の根を枕の犠牲
にもならず、今日十五の春まで身を犯されず、靈を弄ばれず、春秋を送り迎へし
て來たのは、せめてもの彼の少女にとつては幸ひである。六才の春より父親の手
に育てられ、淺倉谷の清流、岩にせかるる谷の淵瀨の水鏡はありながら、地を撫
でるとき長き頭の黒髪を無雜作にクルクルとまきつけて結び、浮世の風の響き

さへ知らず、もし人あつてこの美人を都大路の眞中につき出さうものなら、萬金を費やしても見られぬはずの玉を伸べたるごとき腕も脛もあらはに惜し氣もなく、夕ニグク風に散り來る木の葉の屑に弄ばれ、一片の人工も施さず、天成そのままの玉の肌をこの山奥に横たへ、暇ある時は、獅子、兔の安息所たる山林に別け入つて、薪を背負ひ、炊事萬端まめまめしく父の勞苦を助けてゐた。紅白粉香油などの補助的粧飾品は生れて以來、見た事もなく、身につけた事もない、ただ惟神のままに生立つた。原野に咲き匂ふ花の粧をこの山奥に人知れずさらすのは、さながら造化の技巧をこらして作り上げた天真の美貌、どこへ轉がしても玉は玉、如何に粗末でも蘭麝は蘭麝の香を備ふる道理、どこともなく言ふに言はれぬ床し氣がある。

陰裏の豆も時節が來れば花を開き果を結ぶ道理、今年十五の春を迎へたスバル姫も、天極紫微宮より降らせ給ひしエンゼルにも等しきスダルマン太子の、どこともなく雄々しき男らしき床しき容貌とその警咳に接してより、時ならぬ顔に紅葉を散らし、梅花一輪春陽に遭うて綻び初めし心地、子供心にも戀てふものの

怪しき魔物に捕捉さるるに至つた。雨の朝、風の夕べ、少女は淺倉谷の清流に向かつて両手を合せ、激湍飛沫の猛り狂ふ有様を見てはスダルマン太子の雄々しき御心と崇め、清き溪流を眺めては太子の御心の清き鏡と拜し、小鳥の聲、梢をわたる風の音も太子の甘き言葉のごとく思はれ、林に咲き匂ふ緑、紅、白、赤、黄色の花を眺めては太子の御顔を偲び、満天の星光を壓して昇る月影に對しては、あの圓満なる月の顔は正しく太子の清き、やさしき御姿、吾が生命の綱と懂がれ、物に接し、事に觸れ、森羅萬象ことごとく、一として太子の聲ならざるはなく、太子の姿ならざるはなき、深くも戀の暗に瀧津瀬のおちくる如く強度の勢ひをもつて、千尋の深き底に沈みゆくのであつた。

シャカンはスバル姫の此頃の様子の、如何にも腑に落ちぬに心を悩ませ、娘の親として、あらむ限りの思索を廻らし、時々溜息を吐くことさへあつた。あつた時シャカンはスバル姫に向かひ、少しく聲を潜め、姫の顔を覗くやうにして頬杖をつきながら、

「スバル姫よ、お前も今年は十五の春を迎へた年頃の娘、この親として自分も

お前の身を見るにつけ、あたら名玉をこの山奥に埋めたくはないのだ。俺は一旦
左守の司の職掌を退き、君側に蟠まる奸邪佞人を打ち拂ひ、タラハン國城下の安
寧秩序を保ち、一は王家のため、一は國家萬民のため、時節を待つて一臂の力を
揮つて見むと、この山奥に山賊どもを呼び集め、捲土重來の時期を待つてみた。
待つ事ほとんど十年、されど數多の部下は集まつて來ても、一人として心の底を
打ち明かし大業遂行に對し片腕の力になるものも出て來ない。それがため父はホ
トホト世の中が嫌になり、お前も知る通り、タニグク谷の山寨に火を放つて、玄
眞坊の後を追つてみた部下の不在中、この淺倉谷の隠れ家にお前と二人の佗住居、
味氣なき餘生を送らむものと覺悟を定めてみたが、雄心勃勃として脾肉の嘆に堪
へず、一層のこと此世の思ひ出にタラハン城へ只一騎乗り込み、君側に蟠まる惡
人輩を打ち亡ぼし、國家の災を除き、俺はその場で自殺をなして罪を謝せむかと、
幾度かとおいつ思案はしてみたが、天にも地にも親一人、娘一人の其方を後に
殘して先立たむも、そなたに對して不憫であり、大惡人の娘と、そなたが世の人
に後指さされるのも心苦しく、それ故、男らしき働きも得なさず、躊躇逡巡女々

しくも今日まで、あたは光陰を空しく費やして來たのだ。しかるに天の恵みか、地の救ひか、ゆくりなくも先月の今日頃、夢見るごとくスダルマン太子が吾が茅屋に踏み迷つて來られ、金枝玉葉の御身をもつて、この茅屋に一夜を過ごされたのも何かの神のお引合せであらう。つらつら思ふに、神様はこのシヤカンナに一時も早く山を出で都に上つて、國家の危急を救へとの暗示のやうにも考へられる。それについては、そなたは幸ひに世にも稀なる美人、萬々一冥加に叶つて太子様のお心に召したならば、それこそ父の大望にとつても國家にとつても之くらゐ都合の良い事はない。しかしながら何事も人間は運命に左右されるものだから、窮極するところは到底人間力ではいかないだらう。そしてまた男女の關係といふものは實に不可思議のもので、何ほど太子様がお前を寵愛遊ばしても、お前の心に太子を戀慕する心がなければ、無理に親の權威をもつて結婚を強ひる譯にも行かず、父の眼より觀察すれば、どうやら太子様は、其方に思召しがあるやうに感ぜられた。しかしながら結婚は戀愛によつて成立するものだから、何ほど少女だといつても、吾が娘だといつても、こればかりは父の自由にはならない。お前の

考へはどう思つてゐるか、遠慮會釋は要らぬ。切つても切れぬ親娘の仲だ。そして、お前の一生一代の大事事件だ。豫め、お前の心をこの父に聞かしてくれ。お前の心を聞いた上、この父にもまた劃策するところがあるから」

スバル姫は少女に似合はず、性質伶俐で山の奥に育ちながら、人情の機微に比較的通じてゐた。そして十二三才の頃より、戀愛といふ事に趣味を感じ、數百の部下の面貌を、一々點檢して、顔容や、性質や起居振舞等に注意し、男子に對する一種の批評眼を備へてゐた。しかしながら、どの男を見ても心性の下劣な、容貌の野卑な山猿的人間ばかりで、スバルが一生を任す夫として選ぶべき玉は一つも見當らなかつた。六才の時、タラハン城を後に、この山奥に父の手に育てられ、荒くれ男の奇怪な面貌をした小人輩ばかりを眺めてゐた彼女は……世の中の男といふものは凡てこのやうな獸めいたものだらうか。何れの人間を見ても左右の目が不揃ひであつたり上下になつてゐたり、鼻柱が右へ曲つたり左へ曲つたり、口の形から齒の生え具合、起居振舞まで見て、……實に男子てふものは情けないものだ。此世の中は何故、こんな化物ばかり棲んでゐるのだらう。アア情けない

浮世だな……と、いつも落膽失望の淵に沈んでゐたが、フトした事からタラハンの城の太子の君に巡り合ひ、その氣高き姿に憧がれ、また左守の倅アリナの容貌も捨て難きところがある。これを思へば、……今まで十年間眺めて居たやうな屑男ばかりではあるまい、世の中には百人に一人や二人は人間らしい面をした男もあるだらう。太子様がお歸りの時、自分の手を固く握つて、「これ、スパー、きつと迎へに来るよ」と耳の側で囁き遊ばした時の嬉しさ。しかし、かやうな山奥に育つた世間知らずの妾をば、どうして永遠に寵愛して下さる道理があらう。地位といひ容貌といひ、名望といひ、比稀なる若君なれば、都大路には立派な女も澤山あるだらう。そして太子様の權威と富力によらば、いかなる天下の美人も、引寄せたまふことが出来るであらう。太子様は、どこまでも戀しい。寝ても覺めても忘れられぬ。何だか此ごろは吾が心さへボンヤリとしてきたやうだ。しかしながら都大路に出て、幸ひに太子様の御寵愛を蒙つたところでさへ、夢の間の朝顔の花、朝の露が乾けば夕べに萎るる道理、あたら罪を作るよりも一層のこと、吾が戀ふる心を太子様に奉り、一生の操を守つて父と共にこの山奥に朽ちむか……

と、雄々しくも戀の焔を自ら消してゐた。そこへ父のシャカンナが意味ありげな言葉を聞いて、スバル姫は何とはなしに前途有望のやうな感じがムラムラと湧き出で、俯向きながら、顔を紅に染め、恥づかしげに言ふ。

「お父様、遠慮會釋なく思つてゐる事を言へとおつしやいましたから、今日は妾の一生の一大事、何もかも思つてゐる事を申し上げます。どうか叱らないやうにして下さい」

「なに、叱るものか。どんな事でも思つた事を父の前で言つてみるがよい」

「そんなら申し上げます。もうかうなつてはお隠し申すも及びませぬから、太子様がお歸りの時、妾の手を固く握り「スバル姫よ、暫く待つてゐよ。きつと迎へに来てやる」と仰有いました。自惚れかは知りませぬが、太子様は……あの妾にラブしてゐらつしやるでせう。そして妾も……」

「アツハハハハ、さうだらう、さうだらう、やつぱり父の睨んだ通りだ。そして太子様が迎へに来て下さつたら、お前は喜んで行くだらうな」

「ハイ、それは參らぬ事もございませぬが、何といつてもラブは神聖なものでご

ざいますから、よほど考へさしていただかねばなりません。

「ウン、それもさうだな。何といつても一國の主権者におなり遊ばす御方、至尊に犯すべからざる王太子様の妃になるのは、お前も女としては無上の出世だ。お前のために此の父も枯木に花の咲く時節が来るのだから、どうか太子様の思召しがお前をどこまでも妃にするといふ考へが定つたならば、父の爲にもなる事だから喜んで行つてくれるだらうな」

「父の爲には孝養を盡すを以て子たるものの務めといたします。父のためと戀愛のためとは道が違ふぢやありませんか。もし妾の戀愛が完全に成就したのなら、副産物としてお父様も幸運に向かはれるでせう。お父さまの幸運はつまり此の戀愛が成就するからでせう。妾はお父様に對しては孝養を主とし、夫に對しては戀愛を主とするものです。それが至當の道理と考へてみます」

「アツハハハハ、何時の間に、そんな理窟を覺えたのだ。夫が主で父が従とはチツとひどいぢやないか。それでは倫理學上由々しき大問題だ」

「そんならお父様の孝養を主として戀愛を一生葬りませう。その代り、この山奥

に一生朽ち果てる覺悟でございますから」

「そんな、ならぬ事を言ふものぢやない。親の言ひ條について太子様のお妃になれば、孝養も戀愛も完全に成就するぢやないか」

「孝養と戀愛が兩方圓滿に成功すれば、こんな結構な喜びはございませぬ。しかしながら世の中には、さう詭へ向きに行かない事が澤山あるでせう。すべて戀愛なるものは愛情から來るものです。愛情はどこどこまでも擴大すべきもの、また流動性を帯びてゐるものですから、倫理や道德や知識をもつて制縛し得るものはありませぬ。もし戀愛に理智が加はれば戀愛そのものは、千里の遠方に逃げ出してゐるぢやありませぬか。智性と意性すなはち理智と愛情とは到底兩立しないものでせう」

「何時の間にか、誰も教へないのに、【こましやく】れたものだ。ほんとに油斷のならぬは娘だ」といふが、この父もお前の話を聞いて荒肝を挫がれてしまつたよ」

「お父さまは昔氣質でお頭が少し古く出來てゐますから、戀愛問題などに容喩な

さる資格はありますまいよ。どうかこの問題は妾の意志に任して下さいませ。古い倫理や道徳説に囚はれて、可惜女の一生を靈的に抹殺される事は堪へられませぬ。神聖な靈魂を男子に翻弄される事は、女一人として堪へられない悲哀ですから、たとへ太子様が妾を寵愛して下さるにしたらところで、妾が太子様以上に愛する男子が現はれたとすれば、その時はお父様はどう思ひますか」

「これは怪しからぬ。「女は三界に家なし」といつて、夫の家に嫁いだ時は、いかなる不幸も不満も堪へ忍ばねばならぬ。そして舅姑によく仕へ、親や夫の無理を平氣で甘受せねばならぬものだ。それが女として最も尊い務めだ。その考へがなくちや到底女として立つ事は出来ないぞ。それが女の貞操だからのう」

「ホホホホ、それだからお父さまは頭が古いといふのですよ。男女は同権ぢやありませんか。男子が一個の人格者ならば、女だつてやつぱり一個の人格者でせう。人格と人格との結合によつて、初めて完全な戀愛が行はれ、結婚が成立するのでせう。戀愛は戀愛として、どこまでも自由でなければ、結婚といふ關門を通過した女はほとんど奴隸的牢獄に投ぜられたやうなものです。男子は好き」すつば

「う」に己が愛する女を幾人も翻弄し、女一人に貞操を守れといふのは不道理至極なやり方ぢやありませんか。たとへば太子様が妾をラブし、妾が太子様を此上なクラブしてる間は、互ひに貞操も保たれ、完全な結婚の目的も達するでせう。もし太子様において妾以上に愛する女が出来た時は、太子の戀愛は既にすでに妾を去つて他の女に移つてるぢやありませんか。それでも妾は戀の犠牲者として靈的死者の位置に甘んぜねばなりません。そんな不合理な事が、どこにございませうぞ。これに反する場合すなはち妾が太子様以上に戀愛する男子が現はれた時は、またその男子に戀愛を移すのは戀愛そのものにとり自然の成行きでせう」

「オイ、娘、何といふ馬鹿な事を言ふか。誰にそんな悪知恵をつけられたのだ」

「ハイ、妾の良心が、さう囁いてゐます。あのトンクだつて、妾に始終そんな話を聞かしてくれましたよ」

「エー、トンクの野郎、碌でもない事を魂の据はらない愛娘に吹き込みやがるものだから、娘の心に白蟻がついて瑕物にしてしまひやがった。表面からは天成の美人も、腹の中からは悪魔がすでに棲ぐつてゐる。こんなものを畏れ多くも太子

の妻に奉る事は出来ない。エー、困った奴だな
と腕を組み、太き吐息をつく。

「ホホホホ、お父さま、何でもない問題ぢやありませんか。よく考へて御覽なさい。女子ばかりに貞操を強要して男子に貞操を強要せないので家庭紊亂の基となり、ひいては國家の破滅を來たす源泉となるものですよ。女子に貞操が必要ならば男子にも貞操が必要でせう。もし夫たるもの、その妻の他に妻に勝つて愛する女子が出來、私かに戀愛を味ははむとする場合、その妻は、その夫に對して叱言を言つたり、愠氣をしてはいけません。眞に夫を愛するのならば夫の意志にまかすのが妻たるものの雅量ぢやありませんか。女房の戀を夫が強壓的におさへ、
「自分を無理に愛せよ」と迫り打擲したりして「自分を絶對的に愛せよ」といふのは決して理解ある男子とは言へませぬ。それくらゐの雅量がなくては、どこに男子の價値がありますか。また、妻も妻で、自分の愛する夫が、その妻よりも愛する女が出來た時、夫の愛する戀愛を遂げさせてこそ、眞に夫を愛するといふ事になるのでせう。夫は女の目より隠れ忍んで僅に戀愛を味はひ、妻は妻でまたヒ

ヤヒヤビクビクしながら他の男と戀愛を味はふやうな事で、どうして家庭が圓滿に行きませう」

「馬鹿いふな、そりや畜生のする事だ。爺は勝手に女房以外の女を持ち、女は夫以外の男をもち、そんな不仕鱈な事して家庭が圓滿に保たれるか。家庭圓滿が聞いて呆れるぢやないか」

「ホホホ、お父さまの没分曉漢には困つてしまふわ。夫が妻の戀愛を嫉妬したり妨害したり、妻が夫の戀愛を嫉妬したり妨害するなどは、實に卑怯未練といふべきものです。人格を備へたものなすべき事ぢやありません。このタラハン國は國が小さいから人間の心までが小さい。それで戀愛の冷却した女でさへ、自分の方に戀愛が残つてをれば無理に抑へつけ、一方の戀愛を犠牲にしようとするやうでは、家庭が圓滿に行きませぬよ。また戀愛は倫理や道德の範圍で律する事は出来ませぬ。お父さまは倫理や道德を加味した戀愛論ですから、いはば偽の戀愛論です。社會の秩序だとか、家庭の圓滿だとかいつて、煩悶し焦慮し、却つて狭苦しい道德をふりまはして、ますます家庭を紊亂し、社會の秩序を亂すやうにな

るのですよ。男子も女子も社會一般の人が雅量と理解とをもたねば、國家も家庭も圓滿に治まるものぢやありません。妻が夫に對する貞操は、妻以外の夫の戀愛者に對し少しの妨害もせず嫉妬もせず、むしろ好意をもつて夫の戀愛を遂げさせるのは、つまり夫に對する妻の貞操ですよ。又これに反する場合も同様で、夫が妻に對する貞操は妻の戀愛を遂げさせ、夫が妻に同情を寄せるのが、眞に妻を愛する事になるのです。一夫一婦の制度をもつて國家存立の大本となす政體もあり、一妻多夫、多夫一妻を以て國本となす政體も世界にあるぢやありませんか。男女が平均に生れる國では一夫一婦の制も結構でせうが、女が男より多く生れる國、または男が女より多く生れる國では、たうてい一夫一婦の制は守れません。それこそ却つて不道徳になるのではありませんか。女の多い國では女の戀愛抹殺者が出て、男の多い國では男の戀愛抹殺者が出て来るでせう。こんな悲惨な事が何處にあるでせう』

『理窟はどうでもつくものだ。しかしながらタラハン國は一夫一婦が制度だ。これを破るものは道徳の破壊者だ。戀愛など末の末だ』

「今日の世の中に大人物の現はれないのは、一夫一婦の制度が行はれてゐる弊害から來るのですよ。昔の神代の神様を御覽なさい。大國主の神様は打ちみる島の先々垣見る磯のさきおちず賢女奇女を娶り、國魂の神を生み、大人物を澤山お造りなさつたぢやありませんか。スダルマン太子のやうな賢明な君子的人格者は、妾のやうな賢女奇女を、澤山娶ひ遊ばし、そして大人物を四方に配り遊ばしたら、きつと世の中はよくなるでせう。あんな大人物こそ澤山な女があつても、生殖の方から見ても國家の寶を産み出す事になるでせう。これに反して愚夫愚婦といへど矢張り一夫一婦とすればガラクタ人間ばかり世に擴まり、ますます世は墮落するのみでせう。要するに社會道德の上から考へて、立派な人間は天の星の數ほど澤山な伶俐子を生み、野卑下劣な半獸的人間は、なるべく子を産まないやうにするのが、國家存立の上にも個人經濟の上にも有利でせう。お父さま、これでも不道理と聞こえますか」

「八八八八、まるで太子様を、種馬と間違へてゐるぢやないか。不都合千萬な事をいふ奴ぢや」

「その種馬におなり遊ばすのが、國の君たる方の御天職でせう。太子様のみならず、國の立派な人はみな種馬として社會に子を澤山産み落さなくては、社會の根本的改造はどうしても駄目です」

「さうするとお前は太子様が澤山な女をおもちになつた時はどうするつもりだ。理論と實際とは大いに違ふものだから、その時になつて愷氣の角を生やしたり、嫉妬の焰をもやしたり、その時に辛い目を味はつて見ねば解るまい。今こそ理論では立派なことと言つてるが實地になれば、さうは行かないよ。きつと愷氣するに定つてゐるわ」

「オホホホホ、そんな雅量のないスバルぢやございませぬ。妾だつて太子様以上にあつた時は、妾の方から御免を蒙るだけの事ですよ。一方の戀を壓迫し、どうして圓滿に行けませぬ。夫婦は家庭の重要品です。家庭と戀愛は別物ですよ。家庭は家庭として圓滿に行き、戀愛は戀愛として自由に行ふべきものです。太子様の上の方から、こんな手本を出してもらはなくては、愷氣とか姦通とか不道德とかの、忌まわしい

問題が絶滅せないので。一夫多婦のモルモン宗を御覽なさい。決して澤山の妻の中に、恠氣や嫉妬や、怨嗟などの聲はありませぬよ。とに角、舊來の陋習を打破せなくては、家庭も國家も治まりませぬ。妾はスダルマン太子様こそは戀愛に對しても理解を持ち、また社會道德に對しても完全に改良する資質をもつた方と伺ひました。それで戀愛はともかく、國家社會のため必要のためと欣慕のあまり遂に戀愛に轉嫁したのですわ、ホホホホ」

と十五才の娘にも似合はず、おひおひと心の生地を現はし、父のシャカナを煙にまいてしまつた。

シャカナ「アアア、十年経てば一昔、この山の奥までも思想界の惡風は襲うて來たのかな」

（大正一四・一・五 新一・二八 於月光閣 北村隆光録）

第二章 戀盜詞（一七二六）

政治學の研究や、新思想の探究に没頭し、タラハン國上下の現状を痛歎のあまり心身疲勞し、さしも明敏なりし頭腦も霞を隔てて山を見るがごとく、朦朧として鮮明を缺ぎ、外の見る目よりは憂鬱病者かと疑はるるまでに煩悶苦惱の結果、殿内深く閉ぢ籠もつて、父王の頑迷固陋なる骨董品的教訓を嫌ひ、また老臣どもでんないふか と こふう あたまの時代後れの古風の頭より絞しほり出した、種々の忠告にも耳を貸かず、左守の司じだいおく こふう あたまの倅アリナを唯一の慰安者となし、己が思想の伴侶となし鬱陶しき日を送つてゐたスダルマン太子は、たまたま山野の遊びに山深く迷ひ込み、不思議にも、山奥に咲き匂ふ姫百合の花に戀の炎を燃やし、心を後に萬斛の涙を心中深く湛えながら、アリナと共にタラハン城内へ歸つて來た。

女といふものに對しては初心の太子、戀愛といふものに對してもなほさら初心の太子、美の神の權化とも見るべき清淨無垢の乙女が、人間界をかけ離れた、淺倉谷の山奥に包まれてゐたその容姿に憧憬し、數年來の沈鬱性は一變して、危ふいかな、尊貴の身を保ちながら暗雲飛び乗りの離れ業を演ぜむとし、山靈水伯の精になつた美人の相を、自らが得意の繪筆に描いて床の間にかけ、朝な夕な畫像

に向かつて生きたる人に言ふごとく、何事か獨語するに至つた。この畫像こそ人間の命取り、男殺しの大魔者である。太子の煩悶は以前に百倍し、立つても居てもみられないやうな様子となつてきた。

太子の御心ならば、たとへ地獄のドン底でも、一つよりない命でも無雜作におつぱり出すといふ忠臣にして、唯一の太子の伴侶たる左守の倅アリナは、夜ひそかに命を奉じ、山奥の名玉、月の顔容、花の姿、温かき雪の肌に包まれた、天津乙女の化身を山奥より引きずり出し、ひそかに太子の御心を慰めむものと草鞋脚絆に身を固め、服装も輕き蓑笠の夜露を浴びて、主を思ふ心の一筋途、一筋繩では行かぬ左守のシャカンナを、夏の炎天に地上萬物を露す夕立の雨の「ふるなの辨をふるひ、邪が非でも、縦でも横でも頑固爺を納得させ、肝腎の玉を抱いて歸らねばおかぬと雄健びしながら、タニグク山の山口、玉の川の下流、岩瀨の深森に着いた。

夜はほんとのりと明け放れむとする時、路傍の岩に腰打ちかけ、二つの黒い影が何だか囁き合つてゐる。谷川の岩にせかるる水音に遮られつつ、しかと言葉の

筋は解らない。アリナは、谷道に直立して、頭を傾け思ふやう、……もはや夜明けに間もない曉の空に二人の男が囁き、合點のゆかぬ事だワイ、噂に聞く左守のシヤカンナが一ヶ月以前まで抱えてゐた山賊の片割ではあるまいか。何はともあれ足音を忍ばせ、様子を窺ひ見む……と息を凝らして進みよつた。二つの影は傍に人の寄り添ひをるとは知らず、盛んにメートルをあげてゐる。

ハンナ「オイ君、この間天帝の化身とかいふ山子坊主が連れて来たダリヤ姫とかいふ美人のことを思ひ出すと、俺のやうな戀愛觀念の濃厚な色男に取つては、實に感慨無量だ。君だつて平素の偽善的言辭も兜を脱いで俺の持論に贊意を表したくなるだらう」

タンヤ「堂々たる天下の男子が、女々しい戀愛だの、神聖だなぞと騒ぎ廻つて風俗壞亂の火の手を煽ふり、自分もまたその火中へ喜んで飛び込んで行く悲惨の狀態を見ると、實に世の中の奴の腰抜け加減に愛想が盡きてしまふわ。ヘン、泥坊稼ぎの身分でありながら、戀愛の、神聖のとは臍茶の至りだ。オイ、ハンナ、そんなハンナリせぬ腰拔論は聴きたくないから、俺の前ではもう言つてくれな。氣

分ぶんが悪わるくなるからのう」

「ヘン、泥坊どろぼうだつて戀愛論れんあいろんが出来できない理由りゆうはあるまい。先まづ聞き玉たまへ、俺おれの名論めいろん卓説たくせつを」

「今日は僕ぼくも死しんだ女房にようぼうの命日めいにちだから、供養くやうのために、君きみの迷論めいろんに對たいし充分じゅうぶんなる攻撃こうげきを試こころみる心算つもりだが、得心とくしんだらうね」

「面白い、僕ぼくの戀愛論れんあいろんに口くちを入いれる餘地よちがあるならやつて見み玉たまへ。しどろもどろの受太刀うけだちが折をれて、きつと僕ぼくの軍門ぐんもんに降くだるは火ひを睹みるよりも明あきらかな事實じじつだ。才さい

ホン、日進月歩にっしんげつぽ文明ぶんめいの今日こんにちでは、戀愛論れんあいろんに興味しゆみを持たもたないものは、最早もはや人外じんぐわいの境きやう域ゐきに自ら墮落だらくしてゐるものだ。このごろ僕ぼくが大おほいに感かんずる事ことは、性欲せいよくとか戀愛れんあいと

いふ事ことに關くわんする議論ぎろんが、著いちじるしく抽象ちゆうじやう的てきになつてゐることだ。しかし凡すべての議論ぎろんが反芻はんすう的てきで一度吞いちどみ込んだものを、わざと抽象ちゆうじやう的てきにして出だしてゐるように僕ぼくには見み

えてならぬ。ヤレ戀愛れんあいは神聖しんせいだとか偏へん的てきだとか、性せいの問題もんだいはかくあるべきものだとか、そんな風ふうに戀愛れんあいを自由じゆうなものに考かんがへては不道德ふだうとくだとか、離婚りこんは絶對ぜつたいに不可いけな

いとかいつて、婦人會連中ふじんくわいれんちゆうが首くびを鳩あつめて決議けつぎまでやつたと聞いて、僕ぼくは不可思議ふかしぎ

な心持ちがするのだ。戀愛とか性欲とかいふものは、そんなに簡単に無雜作に片付けらるるものだらうか。今のいはゆる文明人間の言ふがごとく、一でなければ二、二でなければ三といふやうに、簡単に、學問的乃至知識的に片付けてしまうことの出来るものだらうか。僕はどうも左様な考へは持てないのだ」

「ヘン、國家危急の場合に當つた今日、戀愛問題なんか唱へる奴の野呂さ加減に呆れざるを得ないわ。そんな問題は極めて簡単に片付けてしまふ方がよほど人間らしいぢやないか。アタ阿呆らしい、學問上道徳上から見ても戀愛なんか口にする奴は、僕は人間の屑だと思つてゐる」

「オイ、タンヤ、君は無味乾燥な心理を持つてゐるやうだが、世の中は理窟で何ほど押し通したつて、學問や知識でいくら攻めて行つたつて、戀愛といふがごとき人間生涯に關する大問題を、さう易々と片付けるわけにはゆかないよ。却つてそれは空想だ、徒勞だ。どうしても人間には信仰と戀愛が無くてはならないのだから、この問題は極めて慎重に研究すべき價値が充分にあるよ」

「戀愛といふものは人に由つて靈の方面から觀察し、或は肉の方面から見たり、

自然から見たり、または單なる物質から見たりするものもあるが、要するに道德の範圍内においてでなければ、神聖な戀愛を論議する事は出来ぬ。萬々一道徳を度外したる戀愛を唱ふるものありとすれば、それは人間以外の動物の心理状態と言ふべきものだ。

それは君の無味乾燥な頭腦から割り出した一面の見方であるが、たうてい完全なる戀愛、または性を捕捉したものとでは言はれない。戀愛は元來自然と同様に端倪すべからざる性質のものだ。極端に言へば、戀愛なるものは餘りに神聖過ぎて、かれこれと論議する事さへも出来ないくらゐのものだ。戀愛を論議された時には、モハヤその本當のものは何處かに去つてしまつてゐると言つても好いくらゐだ。換言せば、戀愛は靈も肉も自然も物質も凡てを打つて一丸と爲したところのみ、戀愛の髣髴が認められるもので、何もかもが凡て同時にあるのだ。靈肉一致とは好く言つたものだが、それでさへ充分でないほど流動的なものだ。だから戀愛を論ずるに當つては君の説のやうに、普通の倫理的論法で、斯うだから彼だとか、彼だから斯うだとかいふことは出来ない。普通一般的の事實なら、どんな事でも

結果から押して考へてゆけば、答へは可なり正確に出てくるが、戀愛だけに限つて、さう簡単に片付かないよ。知識や倫理的になつた時には、もはや戀愛とか性とかいふものの粕屑であつて、君のごとき學者や、論客が何ほど鹿爪らしい議論や意見を立てて、自分こそは古來の戀愛論の上に新しい、そして的確な、正當な、一見地を加へたものと自惚れてゐても、徒に粕屑を掴んで金剛石のやうに思つて大騒ぎをしてゐるだけで、戀愛の本體は何時の間にもやら千萬里の遠方へ滑つて逃げて往つた後なのだ」

君の説は全然道德を無視し、社會の秩序が紊亂し、家族制度が破壊されても、戀愛さへ満足にやつてゆけば、それで天下は泰平だといったやうな惡思想だ。人間は自由も戀愛も必要のものだらうが、社會や家庭の秩序を紊してでも戀愛を神聖視するのは、動物性を帯びて、外道の主張だ。僕は贊成する事は出来ないよ。三角問題や、離婚問題が頻々として社會に續出するのも、君のごとき惡思想のものが霸張るからだ。戀愛といふものは、成るほど神聖なものではあるが、少しは慎みと言ふこと、または倫理の點を考慮して始めて神聖な戀愛とも言へるものだ

と思ふ。君の戀愛論はいはゆる風俗破壊論の變態だ」

君のやうに、戀愛を道德的問題視し過ぎては、その本體は既に蔭も形も無くなつてしまふ。いつの間にか指の股から滑り落ちてしまつてゐるのだ。それにも氣が付かず、後に残つた戀愛の粕屑ばかりを捉へて、かれこれと論議してゐるやうだ。僕たちは、モウ少しそれを活動的存在物として、刹那刹那に深く觸れてゆく事を念とせなくてはならないだらうと思ふのだ」

「戀愛は一夫一婦の嚴守によつて始めて神聖たり得るのだ。そして人間たるものは飽くまでも一夫一婦の道を守つてゆかねば人間としての品格が保てない。故にどこまでも倫理的でなくては、戀愛は成立せないと思つて、僕は泥坊稼ぎのかたはら永年努力してゐるのだ」

「他人の婦女を強姦し、財産を掠奪するを以てモットーとする泥坊稼ぎの身でゐながら、一夫一婦論や、道徳心をもつてこの問題に對し、永年の努力を惜しまない君の精神と勇氣には大いに感服するが、實際その場に臨んで、君の堅固な主張が守れるか守れないかは第二の問題として、とにかくも努力しようとするその心

懸けは僕は愛する。現に僕なども三角状態の苦しい立場に立ち、戀愛の好い加減でない事を痛感し、人間の魂の玩弄すべからざることを痛切に知つた時には、「やつぱり一夫一婦の制度が結構だなア。さういふ風に出來てゐるのだなア」といふ風に獨語せずにはゐられなかつた事もある。ゆゑに僕も愛情の濃かな、一夫一婦の仲、お互ひに他に目を移す餘裕のない、圓滿にして且つ濃厚な夫婦の仲を尊敬する一人だ。しかしそれは原則としてではない。ただ好い事だといふだけに止めたいのだ。何故ならば、自然はそんな何簡單に言つてしまふことの出来るものではないのだ。また一夫一婦が如何に理想的であるからといつて、皆の人間が譯もなく行ふことが出来るやうでは、また出来るやうに此の自然が出来てゐては、それこそ人生は單調になつてしまつて、微妙な美の波動もなければ、細微な感情の渦巻きもなく、全く色彩のない荒涼たるものになつてしまふ。否それだけならまだ我慢が出来るとしても、それでは結局この人生が成り立つてゆかない。悪く型にはまつてしまつたやうになつて、少しの餘裕もなく、終には破綻百出するに至るものだ。また單に生殖といふ點から見ても、そんな事ではとても人生は成立

してゆかないのは好く判る。そこで君の一夫一婦説も悪くはないが、皆の人間がそれになつては困るといふ形になるのだ。戀愛はモツと自由で澆刺として、さうした人間の理智や意識でこしらへた、希望とか理想とか、道義とか品行とかいふ型のやうなものなどは、幾何出來ても、手早く且つ容易に内部から打壞してしまふ強い力を持たなければならぬと言ふことになるのだ」

君のごとき自由戀愛論者の性欲萬能主義者には、僕も大いに面喰つた。開いた口が閉がらないわ。何なりと御勝手に喋舌つたが好からうよ」

「誤解しちや困るよ。僕だつて決して自由戀愛主義者ではない。また單に性欲の満足のみを求めて世を亂さうとするものでもない。かつては僕は自然主義の唱道者として、獸類に近い無殘な性欲を恣にするものだといふやうに、世間から勝手に定められてしまつたこともあつたが、決して僕は性欲萬能宗の信者ではない。ただ僕は戀愛といふものは、さういふ自由な奔放なものだといふ事を主張するのだ。單なる知識になつてしまつては、約り前にも言つた通り、粕屑的論議になつてしまつては、澆刺とした流動的存在としては、到底そんな風に定めてしまふこ

とは出来ないといふことを言ひたいのだ」

「君の説の如きそんな無檢束なことは許せない。君がさう言ふふうには戀愛なるものを見るなれば、それだけでモウ立派な正札付きの自由戀愛論者ではないか」

「そのやうにも淺く考へたら取れるだろうが、その點は實に難いのだ。そこに非常に深い細かい、ともすれば見落してしまひさうなデリケートな、心理的境地が存在してゐるのだ。それは一種の理解であるとも言はれるが、また一種の感激だと言ひ得る。更に言ひかへて人間乃至人生に對する、大きな自然に對する溜息が在るとも言へる。約まり何うにも成らないといふ心持ちに近いものだ。戀愛なるものは到底見通しする事の出来るものではない。單純であつて、しかも深奥なものだから、取らうと思へば直ぐそこに在るが、さて何處までいつても端倪されるものだ。この心持ちが約まり戀愛の純な所なのだ」

「全然君の説は二十世紀頃に生きてゐた小説家の田山花袋のやうなことを言つて

「當然だよ。實は田山花袋の戀愛説に心酔してゐるのだ、アハハハハ」

「オイ、もう夜が明けるぢやないか。戀愛論も、よい加減に幕をおろし、いよいよこれから本業に取りかかるとせうかい。この間天帝の化身と稱する玄眞坊が連れて來よつたダリヤ姫も頗る素的な美人だつたが、しかし彼奴は、既に鼻の先が割れてゐる。そんな古めかしいものよりも、どうだ、甘く親分の所在を突き止めて、あらむ限りの胡麻を擦り、元のごとく乾兒に使つてもらひ、隙を考へて、スバル姫を奪ひ取り、タラハンの町へそつと連れ行き、金にかへやうものなら、一萬兩や二萬兩は受け合ひの西瓜だ。どうだ一つ二人が協力して甘く目的を達成し、その金をもつて立派な商賣を營み、天晴れ紳士となつて世を送らうぢやないか。戀愛論も戀愛論だが、俺に言はせれば花より團子だ。華を去り實に就くのが最も安全なるやり方だよ」

「俺もお前と約束して此處までやつて來たのだが、あのスバル姫はどことはなしに優しみがあつて、あれほどの美人を娼婦に賣るのは何だか可哀さうな氣がする。甘く目的を達したら、あの女をそんな泥水に落さず、どうだ俺の女房にスツパリと呉れる雅量はないか。俺だつて何時までも金鎚の川流れぢやあるまい。きつと

頭あたまを上げる時ときがある。その時ときにはお前まへに百萬兩ひやくまんりやうでもお禮れいをするからなアア」

「へん、甘い事ことをおつしやりますわい。お前まへのやうな猿面野郎ざるめんやらうがスパール姫ひめを戀れん慕ぼするなんて性せいに合あはないわ。そんな空想くうさうを描えがくよりも、甘つまく姫ひめを奪うばひ取り、お金かねにした方ほうが何なにほど徳とくだか知しれないよ。又またかりに、貴様きさまの女房にようぼうにスパール姫ひめが成なつたとしたところで、貴様きさまのド甲斐性がひしやうでは姫ひめを満足まんぞくさす事ことも出来できまいし、しまひの果はてには……ド甲斐性かひしやうなしだ、腰拔こしぬけ野郎やらうだ、馬鹿野郎ばかやらうだ……と姫ひめの方ほうから愛想あいさう盡つかさされ、捨すてられるのは今いまから見みえてゐる。萬々まんまん一山奥いちやまおくに育そだつた未通娘おほこむすめだから、お前まへの意志いしに従したがふにしたところで、俺おれをどうするのだ。貴様きさまが出世しゅつせした時とき俺おれに報ほう酬しうをやると言うたが、貴様きさまの力ちからではミロクミロクの世よまで待まつたところで到底たうてい覺束おぼつかない話はなしだ。それよりも甘うまく手てに入はいつたら賣うり飛とばすに限かぎるよよ」

「俺おれとスパール姫ひめとが圓満えんまんなホームを作りつくり、そして姫ひめは天成てんせいの美人びじんだから、立派りっぱな美人びじんを生うむに相違さうあない。世よの諺ことわざにも出藍しゅらんの譽ほまれとかいつて、あんなものがこんなものを生うんだかといふ事こともある。雀すずめが鷹たかを生うむ譬たとへもある。然しかるに況いはんや孔雀くじやくにも比ひすべきスパール姫ひめ、出来できた子こはきつと鳳凰ほうわう以上いじやうだらう。その鳳凰ほうわうを今いまから貴様きさま

にやることの約束やくそくしておかう。貴様きさまがそれを女房にようぼうにせうと、何萬圓なんまんえんに賣り飛ばさうと勝手かってだ。暫くしばひ時節じせつを待つてくれ。時節じせつさへ來れば煎豆いりまめにも花はなが咲さくといふかららのうら」

「へん、馬鹿ばからしい、俺おれだつてやつぱり男をとこだ。貴様きさまがスバル姫ひめに戀慕れんぼした如ごとく、俺おれだつてやつぱり戀慕れんぼの心こころは同様どうやうだ。お前まへは戀愛れんあい戀愛れんあいと議論ぎろんばかりで立派りつぱに喋舌しゃべり立たてるが、いつも見事みごとに成功せいこうした事ことはあるまい。十人じふにん口説くどいて一人ひとり應おうずれば一割いちわりに當あたるから、まんざら捨すてたものではないとお前まへは何時いつも言いつてゐるが、百人ひゃくにん千人せんにん口説くどいたつて、その御面相ごめんさうでは半人はんにんだつて應おうずるものはあるまい。今いままで一人ひとりでも成功せいこうしたものがあるなら言いつて見みよよ」

「へん、偉えらさうに言いふない。俺おれだつて戀愛れんあいについては、いささか自信じしんをもつてゐるのだ。まづ僕ぼくの女をんなに對たいする戀愛れんあいの實際じつさいは、今日けふまでの經驗けいけん上じやう、いつでも半分はんぶんだけには必かならず成就じやうじゆしてゐるのだ。要えうするに戀愛れんあいなるものは、男女だんぢよ二人ふたりの間に合意がふいてき的に成立せいりつつものだから、その合意がふいてき的てきの半分はんぶん、即すなはち男をとこの俺おれだけは確たしかに成功せいこうするが、未いまだ嘗かつて、女をんなの方に、實際じつさいの事ことを言いへば出來できた事ことがない。それだから僕ぼくの戀愛れんあいは半はん

分は間違ひなくきつと成就するのだ」

「ウフフフフ、ヘン馬鹿らしい。貴様はよい馬鹿だなア。馬鹿者の典型とは貴様の事だよ。議論ばかり立派にべらべら喋舌るが天成の鈍物だから、いな馬鹿野郎だからお話にならないわ」

「どこやらの教へにも「阿呆になつてみて下されよ。阿呆ほど結構なものはないぞよ。阿呆になつてをらねば物事成就いたさぬぞよ」と言ふ事があるぢやないか。

阿呆はいはゆる馬鹿野郎だ。俺は馬鹿野郎をもつて天下の誇りとしてゐるのだ。よう考へて見よ。彼奴は學者だ、智者だ、才子だ、策士だと世間から言はれてゐる小賢しい人間よりも、世の中は馬鹿野郎の方が最後の勝利を占むるものだ。天下に油断のならぬものは、美人の鼻聲と、阿呆と、暗の夜だと言ふぢやないか。況んや現代の如き神經過敏の病的の世の中では、馬鹿でなくては、世に立つ事は出来ないよ。いかに猛烈なバチルスにも犯されず、バクテリアにも左右されず、俗物共の相手にもしられず、萬事がボーとして無頓着でトボケたやうな、馬鹿氣たところに處世上、無限の妙味があるのだ。馬鹿なるかな、馬鹿なるかなだ。サ

アこれからお前と俺と一致してこの大馬鹿を盡しに行かうぢやないか。シャカンナに取捉まえられて、死損ねになるもよし、スバル姫に肱鐵をかまされて馬鹿を見るもよし、ともかく人間は馬鹿に場敷を踏まねば何事も成功しないものだ。一層のこと思ひ切つて、淺倉谷の方面へ馬鹿力を現はし強行軍と出かけやうぢやないか。こんな所に鳶の糞を頭から浴びて石佛のやうに取越苦勞をしてゐるのも馬鹿らしい。サア行かう」

「よし、もうかうなりや仕方がない、馬鹿ついでだ。全隊進めオ一二」
と谷間の細路を小足に刻みながらチヨコチヨコ進み行く。

アリナは萬感交々胸にたたへつつ、二人の話を聞いて飽くまで追跡し……父娘の危難を救はにやならぬ。いや却つて父娘兩人を都へ引き出すには好い機會が出來たのかも知れない……といそいそしながら進み行く。しかしながら平坦な都大路を車馬の便によつて歩んでゐたアリナの足の運びは、到底山野に慣れた山賊の足跡を追撃するには餘程の困難を感じられた。二人の小盗兒の影は、いつの間にか山の裾に遮ぎられて見えなくなつてしまつた。

第三章 山出女(一七二七)

世人の相棒にも使はれず、何事にも茫然として無關心な馬鹿者ぐらゐ、世の中に幸福にして且強いものはない。そこに馬鹿者の無限の妙味が存在するのである。馬鹿はほとんど人間が不可抗力を備へた者の稱號である。素よりせせこましい、齷齪たる普通一般の規矩定木を以て律することの出来ない困り者である。古往今來洋の東西を問はず、如何なる醫學博士も耆婆扁鵲も、サツパリ匙を投げて、「アア馬鹿につける薬がない」と歎息し、豊臣太閤も、馬鹿と暗の夜ほど恐ろしいものはないと言つて、恐怖心に襲はれ、何ほど嚴格なる規則の下におかれるも、「彼奴は馬鹿だから」との一言に無限の責任を免除され、いよいよ念のいつた阿呆になると、白癡瘋癲と稱號をいただいて、犯罪も法律も制裁を加へられず、

更に馬鹿が重なつて、「馬鹿々々しい奴」と笑はれた時は、人間の萬事一切の缺點を公々然許され、却つて愛嬌者と持てはやされる。また馬鹿を金看板に掲げて、浮世の中をヤミクモに押し渡る時は、向かふ所ほとんど敵影なく、毫末の心配もいらぬ。世の中の人間から小才子と呼ばれ、小伶俐と稱へられてゐる奴等は、何れも平常、屁のやうな、突張り所のない、毀譽褒貶の巷を飛びまはり、餓鬼が食を争ふ如き、ホンの目の前の成敗や、利害に掴み合ひ、晝夜煩悶苦惱を續けて一生を終る者が多い。しかるに悠悠閑々として、この面白い人間の隠れ場所は、馬鹿者の名稱たる事を知らず、ワザとに焦り散らして吾が一身を小刀細工に削り取り、アア痛い苦しいと日夜に悲鳴をあげて悶えてゐる憐れな世の中だ。

凡て人間は平常から智慧を蓄めておいて、一朝事ある場合の間に合はさむと、大才大智の者は、平常は妄りに小智小才を月賦的に小出しをせず、用のない時は皆馬鹿の二字に隠れて、のんのこ、シヤあつくシヤあと、馬耳水蛙に晏如として「をさ」まつてゐるものだ。「アア此奴ア驚いた。彼奴アあんまり馬鹿に出来な

いぞ」と、俗物どもに一語を言はせるのは、これ全く馬鹿の名の下に久しく本能

を祕してゐた奴の現はれる時だ。「馬鹿に強い奴。本當に馬鹿に偉い奴。このごろは馬鹿にやり出した。馬鹿に威勢が佳いぢやないか。馬鹿に落着いてゐやがる。馬鹿によく賣れる。馬鹿に美味しい。馬鹿に奇麗だ。馬鹿にならない」などいふ言葉は何れも平常小俐巧な奴が大才子のために鼻毛をぬかれた時の驚歎の言葉である。「あんまり馬鹿氣で彼奴には相手になれない」などいふ言葉は、大智者の最も深く馬鹿の奥に潛伏してゐる時だ。

ハンナ、タンヤの兩人はまた馬鹿者の選に洩れない代物であつた。しかしながら此の二人は口には哲學を囁り、戀愛論をまくし立て、たまには政治論も喋々するが、何れも天性の智慧から出たのではなく、縁日の夜立店に埃まびれになつて曝されてゐる古本を、二錢か三錢で値切り倒して買つて來て讀みあさつた付け知恵なのだから、眞の徹底した馬鹿者である。馬鹿の名に隠れて、巧く世を渡ることは知らず、自分の馬鹿から、「自分ほど智者はない、學者はない、現代の新人物は俺だ、泥坊の、たとへ仲間といへども、決して自分の心は曲つてはゐない。そして誰にも盜まれてはゐない。生れつき、自分は才子だ、智者だ。たとへ如何

なる人物といへども、自分の智囊を絞り出して、千變萬化の手術を盡し立向かつたならば、一切萬事易々として成就するものだ」と自惚れてゐる。時々強くなつてみたり、弱くなつてみたり、進退動作常ならざるを見て、「自分は處世上の兵法をよく心得た策士だ、軍師だ」と自惚れ、失敗をしても「これは何かの都合だ。惟神的に神がかうさせたのだ。キツと悪い後は善い。善い後は悪いものだ。失敗は成功の母だ。賢人智者は凡人の下ばたらきをなし、愚者は天下をとる者だ。さうだから自分は假令賢者でも愚者を装つてをらねばならぬのだ。どんな愚者々々した事でも、馬鹿の名の下には、流れ川で尻を洗つた如く解決がつくものだ……」などと自分の馬鹿を棚へ上げ、自ら馬鹿を装うて世を巧く渡つてゐるような心持ちである奴だからたまらない。此奴こそ本當に箸にも棒にもかからない、捨場所のない眞馬鹿者である。

ハンナ、タンヤの二人は、左守の倅アリナが追跡してゐることは夢にも知らず、慣れた足許にて坂路をトントンと鳥の翔つごとく登りつめ、漸くにして谷川傳ひに淺倉谷のシャカンナが隠家に着いた、シャカンナはスパール姫と共に少し遅い

ながらも朝飯を食つてゐた。

ハンナ「へー、親方、御免なさいませ。久しうお目にかかりませぬ。實のところは玄眞坊の女房ダリヤ姫が夜に紛れて遁走の節、吾々どもは御命令に依り、その所在を尋ねて山野を驅けめぐりましたが、たうとう一も取らず二も取らず、やむを得ずして、タニグク山の岩窟に歸つて見れば、こはそもいかに、豈計らむや、弟計らむや、建物は焼拂はれ、親分様はじめ姫様のお姿は見えず、もし俄かの火事で焼死にでも遊ばしたのではなからうか、もしそんな事であつたら、骨でも拾つて、鄭重な問ひ弔ひをしてあげねばなりませんまいと、一生懸命に灰掻きをやつて見ましたが、骨らしいものは何もございませぬ。ただ猪や狸の骨が残つてゐるばかり。アアこれは親分様が火事に驚き遊ばしてどつかへ一時身をお遁れ遊ばした事だと思ひ、十日ばかりも飲まず食はずで、チコナンと待つてをりました所、風の便りさへ梨の礫の音沙汰なく、やむを得ず、吾々は解散と出かけました。しかしながら肝腎の時になつて、親分様をこの山奥に捨て、立ち去るといふ事は、いかにも乾兒の吾々として、情において忍びないと、タンヤと二人が互ひに抱き

合つて泣きました。本當に親分乾兒の情合といふものはまた格別のものでござい
ます、アンアンアン」

シヤ「ワツハハハハ、汝等も小むづかしい厄介な爺がをらなくなつて、さぞ鞆丸
の皺伸ばしをやつただらう。俺も厄介者が取拂はれ、身輕になつて、百日百夜も
疼き通した腫物が俄かに跡形もなく散つたやうな氣分になつたのだ。モウ俺はこ
の通り世捨人となつた以上は、再び泥坊稼ぎはやりたくない。汝もいい加減に、
足を洗つて正業に就いたが可からう」

ハンナは頭をかきながら、

「エー、親分とも覺えぬお言葉、それほど私に信用がございませぬかな。私は眞
心より親方を愛してをります。のうタンヤ、お前いつも俺の言葉を聞いてゐるだ
らう。日に何十回となく、親方の名を呼ばなかつた事はなからう」
タ「ウン、そらさうだ、お前のいふ通り、俺の聞く通りだ。何と言つても心が正
直なものだから、メツタに親分の前で、嘘は言はうとも思はず、言はれもせぬワ。
なア親方、どうぞハンナや私の心を信じて下さい」

シャ「ウン、お前の心の底まで虚か偽か、善か悪かよく信じてゐる。お前は俺には用がないはずだ。スバル姫に用があるのだらうがな。それについてはこのシャカンナは大變な邪魔者だらう。御迷惑察し入るよ、アツハハハハ」

ハ「そら親方、御無理ぢやございませぬか。姫様はまだ少女の御身の上、戀でもなければ色情でもない。また姫様は吾々がお小さい時からお育て申したものの、イヤお世話をさして頂いたお方ですから、別に深い御恩もございませぬが、親分さまには永らくお世話になつてゐますから、親分の御恩は決して忘れませぬ。お嬢様は何の御恩もありませぬ。況んや戀愛などの心は毛頭持つてをりませぬから、どうぞ御安心下さいませ」

シャ「親分にはお世話になつたと口には言つてるが、心の中では、永らく親分の世話をしてやつた。親分は外へも出でず、乾兒ばかり働かして、乾兒の膏を舐つて、親分は食つてたのだ。つまり「自分は親分の救ひ主だ。保護者だ。親分に禮を言はずのが當然だ」ぐらゐの心で來てるだらうがな」

ハ「なるほど流石は親方だ。よく吾々の心の底まで透見して下さいました。天下

一人の知己を得たりといふべしだ。のうタンヤ、この親分にしてこの乾兒ありだ。何と恐ろしい目の利く親分ぢやないか」

タ「そらさうだとも、何と言つても二百人の泥坊を腮で使ひ、そして自分の生んだ「ひんだ」の粕を、澤山の乾兒に嬢様嬢様と言はして威張らしてござつたのだもの、ずゐぶん凄腕だよ。なア親分、私の觀察は違ひますまい」

シヤ「タンヤの觀察もハンナの評察も、俺の推察もピッタリ合つてゐるやうだ。しかしながら俺の娘を汝達は奪つて歸る相談をやつて來たのだらう。年老いたりといへど、俺の腕にも骨もあれば力もある。汝等のやうな、青二才の挺にはチツと合ひかねるぞ。姫が欲しければ、腕づくで持つて歸つたが可からう」

ハ「ヤア、こいつア面白い。何ほど強いといつても、タカが老耄一人、この邪魔者さへ拂へば、あとは此方の者だ。今までは大親分といふ名に恐れて、何だか敵對心が臆病風を吹かしよつたが、もうかうなれば五文と五文だ。こちらは二人で一錢だ。オイ一錢と五厘との力比べだ。勝敗の數は已に定まつてゐる。只一錢に打亡ぼされるよりも五厘五常の道を辨へて、スツパリと娘を此方へ渡せ。拙劣に

バタつくと爺おやぢのためにならないぞ〆

スバールは食事しょくじの手てを止め、二人ふたりの面かほを微笑びせうをうかべながら打ち眺ながめ、大膽不敵だいたんふてきな態度たいどでおさまり返かへつてゐる。

シャ「言いはしておけば、舊主人きうしゆじんに向むかつて雑言無禮ざふごんぶれい、容赦ようしやはいたさぬ、この鐵拳てつけんを喰くらへ〆

と首くびも飛とべよとばかり、ハンナの横面よこじらをなぐりつけむとする一刹那いつせつな、ハンナは身をすくめてシャカンナの足あしを掬すくつた。シャカンナは狭せまい庭にはにドツと倒たふれ、庭にはの石いしに後頭部こうとうぶを打ぶつつけ氣きが遠とほくなつてしまつた。二人ふたりは手早てはやくシャカンナを荒繩あらはなをもつて手足てあしを縛しばり、谷川たにがはに持もち運はこんで水葬すみさうせむとする。これを見みるよりスバール姫ひめは父ちちの大事だいじと、死物しにものぐる狂くるひになり、鉞まさかりをもつて二人ふたりの背後うしろよりウンとばかり擲なりつめた。二人ふたりは目早めはやく體たいをかはし、跳とりかかつて、鉞まさかりを奪うばひとり、スバール姫ひめを大地ちにグツと捻ねぢ伏ふせ、手足てあしを括くくつて動うごかせず。スバール姫ひめは悲鳴ひめいをあげて、聲こゑをかぎりに泣なき叫さけぶ。

この時とき一町いちちやうばかり手前てまへまで、林はやしを潛くぐつて進すすんで來きたアリナは、娘むすめの悲鳴ひめいを聞きき、

吾が身を忘れて、走り來たり見ればこの態である。……ヤア此奴は今朝見た曲者、懲らしめくれむ……と、物をもいはず、襟髪を掴んで淺倉山の溪流へ、二人ともザンブとばかり投げ込んで了ひ、兩人の繩目を解いた。スバル姫は紅葉のやうな優しき手を合はして、救命の大神を感謝した。父のシヤカナは精神朦朧として殆ど人事不省の態である。アリナとスバル姫は一生懸命に祈願を奉り、水を面部に吹きかけなどして、やうやくの事で、シヤカナの精神状態は明瞭になつて來た。

シヤ「アア娘、其方は無事であつたか。まあ結構々々、これも全く天のお助けだ」
ス「お父様、私も縛られてみましたの。危ふい所へ、あとの月太子様のお伴をしてお出でになつたアリナ様が現はれて、私や貴方を助けて下さつたのですよ。サアお禮を申して下さい」

シヤ「カナはスバル姫の聲に目をさまして、よくよく見れば、アリナは恭しげに大地にしゃがむのである。

シヤ「アア其方はアリナさま、よくマア助けて下さいました。あなたは吾々父娘

が再生の恩人です。サア、どうぞうちへお這入り下さいませ」

ア「危ふい所でございましたが、先づお氣がついて何より重疊でございます。左様なれば、休ましていただきませう」

とシャカナナを助け起し、スバル姫と共に老人の手を引いて屋内に進み入つた。シャ「アリナさま、どうも有難うございます。そして太子様はお變りはございませぬか」

ア「ハイ、有難うございます。先づ先づ御壯健の方でございます。ついては太子様のお使に参つた者でございますから、どうぞ使の趣を、お氣が休まりましたゆつくりと聞いて下さいませ」

「イヤもう氣分は良くなりました。太子様のお使とあらば半時の猶豫もありませんまい、どうか其お旨を傳へて下さい。身に叶う事なら、吾々父娘が力のあらむ限り御奉公を致しますから」

「ヤ、早速の御承引有難うございます。かいつまんで申しますれば、太子様は始めて貴方父娘にお會ひ遊ばし、年老いたりといへども氣骨稜々たるシャカナナ様

のお心ゆき、次いでは世に稀なる美貌のスパール様、王妃としてお召抱えになつても恥づかしからぬ者と思召し、今日のところは少し時機が早いやうでございませが、それだと言つて、太子様には非常な御戀慕、矢も楯もたまらぬ勢ひ、一時も早くスパール様のお顔が見たいとの御思召し、侍臣の吾々はその御苦衷を察し奉り、ジツと見てゐられぬやうになり、人目を忍んでこのお館をお訪ね申したのでございます」

何事の仰せかと思へば、スパール姫を御所望との御事、娘に異存さへなくば御命令に随ひませう。しかしながら未だ私の都へ出る時機ではございませぬ。何といつても時勢遅れの古ぼけた頭、政治の衝に當るのは却つて太子様に御心配をかけるやうなものでございますから、其儀ばかりはお断り申したうございます。幸ひこの山奥に潜んで不幸を重ねながら、山の木の枝に首も吊らず、川の底に身も投げず、鐵砲腹もいたさず、ともかく無事息災で今日まで生き永らへて來ました経験もございませぬば、どうか私の事はお心にかかけさせられないやうお願いいたします。役に立たない私のやうな者が都へ上つたところで、太子様の御厄介、人

間一疋の放し飼ひの飼殺しも同然、今日の社會に接觸のうすい吾々が、繁雜な世の中に、どうして立つて政治が出来ませう。形ばかりの茅屋は古く、狭く、穢しうございまするが、娘を出した後の獨身者の自炊にはあまり狭さを感じませぬ。どうぞ此儀ばかりは平にお斷りを申します」

「アア實の所は、まだ父王様のお許しもなく、太子様お一人のお考へでございませから、同じ事なら、モウ一二年あなたは此處に居つて、時節を待つて頂く方が、雙方に都合が可いでせう。そして嬢様は私がソツとお伴をいたし、茶の宗匠タルチンの館にお圍ひ申し、御身の御安泰を保護いたしますれば、どうか御心配なく、嬢様を私にお預け下さいませぬか」

「シャ、オイ、スバール、お前は最前からのお話を聞いたであらう。アリナさまに伴はれて都へ上る氣はないか」

「ハイ、お父さまをこの山奥に只お一人残して私が參るわけには行きませぬ。なる事なら、お父さまと御一緒にお伴が願ひたいものでございます」

「ハハハハ、父に對する孝養と、夫に對する戀愛とは別問題だとお前も言つたで

ないか。戀愛神聖論の御本尊たるスバル嬢さま、決して、父に遠慮會釋はいらぬ。一時も早く愛し奉る太子様の御前に出るが可からう。しかし必ず太子様にお目にかかつてても氣儘を出しては可くませぬぞ」

「ハイお父さま、有難うございます。左様なれば都へ上ります。どうか御氣嫌ようお暮し下さいませ。そして一時も早くお父さまをお迎へに参ります。そしてお父さまのお顔を早く見るのを樂しみに私は暮してをりますよ」

と嬉しくもあり悲しくもあり、親の死んだ日に新婿を貰うたやうな心に充たされてゐた。この翌日からは淺倉谷の名花たるスバルの姿は見えなくなりぬ。

(大正一四・一・五 新一・二八 於月光閣 松村眞澄録)

第四章 茶湯の艶(一七二八)

タラハン市の町外れ、裏は薄濁つた可なり廣い溝が流れてゐる。常磐木のこん

もりとした餘り廣からぬ屋敷の中に、茶湯の宗匠タルチンの形ばかりの茅屋が建
つてゐる。家は古く狭けれども、宗匠一人が獨身生活には可なり廣い。しかも母
屋と離れて煩き物音も聞こえず、生い茂れる庭の植込みを吾が物と見れば、世間
體を飾つた紳士紳商の苦しい外觀を飾る別荘よりも遙かに勝り、呑氣で住心地も
よい。春雨に包まるる向日の森、朧月夜に見渡す田圃道、軒端に近い若葉の揺る
ぎ、窓に聞こゆる小田の蛙の泣き聲、見るからに茶人の住みさうな家構へである。
雀の子が羽ばたきをするのは、やがて天空をかける準備だ。猫の子がじゃれる
のは大好物の鼠をとらむとする下稽古だ。年頃の女が鏡に向かつて、顔面や頭髮
の整理をするのは戀愛至上主義を完全に達せむための準備である。
茶の湯の宗匠タルチンは朝早うから、坊主頭に捻鉢巻、腰衣を高くまき上げ座
敷を掃いたり、門を掃除したり、何か珍客の出て来る様子。さうして何となく萬
金の寶を人知れぬ處で拾つたやうな顔付して、ニコニコと笑つてゐる。愚者の一
藝とかいつて、この茶坊主も茶の湯の道だけは可なり覺つてゐるやうである。母
屋の方には宗匠の女房として年の若い體格美に傾き過ぎた布袋女が一人住まつて

ある。五斗俵を軽々と持ち運ぶその力、どこに一點の女らしい處も見えない。顔色黒く頭髪は茶褐色の大女、到底ヒステリ性を尊ぶ小説家の材料になりさうもない奴。もし當世流の才子風より見れば、一切の境遇に何等の意味もなく殆ど生存の要もなく、只一個の哀れ至極なる肉體物に過ぎないのだ。鞋蟲の文學者や、穀潰しの政治家や、蓄音器の教育家や、米搗蠡斯の小役人どもが、仔細らしく茶の湯の手前を誇り、交際場裡の補助にもがなと、茶坊主の茅屋を折りをり訪ねて來るのみで、あまり流行らない宗匠である。身代は瘦せて壁までが骨を出し軒は傾き、上雪隠の屋根から月を見る重寶な住居である。夕立の時にはバケツや、盥、手桶などを慌てまはして座敷中に持ち運び、時ならぬ雨太鼓の音をさせてゐる。此頃この茶室に家と主人に不相當な珍客が、チヨコチヨコ窓の内外から顔を出す事がある。艶々した髪の色、名人の描いた天人の繪から抜け出したやうな美人が、何處とはなしに初心初心しいけれども、さりとして田舎出の女とも見えず、山の猿の娘とも見えず、起居振舞ひしとやかに、頭の先から指の先まで、一寸動けば四邊の空氣は千萬里の彼方まで波動するかと思はるるくらゐ、有情男子の肝魂を

奪つた。宗匠のタルチンは妙齡の美人に向かつて得意の茶道に就いて鹿爪らしき講義を初めだした。美はしき乙女は言ふまでもなくアリナが山奥から生捕つて來た、山靈水伯の精の變化といふべき、スバル姫たる事は言ふまでもない。

タルチン「姫様、女の最も習つておかねばならない事は茶の湯でございますから、今日は太子様の有難き尊き御命令によりまして、卑しき私が茶の湯のお手前を恐れながら傳授さして頂きます。まず茶の湯の講目から心得てをつて貰はなくはなりませんから、あらましの事を申し上げます」

スバル「ハイ、何から何までお世話になりました。有難うございます。何といつても十年ばかりも子供の時から山奥に連れ行かれ、此世の風にも當つてゐないやうな、「おぼこ」娘の世間知らずでございますから、茶の湯に限らず何事も御指導をお願い申します」

タルチンは笑を満面に浮かべ、低い鼻をピコつかせ、三方白の目をきよろつかせながら、フンと右の手の甲で鼻を左から右へ撫で、自分の尻の方でモシヤモシヤとこすりつけ、言葉までも莊重らしく粧ひながら、

「そもそも茶の湯は三ヶの綱領を以て本とされてゐます。さうして茶の湯の仲通なかとほりの習ならひといふのは明德めいとくを明あきらかにするの謂いひであつて、天命てんめいにもとづいて性せいを率ひきゆるの道みちでございます。さて茶の湯も、その大本たいほんを極きはめるならば何いづれの手前てまへも十三手前じふさんが父ちちとなり母ははとなるのです。これから三百八十手前さんびやくはちじふてまへも分わかれるのです。「すべて物は本末ほんまつがあり、事ことには終始しゅうしがあり、前後ぜんごする事ことを知る時ときは即すなはち道みちに近ちかし。その本もと亂みだれて未いまだ其末そのすゑをさまるものは非あらざる也なり」と聖人せいじんが説とかれてゐるでせう。それゆゑに茶の湯は十三手前じふさんてまへを根本こんほんにして諸々もろもろの手前てまへはこの中うちにあるのです。そしてまた許可ゆるしの手前てまへといふところまで稽古けいこが進すすむと技藝ことわざが廣ひろくて、色々いろいろに別わかれます。これ新民しんみんの場ばにして品々しなじな變かはりあり。手前てまへは、その心こころを選せん擇たくするの謂いひであります。古いにしへ東山とうざん殿どのより千せんの利休りきゅうおよび現代げんだいに至いたつて其その命維めいこれ新あたしく、拙者せつしゃの教をしふるところは眞臺子しんだいす七段しちだんは允可いんか至極しごくなり。徳とくを明あきらかにするを本もととなし、民たみを明あきらかにするを末すゑとするが故ゆゑに、茶の湯なるものは仲通なかとほりを本もととなし、手前てまへを末すゑとなすのです。眞臺子しんだいすを本もととなすを至善しぜんとするのです。されば七段しちだんは、その目めくの大だいなるものです。ここにおいてその精美せいびを極きはめ、皆みな以もつてその止とどまる所ところを知る時ときは、少すこしの疑うたがひもなし。

ゆるゑに私の教へるのを茶の湯の眞臺子と申します。まづ茶の湯の席にはこれ此通り四疊半、順勝手といふ事がある。そして順のまはり式とは居疊より左へ廻るのを順と申し、また四疊半に順逆の勝手に習ひがある。順の回り式にして仲の半疊に爐をきり、自在鎖をかけるか、または五徳に釜をかけるか、これを順勝手と申すのです。今私が一つの歌を詠みますから、つけとめておいて下さい」

スバール「ハイ、いろいろと高遠な御教訓を頂きました。有難うございます。何分世間慣れのしない少女の事ですから、さぞお師匠様もまどろしい事でございませう」

と言ひながら料紙箱より硯、筆、墨、巻紙等とり出し、タルチンの読み上げる歌を記し始めける。

タル「一、門に入り右に座敷のあるならば

順勝手とはかねて知るべし

一、亭主居て左へ廻るを順といふ

これは即ち正の字の心

一、家造りかねて思案をしてぞよき

建て上りのなきは悪しきものぞと

一、爐の内の見えにくきほど難儀なは

炭する時に燈火欲しきぞ

一、枯木だも香へと藤をまとわせて

さすが亭主の手利きとは知る

一、野も山も花も香も見ながらに

生ける心を知る人ぞ知る

一、よりよりに埃を拂ふ茶の湯師の

心の塵はさもあらむかし

一、門に入り左に座敷のあるものは

逆勝手ぞと知るがよろしき

一、亭主居て右へ廻るを逆といひ

これは即ち従の字の心

サアサアこの歌によつて爐の構へや室内の様子があらまし解るでせう。あまり一度に澤山教へると、お忘れになるといかぬから、もう少し教へて之で休みませう。また明日から實地の手前を御覽に入れますから。さて茶の湯の講目七段の習ひを申します。

- 初段、大盆、小盆、唐津物、茶入臺、天目
二段、大盆、大海茶入、合子の物置、盆點
三段、大盆袋、天目茶筌入
四段、大盆内海長緒、薄茶臺、天目三組
五段、大盆臺、天目茶碗、二眼點
六段、丸盆、分寮隱架の蓋置
七段、大盆二つ臺、天目穗屋、香爐、蓋置

の次第しだいをもボツボツ教をしへませう」

ス「ハイ、有難ありがたう、どうかよろしう願ねがひます」

かかる所ところへ面おもてを包つつみ足音あしおとを忍しのばせて、空巢あきすねら狙ひとひが人の住宅ぢうたくを覗のぞくやうな様子やうすで、あたりを憚はばかりながら入り来るのはスダルマン太子たいしの君きみであつた。

タルチンは太子たいしの姿すがたを見るより且かつ驚おどろき且かつ喜よろこびながら、米搗こめつき蠡斯ばつたよろしく幾いく度どとなく禿頭とくとうの杵きねで豊たみの上うへに餅もちをつきなながら、玄關げんくわん口くちまで五足いっあし六足むあしスルスルと後あとびざりをなし、雪駄せつたのやうに擦すりへらした庭下駄にはげたを足あしにひっかけ、粹すみを利きかして母屋おもやの方ほうへと、茶色ちやいろの帽子ぼうしを目深まぶかに冠かぶり稍俯ややうつむ向き氣味きみになつて、尻しりをプリンプリンとふりながら庭にはの木立こだちを縫ぬうて歸かへり行く。

野山のやまに嘯うそぶく虎とら、獅子しし、熊くま、狼おほかみも、山林さんりんに嘯さへづる百鳥ももどりも乃至ないしは蟲族むしけら地蟲ぢむしの類るゐに至いたるまで、天地てんちの間に生いきとし生いけるもの、一いっとして戀こひを歌うたはぬはなく、色情いろにおぼれぬものはない。ましてや坊ぼつちやま育そだちのタラハン城じやうの太子たいし、青春せいしゆんの血ちにもゆる好男子かうだんしが、花はなも恥はぢらう天成てんせいの美人びじんの前まへに出でては胸むねの高鳴たかなりを止とどむる事ことは出来できなかつた。スバール姫ひめも同おなじ思おもひの戀衣こひころも、頬ほほを紅くれなゐに染そめながら、片袖かたそでに艶麗えんれいな顔かほを

包んで暫しは無言の幕をつづけけてゐた。戀にかけては初心の太子と初心の乙女、
たがひに言ひたき事も口ごもり、何とはなく戀の曲物にとり挫がれて、

「會ひたかつた、見たかつた、可愛いものよ」

とただ一言の口切りさへも、なし得ぬまでに臆病になつてゐた。さりながら、數
多のよからぬ小盗人と共に、山の奥とは言ひながら、揉まれてゐたスバル姫は、
比較的心も開けオキヤンになつてゐた。スバル姫は思ひ切つて太子の肩に飛び
つき、腕もむしれるばかり固く抱きめて、互ひの熱い頬面をピタリと合せた。
四つの目には戀の叶ふた嬉し涙が滲んでゐた。

スバル姫は思ひ切つて三十一文字に思ひを述べた。

「我君の御幸のありしその日より

今日の吉き日を待ちし苦しき

嬉しくもアリナの君に迎へられ

太子の君に會ひし嬉しさ

吾わが戀こひ路ぢいや永とこ久しへに續つづけかすと
過すぎにし日ひより祈いのりけるかな〆

太たい子し 〆 淺あさ倉くらの山やまに見み初そめし乙をとめ女子ごの

御み姿すがたこそは命いのちなりけり

汝なれ思おもふ吾わが戀こひ衣ころもボトボトと

乾かわく間まもなく涙なみだしにけり

天あめ地つちの神かみの恵めぐみに守まもられて

今け日ふ嬉うれしくも汝なれに會あふかな

人ひとはいざ如何いかに吾わが身みを圖はかゆとも

いねてむ後のちは如何いかで恐おそれむ〆

ス 有ありがた難たし吾わが戀こふ君きみの御み言葉ことばは

賤しづの乙をとめ女の命いのちなりけり

永とこしへ久へに變かはらずあれと祈いのるかな

君きみと吾わが身みの美うつくしき仲なかを

（大正一四・一・五 新一・二八 於月光閣 北村隆光録）

第二篇 戀れん火くわらう狼くわ火

第五章 變へん裝さう太たい子し（一七二九）

タラハン城太子殿の奥の間には、スダルマン太子と、アリナがいつもの如く睦まじげに首を鳩めてある秘密を語り合つてゐる。

アリナ「太子様、昨夜は如何でございました。定めてスバル姫様もお喜び遊ばしたでせう」

太子は稍頬を染めながら、アリナに顔を隠すやうな調子で、

「いやもう本當に愉快だった。人生戀愛の成就した時くらゐ楽しいものはない。餘も生れかへつたやうな心持がしたよ。これと言ふのもお前の盡力の致すところと感謝してゐる」

アリナ「勿體ない、何といふことを仰有いますか。臣下が君のために、あらゆる力を盡すのは當然でございます。しかしながらタルチンの家は見る影もない茅屋で、嘸お窮屈でございましたせう。九五の御身を以て彼のやうな所へお通ひ遊ばすやうにしたのも、皆私の不行届きからでございます」

「それだといつて外に姫を匿す適當の家もなし、お前としては力一ぱい盡してくれたのだ。そんな心遣ひは無用だ。さうしていつも廣い館で起臥してゐる吾が身

は、あのやうな風流な茅屋が大變氣に入つたよ。平民生活の味を覚え、昨日はじめて平民の氣樂な事や、何事も大袈裟でなく簡単に片づく事の味を覚え、實に有難かつたよ。はじめて人間になつたやうな心持ちがした。アア俺はなぜこんな身分に生れて來たのだらう、門の出入にも仰々しい數多の衛兵に送迎され、まるで動物園の虎を送るやうな鹽梅式だ。出来る事なら、お前と俺と地位を代つて欲しいものだ」

「左様に思召すのも御無理はございませぬ。御窮屈の御境遇察し奉ります。しかしながら、殿下はタラハン國の君主たるべく、使命をもつて天よりお降り遊ばした神の御子でございませぬ。是ばかりはどうする事も出来ませぬ。それゆゑ私には能ふかぎり殿下の御自由になるやうと務めてをるのでございます」

「實はアリナよ、お前に折入つての頼みがある。何と聞いては呉れまいかなア。餘が一生の願ひだから」

「父祖代々厚恩を受けた私の身の上、如何なる事でも身命を賭して承りませう」
「早速の承知満足に思ふ。實はアリナ、お前が俺に變装して暫くこの殿内に納ま

つてゐて貰ひたいのだ」

「成るほど、妙案でございますな。私を替玉にしておいて殿下は姫様の匿家へお通ひ遊ばすといふ御考案ですか。半日や一日ぐらゐは化け通す事が出来るでせう。しかし長くなりますと化狐の尻尾が見えますから」

「ハハハハ、化狐か化狸か知らぬが、お前の顔は餘に生寫しといふ事だから、瓦を金に化したやうな事もあるまい。どうか頼むよ」

「殿下の仰せなれば如何なる事でも謹んでお受けいたしますが、金玉の御身に化け濟ましたところで、塗った金箔は直に剥げてしまひますから、これは私に取つて随分重大な役目でございます。私も今日一日か半日か、假に殿下となつて太子気分を味はつて見ませう。殿下は暫く平民気分を味はつて御覽なさいませ」

「アア面白い、どうか頼むよ。今日の夕方から薄暗に紛れて頬被をグツスリとなし、労働服でも纏うて鼻歌でも謡ひ出かけて見よう。どうかその服をそつと調達しておいては呉れまいか」

「かかる御用命は必ず下るべきものと存じまして、ちやんと用意をしておきまし

た
」

「お前は勞働者に知己でもあるのか」

「いえ別に知己と言つてはありませぬが、横町の古物商で買つておきました」

「何から何まで抜け目のない男だな、アツハハハハハ」

「私もまた女といふものの肌は存じませぬが、殿下におかせられてもお初のやう

に伺ひます。如何でございました、ずゐぶん趣味津津たるものでせうなア」

「趣味津津どころか、天も地もタラハン城はいふも更なり、自分の命までどこか

へ吸収されたやうな心持になつたよ。世の中に戀といふものくらゐ神聖な尊貴な

ものはあるまいと思ふ。アアもう耐らなくなつて來た。早く今日の日が暮れない

かなア」

「殿下、あまりぢやございませぬか。あなたは戀の勇者、私はいはば戀の敗者い

な従僕です。従僕の前でさう惚けられてはこのアリナもやり切れませぬわ、アツ

ハハハハ」

「それだと言つて「どんな鹽梅だつた」などとお前の方から餘の情緒を引きずり

出さうとするものだから、戀には脆き餘の魂は知らず知らずに浮いて出たのだ。

アアアリナ、もう餘は耐へ切れなくなつてきたよ」

「大變お氣に召したやうですが、私は一つ心配が殖えて來たやうです。殿下が神聖な戀愛に魂を傾注されるのは大變結構ではありませんが、それがために王家を忘れ、或は平民にならうなどの野心を起されては、お取持ちをしたこのアリナは王家に對し國家に對し、死をもつて詫びても及ばないやうな罪になりますから、そこは餘り熱せないやう程ほどに戀を味はつて頂きたいものです」

「王家は王家、國家は國家だ。王家や國家と戀愛とを混同してもらつては困るよ。餘が王位に上れば國の父として萬機の政治を總攬し、また戀愛としては上下の障壁を撤廢し、天成の意志によつて思ふ存分愛の情味を味はふつもりだ」

「殿下がそこまでお打ち込み遊ばした上は、到底私の言葉は今のところ耳にはお留め下さいませまい。水の出端、火の燃え盛りは、鬼神といへどもこれを制止する事はできぬとのこと。しばらく猛烈な殿下の情炎がやや下火になるまで何事も申上げますまい」

「やア有難い、それが餘に對しての忠義だ。餘といへども決して魂は腐つてゐないから、王家や國家を捨てるやうな事はしないから安心してくれ」

「そのお言葉を承り、すこしく胸が落着きました。どうか充分に注意を拂つて完全に戀をお遂げ遊ばしませ」

「未だ日が暮れないのかな。アアどうして今日は又これほど日が長いのだらう。一日千秋の思ひとはよく言つたものだ。やつぱり聖人は嘘を言はないなア」

「まだ八つ時でございます。夕暮までには二時あまりもございませから、御悠りなさいませ」

「どうも、じつとしては居られないやうだ。餘が魂は向日の森の茶坊主の館を既に已に訪問してゐるやうだ。エエもう堪らない労働服を貸してくれ」

「それはお易い御用でございますが、さうお急きになつても晝の内は人目にかかる恐れがあります。どうして此門をお潜り遊ばしますか」

「アツハハハハ、そんな心配はしてくれな。今日も早朝から裏の高壁を飛び越える稽古をしておいた。精神一到何事が成らざらむやだ。表門や裏門は衛士が立つ

てゐるから、餘は適當な、人目にかからない所から逃げ出すつもりだ」

「萬々一お怪我でもあつては大變でございますから、もう暫くの中お待ちを願ひたいものです」

「や、今日だけは自由に任してくれ。暗雲飛び乗りの藝當も戀のためには止むを得まい。アア、スバル姫はどうしてゐるだらう。きつと白い首を延ばして餘の行く姿を、今か今かと窓を開けて覗いてゐるだらう。アア可愛なものだ。……オイ、スバル、いま行くから待つてくれ。きつと餘は其方を見捨てるやうな事はしない。「永久に永久にミロクの世までお前を愛する」と言つたことは滅多に反古にはしないよ」

アリナは頭を掻きながら、

「もし殿下あまりぢやございませんか。何程あなたのお聲でも向日の森までは届きませぬよ。そして私の前でお惚けをたつぷりお聞かせ下さるとは、ちつと殺生ぢやございませんか。青春の血に燃ゆる私の心も、ちつとは察して頂きたいものでございますなア」

「ウン、それや察してゐるよ。そんな事に粹の利かないやうな餘ではない。お前もその内、どこかでスバールのやうな美人を探ね出し、妻にしたらよいぢやないか。ま一度、どこかの山へ來月あたり遊びに行つて見やうか。またあんな美人に遇ふかも知れない」

「殿下もう澤山です。私は神妙に御名代を務めてをりますから、殿下は變裝遊ばして思ひ切つてお出でなさいませ。すこし夕暮には早うございませが、戀愛の神のお守りがあれば、人目にかからず安全に姫様のお傍に行かれるでせう。サア労働を着ることを教へて上げませう。早く錦衣をお脱ぎなさいませ」

太子はアリナの言葉に得たり賢しと無雑作に錦衣を脱ぎ捨て、眞裸體となつてしまつた。アリナは持つて來た自分の大トランクから労働服を取出し太子に着せた。太子はニコニコしながら、

「オイ、アリナ、どうだ、労働者として似合ふかな」

「如何にもよく似合ひますよ。金看板付きの労働者に見えますよ。殿下はお徳が高いから、どんな衣裳をお召しになつても本當によく似合ひます。労働者として

も實に立派なものですわ。それではスバール姫様がゾツコン戀慕遊ばすのも無理はございませぬ」

「一層のこと、この衣裳は末代放したくない。労働者となつて九尺二間の裏長屋で、姫を世話女房として、一つ簡易生活でも送つて見たいものだなア、アツハハ八八。オイ、アリナ、後を頼むよ」

と言ふより早く身軽になつたのを幸ひ、頬被をグツスリとしながら猿のごとく高壁を乗り越え、深い堀をたくみに飛び越して、城の馬場の密林の中へ姿を隠してしまつた。後にアリナは茫然として溜息をつき、

「アア困つたことが出来て来たものだわい。どうか無事に茶坊主の屋敷までお着き遊ばせばよいがなア。アアこれから生れてから一度も着たこともない錦衣を身に纏ひ、明日の朝まで太子となり済ましてやらうか」

と錦衣を纏ひ自分の着物をトランクの中に納め、わざと物々しく簾をさげ、桐の火鉢を前に置き澤山の座蒲團を敷き、バイの化物然と澄まし込んで見た。

「何とまア猿にも衣裳とか言つて、よく似合うものだなア。どれ一つ、次の間で

鏡でも見て來う」

と言ひながら、つと立つて鏡の間に入り獨語、

「ヤア吾ながら見紛ふばかり太子に能く似てゐるわい。これなら一生化け濟ましたところで、滅多に尻尾を捉まる事はない。太子様は平民生活がお好きなり、自分も同様だが、しかし人間と生れて一度は王位に上つて見るも男らしい仕事だ。太子が永遠に代つて欲しいと仰有つたら太子の爲だ、代つてもあげやう。また自分のためにも榮譽だ。しかしながら大王殿下や父の左守やその他重臣どもの目を甘く晦ますことが出來やうかなア。暗雲飛び乗りの藝當とは所謂この事だ。太子は危険を冒して戀愛の充實を遂げ、このアリナはまた大危険を犯して王位に上らむとするのだ。徳川天一坊も眞裸足で逃げるだらう、アツハハハハ。いやしかし、何時老臣どもが御機嫌伺ひに來るかも知れない。どれ、太子の玉座に澄まし込んでをらねばなるまい」

と又もや鏡の間を立ち出でて、太子の居間に何喰はぬ顔して坐り込んだ。そこへ奥女中の案内で、父の左守が太子の御機嫌伺ひと稱し訪ねて來た。左守はポンポ

ンと二拍手しながら低頭平身し、

「工老臣左守、謹んで殿下の御機嫌を伺ひ奉ります。父大王様にもお變らせ

なく御政務を嚮せ玉ふこと大慶至極に存じ奉ります。畏れながら殿下に、老臣と

して王家のために一應申し上げますが、臣の倅アリナなるもの餘り殿下の御寵愛

に溺れ、親を親とも思はず、悪言暴語を放ち、デモクラシーだとか、共産主義だ

とか譯の解らぬことを申して、この父を手古ずらせませす。それに此頃は殿下のお

傍に御用ありと申し、一度も吾が館へ歸つて参りませぬ。どうか今晩は亡妻の命

日でございますれば、靈前に参拜させたく思ひますれば、どうか明朝までお暇を

お遣はし下さいませ。折り入つてお願いに参りました」

アリナはハツと胸を轟かせ、にはかに顔色青ざめ唇さえビリビリと慄ひ出した

が、さすがの横着物、臍下丹田にグツと息を詰め、大膽至極にも初めて太子の口

眞似をやり出した。

「やア其方は老臣左守でござるか。老體の身をもつて好くも入内いたしました。餘は

満足に思ふぞ。汝の申す通り父は極めて健全に政務を嚮すによつて、必ず必ず心

痛いたすな。もはや夜間の事でもあり、餘は少し研究したい事もあれば、一時も早くこの場を退却せよ。また明日面會を許すであらう」

左守「恐れながら殿下の仰せを否むではござりませぬが、如何なる御用がござりませうとも、今晚だけはアリナをおかへし下さいませ」

「そのアリナは二時以前父の館に歸ると申して出ていった。察するところ汝と途中で入れ違ひになつたのであらう」

「アア、左様でございましたか、これは失禮な事を申し上げました。それでは老臣も急ぎ歸宅を致しませう、御免下さいませ」

と言ひながら倉皇として奥女中に手を引かれながら下り行く。後見送つてアリナはホツと一息つきながら、

「アア、地獄の上の一足飛びだつた。しかしながら暗雲飛び乗りの第一線を突破したやうなものだ。現在の倅を殿下と間違へ歸るやうだからもう大丈夫だ。あの抜目ない狸爺が吾が正體を看破する事が出来ないまで巧に化けすましたのも全く天の御保護だ。だがも一つの難關は大王様のお見えになつた時だ。エエ取越苦勞

は禁物だ。まアその時は又その時の風が吹くだらう。アア愉快愉快。もう何だか
タラハン國の國王になつたやうな氣がする。イツヒヒヒヒ
と大膽不敵にも會心の笑を漏らしてゐる。

夜の帳は下ろされて、間毎毎に銀燭の火が瞬き出した。

(大正一四・一・六 新一・二九 於月光閣 加藤明子録)

第六章 信夫戀(一七三〇)

夕陽山の端に傾いて、遠寺の鐘ボーンボーンと鳴り響き、諸行無常の世の有様
を警告してゐる。間毎毎に照り輝く銀燭の光に、變装太子の面貌はますます清
く麗しく、錦衣を着用したるその姿は、スダルマン太子にも一層優りて威風備は
り見えた。アリナはどことはなしに心引かれ、咳拂ひさへも忍ぶやうな氣になつ
てゐた。そこへ衣摺の音しとやかに簾の外に頭を下げ、二拍手しながら、

女をんな「恐れながら殿下でんかに申し上げます。今晚こんばんはお伺うかがひ申まをすところ御寵臣ごちようしんのアリナ様さまはお宅たくへお歸かへり遊あそばし、殿下でんかお一人ひとり、お淋さびしさうな御面持おんおももち、お話相手はなしあひてにでもならしていただきませうと存ぞんじ、女をんなの身みをもつて、恐れ氣おそげもなく、私ひそかに忍しのんで参まぬりました」

この奥女中おくぢやうちうはタラハン城市じやうしの豪商がうしやうの娘むすめで、行儀見習ぎやうぎみならひととして、殿中でんちうに女中勤めぢやうちうづとをしてゐる者ものである。そして其名そのなをシノブといふ。アリナは言葉も莊重さうじゆうに、

「アイヤ、そなたは奥女中おくぢやうちうのシノブではないか。餘よは女をんなに用向きようむはない。すぐさま罷りまがさがつたが可よからう」

シノブ「イエイエ、どう仰おほせられましても、今晚こんばんはアリナ様の御不在ごふざいを幸さいひ、殿下でんかに親かしくお目めにかかつて、申まをし上げたい事ことがございますので、何なんと仰おほせられましても、一歩いっぽもここは引き下さがりませぬ」

アリナ「不届ふとどきせん千萬ばんな、そなたは餘よの言葉ことばを用もちひないのか」

「ホホホ、どうして殿下でんかのお言葉ことばが用もちひられませう。妾わらはがこの殿中でんちうへ女中奉公ぢやうちうぼうこうに参まぬりましたのは何なんのためだと思召おぼしめしますか。あなたに會あひたさ、お顔かほが見みたさに」

「これは怪しからぬ。苟くも神聖なる殿中において、なまめかしいその言葉、不貞腐れ女奴、淫奔者奴。その方は身分を心得ぬか、さがり居れツ」

シノブは、「ホホホホ」と笑ひながら、押し強くも簾をポツとはね上げ、アリの膝近く進みより、穴のあくほどアリの顔を見て、二タ二タ笑ひながら、
「オツホホホ、何とマア、よく御似合ひ遊ばすこと、なア變装太子様。わたし本眞者のやうに思ひましたよ。狐の七化け狸の八化けよりも上手ですワ」

「コリヤシノブ、見違ひをいたすな。餘は決して偽者ではない。正眞正銘のスダルマン太子だ。女の分際として、玉座の前を恐れぬか」

シノブは横目をしながら、アリの膝をグツとつめり、
「モシ、アリナさま、駄目ですよ。サアどうか私のいふことを聞いて下さいますか、聞いて下さらな、何もかも大王様の御前で素破抜きますよ」

「アツハハハ、たうとう尻尾を掴まれたか、エー仕方がない。これほどよく化けてゐるのに、なぜお前は俺の變装太子たる事が解つたのだ。コリヤうつかり油斷は出来ぬワイ」

「大王様が御覽になつても、現在ののお父上が御覽になつても、本當の太子様とよ
りお見えにならないのですから、誰だつて偽太子と思ふものはありませぬワ。し
かし、私が殿中へ御奉公に参りましたのは、實は貴方にお近づき申したいばかり
でございます。いつぞや園遊會の時右守司のお屋敷でお目にかかつてから、戀と
かいふ曲者に魂を取りひしがれ、寝ても醒めても貴方のお姿が忘れられないので、
父母にいろいろと無理をいうてねだり、右守に澤山の賄賂を贈り、ヤツとの事
奥女中になつたのでございます。一度親しくお目にかかつて、吾が思ひのたけを
申上げたいと、間がな隙がな伺つてをりましたが、いつも貴方は太子様のお側付、
お一人になられた事がないので、ここ一年ばかりはお話する機會もなく、煩悶苦
惱の結果、この通り身體がゲツソリと瘦せました。今日は貴方のお後を慕ひ、一
間に忍んで様子を考へてゐれば太子様との祕密話、正しく太子様の身代りとなつ
て、貴方はゐられることと堅く信じ、簾越しによくよく窺へばまがふかたなきア
リナ様、サアもうかうなつた以上は厭でも應でも妾の戀を遂げさせて下さいませ。
スバール姫様とかいふ天成の美人を、貴方はお迎へにゐらつしやつたやうですが、

何ほど美人だつて、體が金で拵へてもございますまい。妾だつて、まんざら捨てた女ぢやあるまいと自信してをります。アリナ様、どうでございますか、手つ取り早くお返詞を願ひます」

アリナは心の中にて、

「ヤア失敗つた。コリヤ一大事が突發した。しかしながら、のつ引ならぬシノブの強談判、ムゲに排斥するわけにもゆこまい。否これを排斥しやうものなら、戀の仇、身の怨敵となつて吾が身に迫り來たり、終ひには身の破滅になるかも知れぬ。そして又このシノブはスバル姫に比べては、容色少しく劣つてゐるやうにもあるが、縦から見ても横から見ても十人以上の女だ。一歩進んで此奴を戀女にしたところで、あまりアリナの沽券が下がるでもあるまい」

と咄嗟の間に決心を定め、ワザと言葉やさしく、

「ヤア、シノブ殿、人目を忍ぶ二人の仲、あたりに氣をつけめされ。このアリナも木石ならぬ身の、一目そなたの姿を見染めてより、煩惱の犬に取りつかね、心猿意馬は狂ひ出し、矢も楯もたまらなくなつて、今日が日までも堪え堪えし戀の

淵、涙に沈むアリナが胸、何として其方に言ひよらうか、女にかけては初心の吾、戀てふものの心に芽を出だしてより、そなたに會ふも心恥づかしく、文の便さへも、躊躇してゐたのだ。今日始めて其方のやさしい心を聞いて、餘も満足に思ふぞや」

「ホホホホ、餘も満足とはよく出来ました。そんなら私の戀はキツと叶へて下さるでせうな」

「シノブどの、餘の戀を、そなたも叶へてくれるであらうなア」

「ハイ、殿下の思召し、何しに反きはいたしませう。どうかエターナルに愛して下さいませ」

「しかしシノブどの、かうなつた以上は太子のお身代りになつて、高麗犬然とこんな窮屈な目をしてゐる譯にはゆかない。今頃は太子様もスバール姫と甘い囁きを交換してゐられるだらう。アア、それを思へば、本當に馬鹿らしくなつて來た。一層のこと、お前と手に手を取つて九尺二間の裏店住居、世話女房とお前はなつて、簡易な平民生活を送らうぢやないか。お前のためなら、私は乞食をして

も満足だから」

「ホホホホ、スダルマン太子と同じやうな事を仰有いますな。モシ、アリナ様、物も相談ですが、太子様は平民生活が好きだと言つてゐらつしやつただやありませぬか。これを幸ひに、貴方はどこまでも太子となりすまし、タラハン國の王者となり、そして妾を王妃にお選び下さいませぬか、こんな嬉しい事はないぢやありませんか」

「何と肝の太い事をいふぢやないか。さすがの俺も肝をつぶしたよ」

「ホホホホ、ようそんな事が仰有られますワイ。あなたは最前から、「一層のこ」と、太子になりすまして、天一坊も跣足で逃げるやうな陰謀を遂行してやらうかと、獨語してござつたぢやありませんか。そのお言葉を聞いて、ますます貴方の偉大な人物たることを知り、戀慕の念が一層高まつて來たのですよ。どうか心の底から打ちとけて何も彼も仰有つて下さいませ。妾は町人の娘だつて天下を覗うてゐる大化物ですよ。女子大學を卒業して、才媛の譽をとつたシノブ姫ですもの。ただ單なる戀愛のみに魂を奪はれませうか。現在のタラハン國を根本的に救濟せ

むとする大人物はなきやと、平常も氣の利いたらしい男の性行を調査してをりま
したが、その適當な人物は貴方を措いて外にないことを悟りました。初めは貴方
を大人物と知り、將來大事を成すべき大人格者と信じ、接近の機會を得むと、種々
と手だてをもつて、この殿中の女中勤めとまで成りおうせ、太子様や貴方の御行
動を監視してをりましたが、あまり立派なお心掛けを悟り、あなたに對する眞の
戀愛心が燃立つてきたのですよ、ホホホホ。どうか永久に可愛がつて下さいませ。
そして妾と共に國家改造に力を盡して下さいますでせうね」

「足許から鳥が立つとは此事だ。ここの殿中に奉仕してゐる老若男女は、何奴も
此奴も蟲の喰つた古い頭のガラクタばかりだと思つてゐたのに、お前のやうな新
知識に生きた天才が潜んでゐるとは、さすがの俺も、今の今まで氣がつかなんだ。
ヤ頼もしい、願つてもないことだ。では餘は飽くまでもスダルマン太子となりす
まし、お前はここ暫くの閒奥女中となつて、時々顔を見せてくれ。そして看破さ
れないやう、影になり日向になり、餘の身邊を保護するのだよ」
「冥加にあまる太子殿下のお言葉、謹んでお受け仕ります。必ず必ず御心配遊ば

しますな」

「ヤ、出かした出かした、汝の一言、餘は満足に思ふぞよ」

と早くも太子になつた心持ちで、言葉使ひまで改めてしまった。

「モシ、殿下様、あまり永らくなりませんと、疑はれる虞がございますから、今晚

はこれにて罷り下がります。何分よろしく願ひます」

「ヤ、満足々々、汝が居間に歸つて安眠したかよからう」

「左様ならば、殿下にもお寝み遊ばしませ。妾は女中部屋へまかり下がります」

とソロリソロリと心を後に残して、ニタツと微笑みながら吾が居間さして歸り行く。

アリナはシノブが歸り行く姿を見送り、

「アア、何と良いスタイルだらう。アアして裾を引きずり、シヨナリシヨナリと

歩いて行く姿は俺の欲目か知らねども、スバール姫以上だ。ヤツパリ俺も色男だ

なア。今晚は太子様があつた若々しい、淡雪のやうなスバール姫の胸を抱いてお寝

みになるのに、自分は獨り膝坊主を抱いて、けなりさうに夜の目も口々に眠られ

ず、こがれ明すかと思つたに不思議なものだ。ヤツパリ一つある事は二つある。
太子様も満足なら、俺も満足だ。しかしあのシノブ、氣が利かない。人目を恐れ
て女中部屋へ歸つてしまひよつた。俺の方から私かに通ふわけにもゆかず、さう
すれば太子の權威はゼロになる。もし彼奴にして俺をどこまでも熱愛してゐるな
らば、今夜は一睡もようしまい。キツと戀愛といふ曲者に引きつけられて、のそ
りのそりと吾が居間へ忍んで來るかも知れまい。

もえさかる胸の焰を打ち消して

しばし忍ばむしのぶ戀路を

人の目をしのぶ二人の仲ならば

しばし忍ばむ戀の暗路を

アーア、何だか妙な氣分になつて來たワイ。モ、夜も更けたやうだし、夜分に御
機嫌伺ひもあるまい。サアゆつくりと今日はこの太子も寝んでやらうかい」

と言ひながら、寢所に入り、ソファアの上に横たはり、疲勞れ果てて、鼾聲雷の如く眠についた。

夜は森々と更け渡り、水さへ眠る丑滿の刻限となつた。満天の雨雲の堤を切つて、土砂ぶりの雨は館の棟を音高く叩きはじめた。戀の曲者に捉はれて、まどろみ得ざりし女中頭のシノブは、雨の音を幸ひに他の女中の寢息を考へ、足音を忍ばせながら、ソロリソロリとアリナが寢所に忍び入つた。アリナは何事も白河の夜舟、荒波のほえたけるやうな鼾を立てて熟睡に入つてゐる。シノブはソファアの傍に寄り、ソツとアリナが胸に手を當て、小聲になつて……

「モシ……モシ、アリナさまアリナさま」

とゆすり起した。アリナは驚いて、アツとはね起き、目をこすりながら、
「ナナ何だ、何事が起つたのだ」

と早くも驅け出さうとするのを、シノブは袖をひき止めながら、
「先づ先づおちつき遊ばしませ、別に怪しい者ではございませぬ。妾は貴方のお嫌ひなシノブでございます。妾の聲を聞いて、倉皇として逃げ出さうとはあまり

ぢやございませぬか。あなた夕べ、私に詐つたのでございませぬか。エー悔しい、残念でございます。モウこの上は何も彼も打ちあけてしまひますから、そのお覺悟なさいませ」

と早くも泣聲になる。アリナは吃驚して、

「ヤア、お前はシノブだつたか、ヤ、それで安心だ。決してお前を嫌ふどころか、お前の事ばかり思つて寝んでゐたところ、父の左守がやつて来て、俺の化けの皮を現はし、ふん縛らうとした夢を見て吃驚したのだ。どうしてお前を嫌ふものか、そして殿中は何事もないのか」

この言葉を聞いてシノブも稍安心せしものの如く、

「アアそれ聞いて、あなたのお心が解りました。御安心なされませ。殿中は極めて平穩無事でございます。妾は寢所へ這入りまして、貴方のお姿が目にはちらつき、一目も眠られず、夜の明けのを待ちかね、お顔見たさに人目を忍んでここまで伺つたのでございます」

「ウン、さうか、それで俺もヤツと安心した。よう来て下さつた。俺も碌に夜の

目が眠られなかつたよ。お前の事が氣になつて……」

「ホホホホ、何とマア調法なお口だこと。妾が忍んで來るのも知らずに、夜中の夢を見てゐらしたくせに、どこを押へたらそんな上手な事が言へますか。本當に憎らしい殿御だワ」

と言ひながら、膝のあたりを力を入れて、繼子抓到りに抓つた。

「アイタタタタ、ひどい事するぢやないか、さう男を虐待するものぢやないワ。ヤツパリお前は私を苦しめるのだな。人を痛い目にあはして、お前は心持ちが可いのか」

「そらさうですとも。憎らしいほど可愛いですもの……可愛けりやこそ一つも叩く、憎うて一つも抓られうか……といふ俗謡があるでせう。モツトモツト抓つて上げませうか」

と今度は二の腕を力一杯繼子抓到りで捻ぢた。

「アイタタタタ、コラコラひどい事するな。可愛いがつてもらふのも結構だが、痛いのは御免だ」

「女に抓られて閉口するやうな腰の弱い男子は、戀を語るの資格はありませんよ。本當の戀と戀とがピッタリ合つた男女は、いつも生疵の絶え間のないのが親密な證據ですよ」

と言ひながら、頬邊をガシリとかいた。

「チヨツ、痛いワイ。何程惚れたというても、そんな毒性な目に會はされちゃや
りきれないワ。面に蚯蚓腫れが出来るぢやないか」

「ホホホ蚯蚓腫れぐらゐが何ですか、男といふものは大事な寶まで、突き破る
だありませぬか、その方が何程痛いか知れませぬよ」

「エー、何とマア、いいお轉婆だなア。今時の女子はこれだから嫌はれるのだ……
イヤ好かれるのだ、エへへへ」

かくいちやついてゐる折りしも、チヤンチヤンチヤンと警鐘亂打の聲。
ハツと驚き窓を開いて見れば、左守の館の方面に當つて、炎天をこがし大火災が
起つてゐる。

第七章 茶火酌（一七三一）

向日の森の片邊に住む茶湯の宗匠タルチンは、思はぬ福の神の御來臨と笑壺に入り、茶室は太子とスバールの自由歡樂場となし、スバール姫に茶の湯を教へるといふのはホンの表向き、實は兩人の戀を完成せむためアリナに頼まれて澤山の心付をもらひ、ホクホクもので天下太平を謳つてゐる。彼は中庭を隔てた古ぼけた母屋の一室に胡坐をかきながら、大布袋然たる女房の「ふくろ」と共に酒汲み交し舌鼓を打ちながら、タルチン「オイ、袋、人間の運といふものは不思議なものぢやないか。俺たちも親の代から茶湯の宗匠として彼方此方の大家に御鼻肩になり、わづかに家名を繼いできたが、世の不景氣につれ大家の盆正月の下されものも段々と少なくなり、頭は禿山となり髭には霜がおき、懷は寒く財布は冴が吹き荒び、爐の炭さへも碌に買へないやうになつてゐたのに、あの辨才天が山奥から御出現遊ばしてより御靈驗あらたかになり、畏れ多くもスダルマン太子様までお忍びでお越しになるや

うになつたのは何たる幸運の事だらう。まだ運命の神は吾々をお見捨て遊ばさぬと見えるわい。のう袋、お前はいつも奴甲斐性なし奴甲斐性なしと俺を罵詈訾嘲笑なし、お暇を下さいとチヨコチヨコ駄々を捏ねよつたが、どうだお暇をやらうかの」

袋「へーへー、何ですか、たまたまお金が這入つたとて、さうメートルを上げるものぢやありませんか。お前さまは仔細らしく茶の湯の宗匠など言つてすまし込んでござるが、女房の私から見ればあまり立派な人間様ぢやありませんか。浮世を三分四厘、四分五裂、五分五分、五厘五厘に茶化して通る鈍物坊主の夜這星だから、あまり氣の利いたらしい事をいはないがよろしい。太子様だつてお忍びの身、いつ化が現はれて城内から呼び戻されなさるか知れませぬよ。さうしてお歴々の御家來衆が太子の外出を防がうものなら、再び甘い汁を吸ふ事は出来ぬぢやありませんか」

「なに心配するな、太子様が、よしんば家來どもに妨げられ、お出ましになる事が出来ないにしたところで、左守の息子さまのアリナさまが控へてござる。アリ

ナさまは自由の利く身だから、どんな便宜でも取計つて下さるよ」

「さう樂觀は出来はすまい。アリナさまだつて外出差止めとなられたら、それこそ取りつく島がないぢやありませんか。その上山奥の美人を圍つて太子様に逢引きさせ、墮落させたといつて重い罪にでも問はれたら、それこそ笠の臺が飛ぶぢやありませんか。お前さまは大體利巧に出来てゐないから、女房の心配は一通りぢやない。チツと氣をつけて下さいや、お金がよつた時、さうムチャに費つては、マサカの時にどうしますか。お前さまはヒネ南瓜だから何時國替へしてもよろしいが、この年の若い女房をどうして下さるつもりですか。今日はお銚子は二本でおいて下さい。お前さまが酒に酔うと梯子酒ぢやからヒヨロヒヨロと宅を飛び出し、裏町あたりの待合にでも惚氣込んで、ありもせぬ金を費はれちゃ、宅の會計がやりきれませぬからな」

「エー、酒が理におちて甘くないわ。今日は機嫌よく飲ましてくれ。しやうもない世帯の話を聞かしてくれては流石茶人の俺も、いささか閉口だ。さう石に根つぎするやうに心配するものぢやない。俺の宅は御先祖さまの餘慶で、これから一

陽來復の氣分に向かふのだ。よう考へて見よ。山奥から生捕つてござつた、あのスバール姫さまは辨才天様。さうして太子様は毘沙門天様だ。お前は言ふに及ばず布袋和尚なり、俺は頭が長いから福祿壽だ。そこへ恵比須や大黒のついた金札がこの通り懐に納まつてござるなり、チャンと六福神は揃つてゐるのだ。も一つのこと七福神となるのだから心配するな。言靈の幸はふ國だから、こんな時は目出たいこと言つて祝ふに限るよ。チャンと六福神が揃つてる所へ、お前の名が袋だから丁度揃つて七福神だ。芽出たい酒喰はずんばあるべからずだ。飯飲まずんばあるべからずだ、エツへへへへ」

「何とまあ氣樂な事をいい年してをつて言へたものですな。お前さまの宅に後妻に入つてから已に三年にもなるぢやありませんか。着換の一枚も買つてくれた事もなし、足袋一足買つてくれた事もないのに、いつも亭主面さげて、偉さうに何ですか。その金こつちにお渡しなさい、私が預かつておきます。お前さまにお金を持たしておくくと劍呑だ。チツとばかり澁皮のむけた女を見るとすぐグニヤグニヤになつて、家も女房も忘れてしまふ奴倒しものだからな。ほんとにいけ

すかない薬罐爺だよ」

「こらこら何をいふか。貧乏はしてをっても、俺はタラハン城に歴仕する茶の湯の宗匠さまだよ。俺の女房にならうと思へば、よほど茶の湯、生花、歌、俳諧等の諸藝は一渡り嗜んでおかねばならず、言葉使ひも高尚につかはねばならぬぢやないか。お前のやうに大きな圖體をして蛙のやうな聲を出し、ひびきの入った釣鐘のやうにガアガア言つてもらふと、名門の恥辱だ、エーン。この夫にしてこの妻ありといふ事があるから、俺の女房ならチツと女房らしう、品行を謹んでもらはねば困るぢやないか。何時だつて女の癖に圍爐裏の側に胡坐かき、煙草ばかりをパクつかせ、飯を焚かすれば焦げつかす、タマタマ焦げなかつたと思へば半焚きの心のある飯を喰はせやがるし、何時だつて飯らしい飯を喰わした事があるか。アア、俺も、せう事なしにこんな女房を持ったのだが、かう懐が暖かになつて來ると、もつとした……」

袋は胸倉をグツととり、

「こりや薬罐爺、【もつと】の後を聞かせ、俺を追ひ出すつもりか。お前の方か

ら追ひ出されるよりも私の方から追ひ出てやるのだ。今までも幾度か見込みが立たないから、飛び出さう飛び出さうと思つたが先立つものは金だ。この薬罐奴、これでもいつか懐をふくらしやがる事があるだらう。その時こそは懐の金をスツカリ奪ひとつてドロンと消えてやるつもりだつた。こんな險呑な暗雲飛び乗りの藝當をやるものについてをづては、袋の生命が險呑だ」

と言ひながら懐の札束をむしりとり、強力に任して老爺の尻を二つ三つ蹴りながら、腮をしやくり、

「お蔭さまで一千兩のお金にありつきました。永らくお世話になりました。タルチンさま、三年に一千圓は安いものでせう。精出しておまうけなさいませ。貯つた時は、また頂きに出ますよ。アバよ」

と牛のやうな尻をクレツと引捲くり、

「薬罐爺尻でも喰へ」

と言ひながら一目散に逃げ出したり。

タルチンは無念の齒がみをなし、後追つかけむとすれども、大女の力強に力一

ばい尻こぶたを蹴られたため、大腿骨に痛みを感じ、顔をしかめて逃ぐゆく女房の後を怨めしげに見送つてゐる。

「アー、袋の奴、馬鹿にしやがる。折角マンマとせしめた千兩の金を自分一人で占領して、おまけに手厳しく毒つきながら歸つて行きやがった。アア、また俺は元の木阿彌だ。文なしの素寒貧だ。よくよく金に縁のない男と見えるわい。しかし俺も一つ考へねばなるまい。萬々一、太子様をかくまつて逢引きさしてゐる事がお歴々の耳にでも這入らうものなら、お出入り差止めは申すに及ばず、お袋の言つたやうに俺の笠の臺が飛ぶかも知れない。また幸ひに命だけは助かつたとしたところで、太子様のお出入もなくなり、アリナさままでも來られないやうな破目になつたら、この茶坊主はどうしたらよいかな。どうも心配になつて來た。家寶傳來の名物道具よりも大切にしている此頃の珍客、金剛不壞の如意寶珠を、もしも老臣どもに見つけ出され、吾が館から連れ歸られるやうな事があつたとしたら、それこそ俺も身の破滅だ。地獄と極樂へ往復する茶柄杓の中折れ。今日までの湯加減も、にはかに足茶釜の底ぬけ騒ぎをやらねばなるまい。アア、何とか

いい工夫はあるまいかな。干からびた頭脳から何ほど絞り出しても、よい知恵は出て来ず、どうしてマサカの時の準備をしようかな」
と腕を組み、胡坐をかいて、爛徳利を前に轉がしたまま思案にくれてゐる。

暫らくしてタルチンはニツコと笑ひ、

「イヤ、さすがは茶湯の宗匠だ。いい知恵が浮かんで来たぞ。萬々一不幸にして太子さまがお出入り遊ばさぬやうになつても構はぬ。よもやノメノメとあのスパール姫を殿中へ、連れて歸られるはずはない。さうすればキツとこのタルチンが、どつかへお隠し申さねばなるまい。太子もキツと、さうして呉れと仰有るに定まつてる。何程考へても、それより外に方法手段はないもの。太子さまだつて、アリナさまだつて、實のところは内緒でやつてござる事だから弱味がある。そこを甘くつけ入つて、あの名玉を處分するのは處世上の奥の手だ。捨賣りにしても二萬や三萬の價值はある玉だ。わづかに千圓や二千圓のつまみ金を貰つてヒヤヒヤとして暮してゐるよりも、さうなりや二三萬圓にでも賣り飛ばし、トルマン國にでも逃げ出し立派な女房でも貰つて、此世を榮耀榮華に氣樂に暮すが一等だ。俺

には何とした幸運が見舞うて来たのだらう、エツへへへへ」

と一人笑壺に入つてゐる。折りから聞こゆる、警鐘亂打の聲、タルチンは足をひきずりながら窓の戸をあけて外を眺むれば、タラハン城下に當つて火災を起し、炎の舌は高く大空を舐めてゐる。

「ヤア、こいつア大變だ。お得意先が火事にでも會ふやうな事があれば、俺等の懷に大影響を來たすところだ。そして日頃お出入りの情誼として火事見舞に行かねばなるまい。どうやらあの勢ひでは容易に火事もをさまりさうにはないわい。

太子様には濟まないが、一つ留守を頼んで火事見舞に出かけやうかな」
と太い杖をつき、大女の袋に蹴られて痛んだ足をチガチガさせながら、離室の茶室に入り來たり、

「もしもしお二人様、タラハン城下は大變な火災が起つてをります。ここは町を餘程離れてゐますから、メツタに飛火もしませぬから、安心でございませぬが、私は一寸お出入先へ見舞ひに行つて参りますから、どうぞ火事を見物しながら留守をしてゐて下さいませ」

太子「成程、大變な大火事と見えるな。この調子では、どうやら城内も危険が迫る恐れがある。しかしながら餘はここに神妙にスパールと留守をしてゐるから、餘にかまはず行つて来るがいいわ」

タルチン「ハイ、よろしう願ひ申します。そんならこれから急ぎ見舞ひに行つて参ります」

と言ひながら漿酸提燈をぶらつかせ、片手に杖をつき、チガチガと泥濘に満ちた悪道を尻きれになつた下駄を穿ち出でて行く。

太子「これ、スパール、ずるぶん壯觀ぢやないか。餘はまだあんな大きな火事を生れてから見た事はない。火事といふものは本當に勇ましいものだな」

スパール「仰せのごとく實に火事は人氣のいいものです。この通り地上に蟻の這うてゐるのさへもハツキリ見えます。しかしながら火災にあつた人は可哀さうぢやありませんか。どうか人命に關するやうな事がなければようございますがな」

「ウン、さうだな。どうか無事にをさまればいいが。あれあれだんだん火が燃え擴がつて來た。あのスツと高く白く光つてゐる壁は城内の隅櫓だ。火は隅櫓を舐

出したぢやないか、こいつア大變だ。さうして大變な鬨の聲が聞こえて来る。餘が城内に歸つてをつたならばまたなんとか工夫したらうに、城内へ飛火がしたりするやうな事あれば、忽ち俺の所在を老臣どもが尋ねまはるに違ひない。アリナが甘くやつてくれればいいが、アアそればかりが氣にかかる」

と、うなだれる。

スバール「太子様あなたはお心が弱いぢやありませんか。夜前何と仰有いました、「お前の側に居るならば、たとへ天は落ち地はくだけ、タラハン城は焼けおちても敢て意に介せない。お前と俺との戀愛さへ、完全に維持されたら何よりの幸ひだ。餘は王位も富も城も捨てた」と仰有つたぢやありませんか。チツとお落着きなさい。見つともないぢやありませんか」

と大膽不敵のことを言ふ。太子はスバールの言葉に肝を冷しながら、さあらぬ體にて、

「アツハハハ如何にも尤も千萬、火災なんか意に介するに足らないよ。サア夜分を幸ひ、お前と二人手をひいて郊外の散歩に出かけ、火事の見物をしやうでは

ないか[㊦]

警鐘亂打の聲は四方八方より聞こえ、民衆の叫ぶ鬨の聲は鯨波の如く聞こえ來たりぬ。

(大正一四・一・六 新一・二九 北村隆光録)

第八章 歸鬼逸迫(一七三二)

タラハン市の大火災は市の過半を焼き拂ひ、遂には城内まで飛火して茶寮一棟を烏有に歸した。城の内外は阿鼻叫喚の地獄と化し、不逞首陀團や主義者團が一致協力して、強盜、強姦、殺人等の惡業を逞しふし目も當てられぬ慘状を演じた。消防隊全部、ならびに目付侍までも繰出して、やうやくに火を消し止め暴徒の亂業を喰ひ留むる事を得た。左守は吾が邸宅を焼かれ、命辛々部下を指揮して騷擾鎮撫に努めてゐたが、やうやく騷動が治まつたので蒼皇として大王の居間に伺候

し見れば、大王は老病にて臥床中城下の大變を耳にし、驚きのあまり發熱甚しく遂に人事不省に陥つてしまつた。かかる混雜の際とて、醫者も思ふやうに驅けつせず、重臣は困り切つて大王が病室に首を鳩め前後策を講じてをる。左守は最早この上は太子の君に拜謁して指揮を仰がむものと、禿頭をテカテカ照らしながら、太子殿に奉伺したのである。

左守は例のごとく二拍手しながら、垂簾の前に低頭平身し、やや慄ひを帯びたる聲にて、

「太子殿下に申し上げます。本日は微臣の不注意より城下に大火災起り、不逞首陀團や主義者團その他の暴徒、暴威を逞ふし火を放つて都の大半を烏有に歸し、なほ飽き足らず、強盜、強姦、殺人などあらゆる暴逆を逞ふし、タラハン市は蚊の鳴くがごとき憐れな有様でございます。大王様も御心配のあまり俄かに病氣改まり、いつ御昇天遊ばすやも計られない悲惨事が湧出いたしました。かかる慘状を招來いたしましたのも、全く小臣等が輔弼の任を全ふせざりし罪でございますれば、天下萬民に代り闕下に伏して罪を謝し、今日かぎり骸骨を乞ひ奉りますれば、

何とぞ、時代に目醒めたる新人物をば登庸遊ばされ、國事の大改革を斷行されむ事を希望いたします。左守が職を辭するに當りまして、太子殿下にお願ひ致しておきたい事は、倅の身の上でございませぬ。微臣も老齡加はり、殿中に入内いたしますにも、かくの如く杖を持たねばならぬやうな廢物でございませぬから、大王殿下の後を追うて何時國替へをするやらも分りませぬ。何とぞ倅の身の上をよろしく願ひ申し上げませぬ」

アリナはわざと莊重な聲にて、

「ヤ左守殿、大變な事であつたのう。さぞ人民が困つてゐるであらう。汝は國家危急のこの場合に當つて、骸骨を乞ふなどとは不心得千萬にも程がある。日頃高祿を與へておいたのは斯様の際に盡させむための父大王の思召しではないか。しかしながら、不能をもつて能を強ふるは君たるものの道ではない。汝は幸ひに、時代に目醒め餘が意志をよく悟りを賢明なる倅あれば、彼アリナを汝と思ひ重く用ふるであらう。必ず心配いたすな。さうして汝の家は無難であつたかのう」

「ハイ御親切によくお尋ね下さいませぬ。仁慈のお言葉、何時の世にかは忘却いた

しませうや。吾が邸宅は不逞首陀團のために包圍され、第一着に焼きつくされてしまひました。しかしながら、ウラルの神様の御加護によりて生命は助けて頂きました。それよりも恐れ多いは、大王様がいつも愛玩してお出でになりました、古今の珍器を集めた茶寮の一棟、惜しくも焼き失せました。大王家歴代の重寶はこの茶寮に納めてありました。實にこの一事にても微臣は責任を帯びて骸骨を乞はねばなりません。何とぞ、おゆるしを願ひ奉ります」

「や、左守その方の申す言葉も一應道理があるやうだ。汝はこれより此處を引取り、他の重臣共と相談の上復興院を創立して、再び元のタラハン市に復歸すべく勉めてくれ。太子、汝左守の職掌を父に代つて免除する。臣間の事業として復興院の總裁となれ」

「殿下の御臺命誠にもつて有難く感謝に耐へませぬが、世に後れたる禿頭をもつて、どうして今日の世の中の人心を治め復興の目的を達成する事が出来ませうか。此儀は何卒お許し下さいませ。實のところは玉の原の別荘に安臥中、火事と聞いて驚き石段より轉げ落ち、大變な負傷を仕りました。これがつけ入りとなつて、

微臣も遠からぬ中歸幽いたさねばなりませんまい」

「ヤアそれは思ひも寄らぬ氣の毒な事を致した。アリナが居れば其方の介抱をさせたのだが、火災が起ると共に殿内を飛び出し、まだ何の消息もないのだから、どうする事も出来ぬ。餘もかかる際には泰然自若として輕舉妄動をつつしみ、萬一の時には父王殿下の後を繼がねばならぬ。どうか其方より右守その外一同によきに傳へてくれ」

「ハイ、重ね重ね御親切なお言葉有難うございます。そして倅のアリナは未だ歸らないと承りましたが、もしやあの騒動に紛れ人手にかかったのではありますまいか。但しは火に圍まれて焼死にでも致したのではございますまいか」と涙聲になる。

「父上、いやいや父王殿下の御大病とあれば餘は茲に謹慎を守つてゐる。アリナも可哀さうだが、彼の事だから滅多に命を捨つるやうな事はあるまい。安心したがよからう」

「ハイ、有難うございます。失禮な事をお尋ねいたしますが、殿下には此頃お聲

の色いろがお違ちがひ遊あそばすやうでございませうが、お風かぜでもお召めし遊あそばしたのではございませうまいか。尊そん貴きの御おん身みの上うへ、何なにとぞお大たい切せつにお願ねがひいたします。人にん間げんは衛ゑい生せいが第一だいいちでございませうから」

アリナはこの言こと葉はにギョツとしながら飽あくまで圖づ々づしく空そら呆とぼけ、
「イヤ、別べつに病び氣やうでも何なんでもない。實じつは青せい春しゆんの時じ期きだから聲こゑ變がりが致いたしたのだ。そして餘よも昨さく夜やの大おほ火くわ事じに些すこしばかり氣きを揉もんだものだから、聲こゑが少すこしく變かつたのだらうよ。必かなず必かなず心しん配ぱいしてくれな。また汝なんぢの倅せがれアリナもきつと無ぶ事じであるだらう」

「ハイ、有あり難がたうございませう。どうか衛ゑい生せいに御ご注ちう意い下くださいませ。ひとへにお願ねがひ申まを上げませう」

「爺おやぢ、いな左さ守もり、心しん配ぱいいたすな。人にん間げんの生しやう涯うがいを衛ゑい生せいの二に字じに威ゐ喝かつされて、自じ分ぶんから半はん病びやう人にんになるやうな事ことはいたさない。人にん間げんは氣きの持もちやう一ひとつで病びやう氣きなんか起おこるものではない。その方ほうも氣きを確たしかに持もつて長なが生いきをしたがよからうぞ」

左さ「何なに彼かとお取とり込こみの中なか、いつまでお邪じや魔まを致いたしても濟すみませぬから、微び臣しんは引ひ

き下りませう。この際御自愛あらむ事を懇願いたします』

と言ひ捨て、恭しく敬意を表はしながら杖を力に下り行く。左守は道々思ふやう、

『どうも殿下のお聲變り、これは何かの原因があるだらう。どこともなしに今までのとは莊重を缺き、さうして今日は懸河の辨舌、ハテ合點の行かぬ事だなア。あの口調は倅のアリナにそっくりだ。しかし何時もアリナが悪知恵を【かう】ものだから、言葉づきまでが殿下に感染したのだらう。恐れ多い事だわい』

と獨語ちつつ歸り行く。

アリナはほつと一息しながら、

『アア危ない事だった。又しても爺に訪問され肝玉がでんぐり返つてしまった。幸ひ爺は胡麻化したか、やがて右守がやつて来るだらう。こいつは困つたものだなア』

と腕を組んで思案の折柄、足早に簾を上げて入り来るは夜前情約締結を終へたシノブであつた。

『殿下、御心配なさいますな。あの調子なれば大丈夫でございますよ。現在の父

上でさへも化けの皮を剥ぐ事が出来ず、スダルマン太子と信じ切つて歸られたくらゐですから、右守ぐらゐは何でもありません。そして右守は名代の近眼でございますから御心配なさいますな」

アリナ「いや誰かと思へば、汝は女中頭のシノブぢやないか。今日の場合、陽氣な事は言つてをれない。居間に下つて來客の接待でも致したが好からうぞ」

「ホホホホ、殿下、よう白々しいそんな事が仰せられますなア。妾はどこまでも殿下のお傍は離れませぬ。殿下の舉措動作は一々次の間から調べてをりますから」

「大變な警戒線を張つたものだなア、まるきり監視附きのやうなものだわい。アア太子の役も窮屈なものだなア」

「一國の王者にならうと思へば、少々ぐらゐの窮屈は忍ばなければなりません。ここ二三日は特別訪問者が多うございませうから、確りしてゐて下さいませ」

「アア、スダルマン太子は何だつて歸つてござらぬのだらう。半日でよいから代つて貰ひたい」と仰有つたが、こんな所へ右守や重臣がどしどしやつて來たら、終ひには化けの皮が現はれてしまふがなア」

「これだけの騒動、如何に呑氣の太子様だとして悠々スバル姫に現を抜かしてお出でになる筈はありませぬ。もう歸つてお出でになるでせうから、もうしばらく辛抱して下さいませ。天下分目の關ヶ原、王者になるか、平民に下るかの分水嶺ですから」

「それもさうだ。誰が來るか分らないから、そなたは早く簾の外へ罷り下つたがよからう。餘は心配でならないわ」

「ホホホホ、餘は心配でならないわ」などと、たうとう本當の太子に言葉つきだけはなつて仕舞はれましたなア。左様なれば邪魔者は罷り下るでございませうと、つんと立ち、ぷりんとして疊をぽんぽんと二つ三つ蹴つて一間の内に姿をかくした。それと入れ違ひに慌ただしくやつて來たのは右守であつた。右守は型のごとく二拍手し、頭を床に下げながら、

「恐れながら右守の司、太子殿下に申し上げます。昨夜以來、城下大混亂の状況は、左守の司より上申致したでございませうから、私は重ねて申し上げます。殿下におかせられても御壯健の御顔を拜し、右守身に取つて恐悅至極に存じ奉り

ます。つきましては大王様の御容態にはかに革まり、幽の息の下より「殿下を呼べ」と仰せられます。どうか一時も早く大王のお居間まで御貴臨を願ひ奉ります。アリナは一つ脱れてまた一つ、

「アア僞太子もつらいものだ。大王殿下の傍には澤山の看病人も居るだらう、重臣共も居るだらう。そんな所へ往かうものなら忽ち秘密が露見して、フン縛られてしまふかも知れない」

と心に非常な驚きを感じたが、横着者の事とてわざと素知らぬ顔をして、「何と申す、父王殿下が御危篤といふのか。それでは早速参上いたさねばなるまい、餘はこれより衣服を着替へ、神様に拜禮いたし父王殿下の平癒を祈り、直ちに参上いたすによつて其由を父王に傳へてくれ」

右守「殿下のお言葉でございますが、錦衣のお着替へも結構、神様へのお祈りも結構でございますが、もはや御臨終でございますから、直ちにお越し下さいませ。私がお供をいたします。早く親子の御對面を遊ばしませ。後で如何ほどお悔やみ遊ばしても返らぬ事でございますから」

アリナ「餘は直ちに參る。サ早く其方は餘にかまはず父のお側に行つてくれ。餘はどうしても神に祈らねば氣が濟まぬ。早くこの場を立ちのき父王の傍に行かぬか」

と聲に力を籠めて呶鳴りつけたり。右守は鶴の一聲に止むなく立つて歸り行く。後にアリナは、

「アア困つた事が出来たものだ。やつぱり左守の倅のアリナである方がよい。アアどうしてこの難關を切り抜けやうか」

と頂垂れてゐる。そこへ女中頭のシノブが走り來たり、

「もし、アリナ様、殿下が歸られました。サアサア早く衣裳をお着替へなさいませ」

「なに、殿下がお歸りか、それや結構だ。や、助け船が歸つたやうなものだ。どこに居られるか」

「労働服を着たまま裏口に立つてをられます」

アリナは急いで裏口に走り出で、

「殿下、よう歸つて下さいました。今や私の化けの皮の現はれむとするところ、父王殿下には今や御臨終でございます。サア早くお會ひ下さいませ。さうして私は錦衣を脱ぎ捨て元のアリナに歸つてしまひます。今が危機一髪の一髪、正念場、サ早く錦衣にお着替へ下さいませ。何時重臣共が来るかも分りませぬ」

太子は父の臨終と聞き着物を着替へる事を忘れ、又アリナも狼狽の餘り、太子に錦衣を着せる事を忘れてしまった。太子はそのまま駆けつけ火鉢の前に坐つて見た。

太子「ヤ、これや大變だ。労働服のまままだ。何とかして早く錦衣と着かへねばなるまい。オイ、アリナその錦衣を早く持つて来い」
と呼べど叫べど、アリナは狼狽の餘り錦衣を女中部屋に投げ捨て、トランクの中より有合せの寝衣を取り出して着替へ、便所の中に潜んで慄つてゐた。一方太子は如何はせむと焦慮してゐる。そこへ慌ただしく右守の司がやつて来て、簾の外より泣聲を絞りながら、

「殿下、早くお出で下さいませ。御臨終でございます」

この聲こゑに太子たいしは父ちちの臨終りんじゆうと聞きいて何も彼かも打うち忘わすれ、汚きたない勞働服らうどうふくのまま、右守うもりの後に跟ついて大王だいわうの病床びやうしやうに驅かけついたり。右守うもりは近眼きんがんの事ことなり、餘あまり慌あわててゐるので太子たいしの勞働服らうどうふくが目めにつかざりけり。

（大正一四・一・六 新一・二九 於月光閣 加藤明子録）

第三篇 民聲魔聲

第九章 衡平運動（一七三三）

名ななく、上かみに大名だいまやうあれども、時じ代だいを解かいし國こく家か永えい遠えんの神策しんさくを辨わきまへたる輔弼棟梁ほひつとうりやうたるべき小せう名ななく、あらずる虚偽きよぎと罪惡ざいあくと權謀術數けんぼうじゆすうを以もつて施政しせいの大本たいほんとなし、重税ぢゆうぜいを課くわして

膏血を絞り、上に立てるブルジョア階級なる者は、肥馬輕裘、あらむ限りの贅を盡し、行人の迷惑を顧みずブウブウと自動車に飛ばして、臭氣紛々たる屁と土埃を浴びせて平氣に行く。貧民の子は自動車に轆き殺されても、これを訴へ出づる術も無く、強者は白晝強盜に等しき行ひを爲して、公々然縱横に闊歩し、弱者は往來の車馬に踏み躪られ悲鳴を上げ、九死の境に呻吟す。文明利器の交通機關は可なりに進歩し完備すれども、貧者は之を利用する事を得ず。教育機關は立派に設けられたりといへども、貧者は是に入學する事を得ず。寄席劇場などは市の四方に建設され地上の樂園を現出すれども、貧者は又これに一回の慰安を求むる事を得ず。病院は各所に蕘を列ねて樹立すれども、貧者は是に入つて治療を受くる事を得ず。美味佳肴は料理屋の店頭に竝べられたりといへども、貧者またこの恩恵に浴するを得ず。錦繡綾羅を店頭に陳列せる大呉服店は市中目抜の場處に櫛比すれども貧者は一片の布も購求する事を得ず。日夜飢ゑに泣き寒さに凍え、空虚腹を抱えて半病人の如く路の傍を悄悄と喘ぎ行くのみ。富者は大小名と結托して暴利を貪り、物價は日を逐うて暴騰し、生存難の聲は日を逐うて喧すしく、淵川に

身を投ぐるもの、鐵砲腹を爲すもの、ブランコ往生を演ずるもの、線路を枕に命を捨つるもの、日に夜に數限りも無く、暗黒の幕は下層社會に日に日に濃厚に下されて來た。

民衆の憤怒怨嗟の聲、號泣の叫び、あたかも阿鼻叫喚、地獄の狀態と成つて來た。大小名撲滅の聲は國內各處に起り、市民大會、民衆大會その他あらゆる民衆の會合は、各處に開かれ、目付役と民衆の爭鬪は絶間なく血腥き風は四方に吹き荒び、さすが安逸なるタラハン國も、今は漸く修羅の巷と成つて了つた。不逞團歌劇團其の他の各種の團體は期せずして都大路に集まり、タラハン國の創立記念日なる五月五日を期して、城下の場所に一齊に放火を始め、その虚に乗じて血に飢ゑたる民衆はあらゆる惡業を恣にし、一時はほとんど無取締りの状態になりしが、漸くにして侍連の力を借つて稀有の騷亂を鎮壓する事を得たのである。

この騷擾勃發のために、富有連の傍杖を食つて僅かの財産を焼失したるもの、親を失ひ、妻を失ひ、夫に別れ、或は一家全滅したる者數限りもなく都大路は流血の巷と化し、死屍累々として目も當てられぬ慘状となつた。子は母の背にあつ

て飢ゑに泣き、老人は腰を抜かして路傍に倒れ、或は半死半生、重傷を負うて苦しむ者幾千人とも數へきれぬ程であつた。

有志の各團體は罹災民救護のため、東西南北に驅けまはり、米麥野菜などをあさつて、一時の急を救はむとすれども、到底その一部の要求を充たすにも足らなかつた。流言蜚語盛んに起こり、人心恟々として安からず、今にタラハン國は滅亡の悲運に向かふべしなどと人々の口に依つて喧傳された。かかる所へ肉體美に過ぎた大兵肥満の女一人現はれ來たり、札ビラを路上に撒き散らしながら聲高々と何事が唄ひながら、暮盤の目の街を彼方此方と驅けめぐつてゐる。

女をんな 神かみが表おもてに現あらはれて

人ひとと鬼おにとを立別たてわける

天てんには黒雲くろくも塞ふさがりて

月日つきひの影かげも地ちに照てらず

天あめが下したなる人草ひとぐさは

優勝劣敗いうしやうれつぱい日ひをかさね

強つよきは高たかく登のぼりつめ

榮耀榮華えいようえいぐわの有ありたけを

盡つくして下しもの難儀なんぎをば

空吹く風かぜと聞きき流ながし

貧しき民を虐げて

生血を絞り脂をば

力限りに吸ひ取れば

瘦せ衰へて餓鬼の如

骨と皮とに成り果てぬ

神が此世に在す上は

何時まで許し玉はむや

此世の中は神様が

萬の民を平等に

楽しく嬉しく暮させて

天國淨土の神政を

布かむがための思召し

しかるに何ぞ計らむや

上は左守を始めとし

富有連や長者等が

勝手氣儘に振れまひて

下國民を苦しめし

報いは忽ち目の當り

思ひ知つたか左守司

その他百の司達

今に心を直さねば

打てや懲らせと民衆が

闘を作つて攻め寄せる

その凶兆はありありと

今より伺ひ知られたり

アア民衆よ民衆よ

必ず憂ふる事なかれ

至仁至愛の神さまは

かなら 必^{かなら}ず 汝^{なれ}が 窮^{きつじ}状^{じやう}を

かなら 必^{かなら}ず 一^{いち}陽^{やう}來^{らい}復^{ふく}の

やす 安^{やす}き 樂^{たの}しき 神^{かみ}の 國^{くに}

いま 今^{いま}ま で 下^{しも}に 苦^{くる}しみ し

たか 高^{たか}き に 救^{すく}ひ 給^{たま}ふ べし

つち 地^{つち}は 上^{のほ}つて 天^{てん}と 成^なる

いつ 何^{いつ}時^つま で 大^{だい}名^{みやう}小^{せう}名^{みやう}の

あ あ 惟^{かむ}神^{ながら}々^{かむ}々^{ながら}

われら 吾^{われら}等^らは 神^{かみ}の 子^こ神^{かみ}の 宮^{みや}

いま 今^{いま}ま で 此^{この}世^よに 落^おち 居^ゐた る

あまた 數^{あまた}多^たの 神^{しん}軍^{ぐん}引^{いん}率^{そつ}し

たひ 平^{たひ}ら げ 盡^{つく}し 給^{たま}ふ べし

とき 時^{とき}は 來^きた れ り 時^{とき}は 今^{いま}

ふい 不^{ふい}意^いに 起^{おこ}つ た 大^{だい}火^{くわ}災^{さい}

いつ 何^{いつ}時^つま で 見^み捨^すて 給^{たま}は む や

はる 春^{はる}を 迎^{むか}へ て 永^{とこ}久^{しへ}に

この 世^よの 中^{なか}に 樹^たて 玉^{たま}ひ

きよ 清^{きよ}き 正^{ただ}しき 汝^{なんぢ}等^らを

てん 天^{てん}は 降^{くだ}つ て 地^{つち}と 成^なり

うゐて 有^{うゐ}て 天^{てん}變^{へん}の 世^よの 中^{なか}は

じいっ 自^じ由^{いっ}の 振^{ふる}舞^{まひ}許^{ゆる}さ む や

かみ 神^{かみ}は 汝^{なんぢ}と 俱^{とも}に あり

いよいよ 時^じ節^{せつ}が 參^{まゐ}り な ば

もも 百^{もも}の 正^{ただ}しき 神^{かみ}さ ま は

あく 惡^{あく}を 亡^{ほろ}ぼ し よ こ し ま を

いさ 勇^{いさ}め よ 勇^{いさ}め 民^{みん}衆^{しう}よ

しんせい 神^{しん}政^{せい}復^{ふく}古^この 曉^{あかつき}ぞ

これ 是^{これ}ぞ 全^まく 人^{にん}間^{げん}の

力ちからに及およぶ術すべでない

何いづれも貴たかき神かみ様のさま

悪あくに對たいする警けい戒かいぞ

如いかに大だい名みやう小せう名みやうや

富ふ有い連れんが霸は張ばるとも

彼かれ等らが霸は張ばる世よの中なかは

最も早はや末まつ期ごと成なりにけり

勇いめよ勇いめ皆みな勇いめ

民みん衆しうを苦くるしむ悪あく人にんを

片かたつ端はしから踏ふみ躡にじり

怯おめず臆おくせず堂だう々だうと

火ひの洗せん禮れいを施ほせよ

血ち汐しほを以もつて世よを洗あらへ

向むかひの森もりの茶ちや坊ぼう主ずが

館やかたに後ご妻さいと化ばけすまし

三さん年ねん以この來かた身みを潛ひそみ

富ふ有い連れんに入で入いりする

彼かれに付つき添そひ富ふ有い連れんの

事じ情じやうを查しらべゐたりしが

最も早はや時じ節せつも充みちぬれば

數あまた多たの部ぶ下かに命めい令れいし

火ひの洗せん禮れいを爲させたのは

大だい兵ひやう肥ひ滿まんの此この女をんな

富ふ有い連れん中ちゆうが何なに恐こはい

大だい名みやう小せう名みやう糞くそ喰くらへ

取とり締しまり役やくや目め付つけ役やくが

怖こはくてこの世よに居をられうか

勇いめよ勇いめ民みん衆しうよ

女をんなながらも吾わが部ぶ下かは たらハこくンやま國の山に野にに
幾いくじふまん十萬の生いく身み魂たま 腕かひなを撫ぶして待まつてゐる
いよいよ命めい令れい一いつ下つかすりや 四し方はう八はつ方ぱうの隅すみ々ずみゆ
ドンドン狼のろし火あがが上あるだる 今いまの好かう機きを逸いつせずに
汝なんぢら等せ界かいの改かい造ざうを 命いのちの綱つなと信しんじつつ
振ふるへよ立たてよ立たち上あがれ 民衆みんしう團だんの頭とう目もくと
世よに聞きえたるバらンすは 即すなはち吾わが身みの事ことなるぞ
アい勇いさましや勇いさましや この慘さん状じやうを見みるに付つけ
下しも人じん民みんの傍そば杖づゑは 實じつに涙なみだの種たねなれど
大だい小せう名みやうの狼らう狽ばいの その状ありさま態なを眺ながめては
少すこしは蟲むしも治をさまらむ 更かう生せい院いんが何なんに成なる
これも矢やつ張ぱり富ふ有いう等らの 汝なんぢら等みん民しう衆い般つぱんの
生いき血ちを絞しぼる手て品じなぞや 必かなず迷まよふな迷まよはされな
思おもへば思おもへば村むら肝きもの 心こころの神かみが踊をどり出だす

ああ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はへましませよみたまさち

奸佞邪智の輩のかんないじやち ともがら

目玉飛出しましませよめだまとびだ

十字街道に待ち構へて居た數百の目付隊は、有無を言はせずバラバラと驅け寄つて手取り足取り、取繩をもつて雁字搦みに縛り付け、バランスを荷車に乗せて横大路の取締所へと運び込むでしまった。民衆に化けて居た彼の子分はバランスを取返さむと潮の如く押寄せ、目付と團員との鬪争が演出された。目付隊は既に危ふく見えた時、喇叭の聲も勇ましく二千人の侍は押寄せ來たり、銃を擬して威喝を試みたり。素より完全な武器を有つてゐない民衆は齒がみを爲しながら、見す見す大棟梁を奪はれしまま、退却するの止むを得ざるに立至りける。

バランスは目付頭の前に引出され、嚴重なる訊問を受けた。バランスは少しも怯む色無く滔々として目付頭に食つて掛つた。

目付頭「其方の姓名は何といふか」

バランス「俺の名はバランスといふ者だ。民衆救護團の大頭目だ。有名なバランス

スの面を今まで知らぬようなウツソリした事で、どうして大目付頭が勤まると思ふか、あまり平等を缺いだ強食弱肉の現代だから、バランスを取るためにバランスと命名したのだ」

目付頭「其の方は民衆を煽て上げ、不逞の徒を鳩集し、市街に火を放ち、剩さへあらゆる悪業を敢てし、尚飽き足らず民衆を煽動するとは何の事だ。汝の如き極重悪人は裁判の必要も無い、國家のため不愆ながら銃殺の刑に處するに仍つて、此世の名残に念佛でも唱へておくがよからうぞ」

バランスは女に似合はぬ大膽不敵の英雄である、身動きもならぬところまで縛られながら、少しも恐るる色なく大口開けて高笑ひ、

「アハハハハ、向かふの見えぬ盲ども、銃殺なつと絞殺なつと、出来るなら遣つて見よ。このバランスの命はタラハン國全體とつり代の命だ。數十萬の吾が部下は國內の各所に、バランスが殺されたと聞くなれば一時に蜂起するだらう。汝等如き悪目付は能く後前の成行を考へて手を下したが可からうぞ。第一國民の模範たるべきものの行状は何だ。向日の森の畔に住む茶坊主タルチンの茅屋に年若き

女を忍ばせ、夜な夜な労働者の服を着けて通ひつめ、戀の奴となつて脂下つてゐるではないか、かやうな事で、如何して世話が完全に出來るか、其方どもは呑舟の魚には恐れて近寄らず、鮒やモロコの如きウロクツを漁つて目付力が如何の、政治が如何のと、好え氣に成つて國の滅亡を知らない馬鹿者だ」

目付頭「バランス、何という畏れ多い事を言ふのか、人民の分際として、その行動を云々するという不敵な事があるか」

バランス「ハツハハハ、それほどお邪魔に成りますかな。しからばこの問題は御推量を願つておきませう。よく茶坊主を呼出してお查べなさい。それについても許し難きは左守ガンヂーが倅アリナと言ふ奴、不届至極にも茶坊主を取込み、山出し女との媒介を致して居るのみならず、自分は殿中に錦衣を着け、偽太將と成り代り、左守右守の目を眩ましてゐるではないか。大王殿下は御重病にて上下憂鬱に沈む折柄、倅たるものは女に狂ひ、また左守の倅は王位を奪はむとしてゐる大膽不敵の曲者、その他の大名どもは之を見ても推して知るべしである。このバランスはタラハン國民衆全部の代表者だ、決して嘘は言はないぞ、早速調べて見

るが宜からう」

この言葉に目付頭も竝みゐる目付等も色を失ひ、太息を漏らして互ひに面を見合すのみであつた。またもや民衆と目付役と鬪ふ聲、庭の近邊に喧しく響いて来た。

(大正一四・一・六 新一・二九 於月光閣 松村眞澄録)

第一〇章 宗匠財(一七三四)

取締所を中心とし附近における民衆と侍との鬪争は、一時酣となつて来たが、民衆の救主、貧民の慈母と尊敬されてゐる大頭目のバランスを取返さむとして、民衆一般は爺も婆も、脛腰の立つもの、猫も杓子も刻々に集まり來たり其の勢ひ凄じく、目付隊も侍も如何ともすべからず、遂に大目付頭も我を折つてバランスの繩を解き、民衆との妥協を圖り、かつ諫言申上げる事となし、茶坊主を召喚し

て事の實否を調査した上、左守の倅アリナを民衆の前にて重刑に處す事を誓ひ、ここに漸く大騒動も鎮定するに至つた。

目付頭は逸早く部下に命じて茶坊主を拘引せしめた。茶坊主が拘引されたのを見るや、スバル姫は大いに驚き、をりから勞働服姿にて忍び來たりし戀人と共に暗に紛れて都を遠く姿を隠した。アリナも亦形勢の容易ならざるを覺り、忍たまま、大目付頭の前に引出され訊問を受けた。

大目付役「其方の姓名は何と申すか」

タルチンは長い禿頭を二つ三つ振りながら、やや腰をかがめて、

「ハイ、私は向日の森の傍に住む茶の湯の宗匠タルチンと申すものでございます。何ぞ折入つた御用がござりますかな。罪も無い私をお役人さまが突然遣つて來て、こんな處へ連れて來られる覺えはござりませぬ。ここは悪人の來る處ぢやござりませぬか、清淨無垢の私、神妙に茶の湯をお歴々方に傳授し淋しくおとなしく餘世を送つてゐるものでございます。それに三年も連れ添うてをつた大切の大切の

嬢に逃げられ、心配の最中、こんな處へ連れて來られては一向、日當も取られず、誠に貧民の私、明日から臆櫃が上つて了ひますがな。どうか相當の日當を頂戴致したいものでござります。そして罪もない私をお縛りになりましたのだから、賠償品を頂き度うござります。冤罪者賠償法が、發布されむとする今日、どうか、そこは、あんまり高い事は申しませぬから、私の價值相當に御支給を願ひたいものでござります』

大目付「貴様は馬鹿だな。お歴々の家庭に出入し茶の湯の傳授でもしようといふ身でありながら、かやうな處へ引連れられて、左様の請求をすると云ふ事があるものか、エーン」

タルチン「如何なる處へ参りましたも、ヤツパリ日當は請求いたします。左守の司の邸へ参つても、また畏多くもタラハン城内の茶寮に参りましたも、相當のお手當を頂いて居りますから、たとへ半時でも、それだけのお手當を頂かなくちゃ渡世が出來ませぬ。お前さまの様に澤山の子分を使つて、朝の九時頃から出勤して椅子にもたれ、面白さうに新聞を見ながら彼是する間に十二時が來る、さうす

りや料理屋辨當を取つて強たかお食りなされ、また一時間ばかり食後の運動だと言つて面白い處を廻り、それから讀み残りの新聞を讀み、盲判を二つ三つポンポンと押してサツサと宅に歸り、大小名の待遇を受けて澤山の月給を取るお方と同じに見て貰つては、チツと割りが悪うござります。私のやうに高い炭を爐にくべ、
「ヘーコラ、ハイコラ」とお辭儀ばかりして、ヤツとの事で糊口を凌ぐばかりのものと同じに語る事は出来ませぬ」

「その方は女房に逃げられたと申したが、その女房は何と申すものか」

「ハイ、私の女房は思ひの外の「ドテンバ」でございりますが、どうしても名を申しませぬので袋と申してゐます。その袋に千兩の金を持つて逃げられ、私は梟が夜食に外れたやうな失望落膽の淵に沈んでゐます。貴方も人民保護のお役なら私の女房を捜して下さい。そして女房と金とを取返してもらひたいものです。實は保護願ひをしようと思ひましたが、何分珍客さまがおいで遊ばすので目放しが出来ず、そこへあの大火事と来てゐますのでツイ遅れてゐました」
「其の方は、その日暮しと申してゐるが、どうしてもその千兩の金を所持致してを

つたのだ」

「これはまた妙な事を仰せられます。お金といふものは人間の持つべきものです。人間が金をもつてゐるのが、どこが不思議ですか」

「持つてゐるのが悪いとは言はぬ、どうして拵へたかと言ふのだ」

「これはまた大目付頭にも似合はぬお言葉、どうして拵へたかとは私をも紙幣偽造犯人とお思ひですか。あの紙幣は兌換だか不換だか知りませぬが、貴方がたが

経営してござる印刷局から刷り出された物ぢやござりませぬか。キューピーさま

や福助さまが付いてござる彼のお札ですよ。私は紙幣を拵へるやうな器用なもの

ではございませぬ。茶の湯では十二手前を本とし、それから分れて三百十六手前

となり、また茶の湯の綱目としては初段から七段までの手前を存じております。

茶の湯の事なら、いくらでもお答へ致しますが、金を拵へる事はチツとも存じま

せぬ。これはお役人さまの、お眼鏡違ひでござりませう、オツホン」

「エー、分らぬ奴だな。その金を、どうして儲けたかと聞いてゐるのだ」

「これはまた妙なお尋ねでござりますな。私は茶の湯の宗匠が稼業でござります。

如何して儲けやうと、商賣の上で、儲けたことをお叱めを蒙る譯もあるまいし、又それを貴方に説明する義務も無し、また貴方も人の儲けた金を彼是言ふ權利もござりますまい、そんな事は要らぬお節介ですよ。私もチヨコチヨコお前さまの御親類内へ茶の湯で出入りをしてありますが、お親類の方の話の話を聞けば、大目付さまは澤山な賄賂を取つて町の眞中へ待合を許し、其所へ妾を抱へてござるとのこと、この話は決して違ひますまい。何と言つても、あなたの御親類、しかも、貴方のお妹御の嫁入先で聞いたのですから」

「こりやこりや、外聞の悪い、何を言ふのだ。澤山の目付が、そこに聞いてゐるぢやないか。其方は神法を心得ぬか、「事の有無に拘らず、人を公衆の前にて誹謗した者は知計法第八百條にて刑鉢に處す」と書いてある。メツタの事をいふものではないぞ」

「へッへへへ、御都合が悪うござりますかな。チツと茶の湯加減が過ぎましたので、熱い汗をかかせました。ハツハハハ」

「お前の宅に、エー、珍客が居られたといふ事だが、本當か」

「へーへー、居をられましたとも、まだ現げんにゐられるでせう。畏おそれ多くもスダルマ
ン様さまが、元もとの左守さもりの娘子むすめこスバル姫ひめといふ、それはそれは天女てんによのやうな美人びじんをか
くまつてくれと言いふ事ことで、夜よな夜よなお通かよひでござります。本當ほんたうに素敵すてきな美人びじんです
よ。何なんと言いつてもスダルマン様さまの御身おんみ、御意見申ごいけんまをすも恐れ多おほいと謹つしんで御意ごいに應おう
じました。何分取締所なにぶんとりしまりしよあたりから御褒美ごほうびでも頂いたけさうなものと、首くびを長ながうして待ま
つてをりますよ。妙法様スダルマさまのお心こころを慰なぐさめ奉まつり、無上むじやうの歡喜くわんきをお與あたへ申まをした此このタル
チンは、正まさに勳一等功一級くんいつとうこういつきふの價値かちは確たしかにあるでせう。夫それにも拘かわらず、タラハン
國こくにおいて雷名らいめい隠かくれなき最大さいだい權力者けんりよくしや、左守さもりのガンヂー様さまの一人息子ひとりむすこアリナの君様きみさま
に頼たのまれて、未み來らいのお妃様ひいさまのスバル嬢様ぢやうさまに、お茶ちやの手前てまへを傳授でんじゆ申まをし上げてゐる
のです。何程なにほど偉えらさうに申まをしてもお前まへさまとしては、妙法様スダルマさまを直接ちよくせつにお世話せわしたり、
お妃ひいさまに尊たふとい茶道さだうを傳授でんじゆするといふ事ことは出來できますまい。マアそんな小難こむづかしい顔かほ
せずにお考かんがへなさいませ。今いまに妙法様スダルマさまが、大王だいわうの跡あとを繼つがれましたならば、私わたしは
大王様だいわうさまのお師匠様ししやうさまと成なつて、殿内でんない深く、すまし込み、殿下でんかの耳みみを嗅かぐ役やくに拔擢ばつてきさ
れますよ。それだから、お前まへさまも出しゆつせ世せが仕度したくば今いまの中うち、このタルチンを十分じふぶん

待遇して置きなさい。葡萄酒の一打ぐらゐ贈つても可し、金平糖の一斤ぐらゐは
チヨイチヨイ贈つて下さい。此方も茶菓子の足しにもなり、誠に好都合だ。お前
さまも、私に取り入るのは今の中ですよ、オツホン
と豪然としてすまし込んでゐる。

「オイ、ハルヤ、タルチンの繩目を解いて遣れ」

「ハイ、承知いたしました」

タルチン「イヤ、ならぬならぬ、この繩目は此の儘にして置いてくれ。妙法様に、
お前等が寄つて集つて、こんな目に會はしやがったと言つて、具さに言上してや
る。さうすると、きつとタルチンの鼻肩をなさつて、お前等は直ぐさま免職だ。

お氣の毒様の事だ、ぐづぐづしてゐると大目付頭様に飛火が致しますよ。この繩
が解かし度ければ、解かして遣らう。幾等機密費を出しますかな」

大目付「アツハハハハハ此奴ア、どうも、キ印だ。キ印を捉まへて法律で罰する
事は出来ぬ。身心喪失者と認める。オイ、タルチン、唯今より放免する、有難う

思へ」

「ヘン、さう、うまくは問屋が卸しませぬよ。妙法様の御覺え目出たき寵臣を縛り上げながら、放免も糞もあつたものか、チツとお前さまの遣り方は方面が間違つてゐるぢや無いか。いつかないつかな此處を立退いてなるものか。今に妙法様がタルチンの所在を尋ねて、最新調の自動車をもつて迎へに來られるに違ひない。それまでは誰が何と言つても、此處は一寸も動きませぬぞ」

「アア困つたものを引張つて來たものだな。オイ、ハルヤ、とも角、この狂人の繩を解き、彼が館に送つて遣れ。さうして妙法様が御在宿かいなかと言ふ事を、よく調べて來るのだぞ。必ず不都合の無いやうに氣を注けて行け」

と言ひながら大目付は懷から時計を出して、

「ヤア、もう退出時間だ」

と言ひながら逃ぐるが如く、ドアを開けて妾宅さして歸り行く。

タルチンは、大聲を張上げながら、

「コリヤ、大目付の奴、逃げるといふ事があるか。待て、貴様に一つ灸を据ゑてやる事がある。俺の言ふ事を聞かずに逃げて行けば、明日から免職だぞ」

と唼鳴り立ててゐる。

漸やっやくにして數多あまたの目付めつけが持もて餘あましものタルチンをいろいと納得なつとくさせ、葡萄ぶどうし酒ゆや菓子等くわしなどを與あたへて機嫌きげんをとり、ヤツとの事ことで彼かれの家いへに送り届とどける事こととなつた。タルチンは目付連めつけれんに護送ごそうされながら吾わが家やに歸かへり行く道々みちみち、葡萄酒ぶどうしゆの醉よひがまはつて、謠うたひ出だした。

アア面白おもしろい面白おもしろい この世よの中なかは何なんとして

馬鹿ばかに面白おもしろうなつたのか 妙法スダルマの君きみは吾わが家いへに

夕あさから晩ばんまで意茶いちや付ついて 妃きさいの君きみと諸共もろともに

朝あさから晩ばんまで意茶いちや付ついて 涎よだれを垂たらしてお在はします

それに左守さもりのガンヂーの 倅せがれのアリナがチヨコチヨコと

横目よこめを使つかつて遣やつて來くる さう斯かうする中うち夕あさラハンの

町まちに響ひびいた鐘かねの音おと 窓まど押し開あけて眺ながめむれば

ドンドンと町中まちなかの 民家みんかは燃もえる人ひとは泣なく

瞬またたく間うちにタラハンの

街まちの半なかばは黒土くろつちと

なつて了しまつた氣きの毒どくさ

今いままで贅ぜい澤たくざん三昧まいを

盡つくしてゐよつた富ふう者しや等の

今け日の慘みじめの態さま見みれば

ホゆンくわいに愉ゆ快くわいな世よの中なかだ

大おほ目め付つけ頭がしらとい言いふやっ奴は

俺おれをわざ態わざ々ひつぱ引ひ張つつて

下くだらぬこと事を尋たづねあ上げ

理り窟くつに負まけて泡あわを吹ふき

屁へ古こ垂たれよつてブルブルと

菟こ弱んにやくのやうに慄ふるひ出だし

懷くわい中ちゆう計どけいを取とり出だして

もはや退たい出しゆつ時じ間かんだと

うまい辭じ令れいを浴あびせかけ

コソコソコソと逃にげよつた

こんながらくた役やく人にんが

都みや大こ路ほぢの眞まん中なかに

頑ぐわん張ぱつて居ゐるやうな世よの中なかは

如ど何うして吾われ々われ人じん民みんが

枕まくらをたか高たかくね寝ねられよか

さはさりながら是これも皆みな

大おほ神かみ様さまの仕し組ぐみだる

零おち落ぶれ果はてた俺わしさへも

妙スダルマ法まの君きみのお見み出だしに

預あづかりよつて姫ひめ様さまの

お手てをとつての指し南なん役やく

茶ちやの湯ゆの師匠ししやうのタルチンは 天下てんかに無比むひの幸福しあわせ者ものだ
向むかふに見みえるは吾わが住すめる 館やかたの側そばの向日むかひの森もりだ
オイオイ皆みなの御連中ごれんちゆう 少時しばらく待まつてゐるがよい
俺おれが出世しゆつせの曉あかつきは キツと引立ひきたててやるほどに
必かならず必かならず世よの中なかを 悲觀ひくわんなさるな善よい後あとは
必かならず悪わるい悪わるいあとは 必かならず善よい芽めが吹ふくものだ
エへへエツへエへへへ

これこれ皆みなの衆しゆう、御苦勞ごくらうでござつた。もうこれから去いんで下ください」

(大正一四・一・六 新一・二九 北村隆光録)

第一章 宮山嵐みややまあらし(一七三五)

タラハン城じやうより正南まみなみに當つて三千メートルばかりの地點ちてんに、千年の老木鬱蒼らうぼくうつさうとして生え茂る風景ふうけいのよき小高き獨立したる山がある。これを國人くにびとはタラハンの大宮山みややまと稱へてゐる。山の周りに深い池が廻つてゐて碧潭へきたんを湛えてゐる。この山にはウラル教の祖神盤古神王そしんばんこしんわうが宮柱太敷建て、開闢の昔より鎮祭され、タラハン王家の氏神として王家の尊敬最も深く、市民は此地を唯一の遊園地として公園の如くに取り扱かつてゐた。八日の月は橢圓形の姿を現はして宮山の空高く輝いてゐる。幾百とも知れぬ時鳥の鳴き聲は何ともいへぬ雅趣を帯び、文人墨客の夜な夜な杖を曳くもの引きも切らない有様である。しかるにタラハン市の大火災が起つてからは時鳥を聞きに行くやうな閑人もなく、又あつたところが世間を憚かつて足を踏み込む者も無かつた。左守ガンヂーの倅アリナは取締所の搜索隊を避けて、盤古神王を祭りたる古き社殿の中に身を忍び時の至るを待つてゐた。民衆救護團の團員として聞こえたるハンダ、ベルツの兩人は、目付の鋭鋒を避けて社の階段の中程に腰打ちかけ、ヒソビソと囁いてゐる。

ハンダ「オイ、ベルツ、惜しい事をしたぢやないか。もすこし目付連の出動が遅

ければ、右守の館も遣つ付けて仕舞ふのだつたのに、取返しとりかへの付かぬ事を遣つてしまつたぢやないか。あの際に遣り損ねたものだから目付めつけの奴やつ、四方八方しほうはつぱうにスパイを廻しまは、危あぶなくつて手も足も此頃このごろは出だす事ことが出来できない。何とかして彼奴きやつを片付かたづけねば、到底たうてい吾等われらの目的もくてきは達たつせられないだらうよ」

ベルツ「今いまとなつて死しんだ子の年としを數かぞえるやうに愚癡ぐちつて見みたところで仕しやうがないぢやないか。まアまア時節じせつを待まつのだなア。しかしながら惜をしい事ことには左守さもりのガンヂーを取逃とりにがしたのが殘念ざんねんだ。あの夜よさ、彼奴あいつは玉たまの原はらの別莊べつさうに居あやがつたので、死損しにぞこなひの命いのちを助たすかりやがつたのだ。もちつと彼奴あいつの居處きよしょを調しらべてから遣やつたら宜よかつたのだけれどもなア」

「何なに、あんな老耄おいぼれおやぢ爺ぢ、放ほつておいても、もうここ三年さんねんと壽命じゆみやうはあるまい。手てを下くださずに敵てきを亡ほろぼさうと儘ままだ、放ほつとけば自然しぜん死しぬる代物しろものだ」

「俺おれだつて年としが寄よつたら死しぬるぢやないか。これだけ國民こくみんの苦くるしむで居ある世よの中に、あんな奴やつを一日いちにちでも生いかして置おけば一日いちにちだけでも國家こくかの損害そんがいだ、彼奴きやつが、一日いち早く死しねば、少すくなくとも千人せんにんぐらゐのひとが助たすかるのだ。彼奴あいつが十日とをか此世このよに居あれ

ば萬人の人が饑餓で死ぬる勘定だ。それだから俺は「一刻も猶豫ならぬ」と主張したのだが、大體貴様のやり方が緩慢だから蜂の巣を突いたやうな事をやつてしまつて、二進も三進も仕やうのないやうな事になつてしまつたぢやないか。大頭目のバランス女史は取締所へ引かれるという有様、まづ吾々の計畫が甘く圖に當つて漸く取返しはしたものの、その後といふものは七八人のスパイが尾行してゐるから、何ほど英雄豪傑のバランス親分だつて、手の出しやうがないぢやないか」

「まアさう慌てるものぢやない。親分はああして尾行付きとしておけば、取締所の奴は凡暗だから、安心して段々と目配線を緩めるに相違ない。その時はバランス親分になり代り、俺とお前が國內の團員を煽動して、水も漏らさぬ計畫の下にクーデターを執行しようぢやないか。今日のやうにスパイが迂路つき壓迫を受けてゐては、如何に智謀絶倫の俺だと言つても手の着けやうが無い。まアまア時節を待つ事だなア」

「左守右守を取り逃したのは残念だが、しかしあの左守の倅アリナという奴は、今はああして居るけれど、實際は吾等の味方だよ。今度事を擧げても彼奴ばかり、

助けねばなるまい」

「ウンさうかも知れない。このごろは大目付に憎まれて何處かへ逃げたといふ事だ。鳶が鷹を生むといふ譬があるが、本當に彼のアリナと言ふ奴は、吾々に取つては頼母しい人物かも知れない。この間からサクレンスの屋敷を四五人の部下に交る交る窺はしてゐるが、あの大火災以來警戒が嚴になり、屋敷の周圍には數十人の目付をもつて固め、外出の時には侍に鐵砲を擔がせて登城するといふ嚴重の目配振りだから、マア暫くの間は彼奴の命も預かつておくより仕方がないワ」

「左守の倅、アリナは何處かへ逃げたといふ事だが、噂に聞けば妙法様もまた行方が不明だといふ事ぢやないか、彼の太子もよほど新しい思想を持つてゐるらしい。あのアリナを唯一の寵臣として使つてゐた事を思へば、カラピン大王のやうな没分曉漢ではあるまい。俺達は別に妙法様が世に出て立派な政治をさへして下されば、どこまでも喜んで従ふのだ。唯憎らしいのは君側を汚す右守、左守、その他の重臣共だ。そして第一氣に喰はないのは大小名や物持ちの奴等だ。これだけ民衆の聲が彼奴等の奴聲の耳には通ら無いのだから、むしろ憐むべき代物だ。」

地雷火の伏せて有る上に安閑として睡つてゐる代物だよ」

「オイ、ベルツ、何だか階段を登つて来る影が見えるぢやないか」

「なるほど、あの提燈は左守家の印が這入つてゐる。左守の奴、澤山の守侍を連れて遣つて來たのだ。どうやら俺達を取り押へに來たらしいよ。オイ、油斷は大敵だ、逃げる逃げる」

と言ひながら二人は階段を上り社殿の後ろへ廻り、一生懸命に下樹の生ひ茂つた森の中を倒けつ轉びつ、茨にひつかかれ顔と手とを傷つけながら森を潜り、宮山の南麓の一本橋を渡つて、一生懸命に竝山の方面さして逃げて行く。左守のガンチーは太い杖を突きながら漸く階段を昇り來たり、二十人の護衛兵に四方を取り巻かせ祠の前に坐り込み、拍手の音も靜かに一生懸命に祈願を籠めはじめた。

「掛巻も畏き大宮山の上つ岩根に宮柱太敷き立てて永久に鎮まります盤古神王鹽長彦命の大前に、タラハン城の柱石と仕へまつる左守の司ガンチー謹み敬ひ畏み畏み祈り奉ります。如何なる曲神の曲禍にや、カラピン王様は思ひがけない重病

に罹かからせたまひ、お命いのちの程ほども計はかられず、お蔭かげ様によつて殆ほとんど御臨終ごりんじゆうかと大小名だいせうみやう一同いちどうが憂うれひに沈しづみましたが、漸やうやく此頃このころは少すこしくお快こころよき方ほうにならせられましたなれど、何を言いつても御老體ごらうたい、到底たうていこのままでは平年へいねんの御壽命ごじゆみやうも難むづかしからうと存ぞんじます。今いまやタラハン國こくは、各地かくちに暴動ばうどう起おこり國家こくかの危急ききう目前もくぜんに迫せまりをります際さい、國くにの要かなめのカラピン王わう殿下でんかが萬一まんいち御昇天ごしやうてんでも遊あそばすやうな事ことがございましたは、吾々われわれ大名だいみょうを初はじめ國民こくみんの歎なげきは如何いかばかりか計はかり知しられませぬ、何卒なにとぞ々々なにとぞ大王だいわう殿下でんかの御病ごびやう氣きが大神おほかみ様の御神德ごしんとくに依よりまして、一日いちにちも早はやく御全快遊ごぜんくわいあそばしますやう、ひとへに祈いのり奉たてまつります。次つぎには妙法スダルマン太子たいし様、先日せんじつの火災くわさいの有ありし日ひより、踪跡そうせきを晦くらまし給たまひ、今いまにお行方ゆくへも分明ぶんめいならず、大名だいみょう共どもは日夜にちや殿内でんないに集あつまり種々しゆじゆと協け議ぎを爲なし、目めつ付連つけんを四方よもに派遣はけんし搜索そうさくに勤つとめてをりますが、今いまに何なんの頼たよりもございませぬ。何なに卒々とぞ々なにとぞ一日いちにちも早はやく太子たいしのお行方ゆくへが分わかりまして城内じやうないへお迎むかへ申まをす事ことが出来できますやうに、お祈いのり申まをします。不幸ふかうにして大王だいわう殿下でんかが御昇天遊ごしやうてんあそばすやうな事ことがございまして、直すくさま王位わうゐを繼承遊けいしやうあそばさねばならぬ太子たいし様のお行方ゆくへが知しれぬやうな事ことでは、この亂みだれたる國家こくかを治をさめる事ことは到底たうてい不ふ可か能のうでございませぬ。どうぞ太子たいし様が御無事ごぶじ

でいらせられまして、一時も早く城内へお歸り下さいますやう、大神様の御守護を祈り上げ奉ります。また私の倅アリナと申すもの、去る五日の火災の夜より行方不明となりましてございますれば、是も恐れながら無事に歸つて参りますやう、さうして彼は太子様を唆し種々の好からぬ知恵をつけましたものでございますから、彼を一時も早く捕縛いたしまして、民衆の前で重き刑に處さねば、何時までもこの國は治まりませぬ。盤古神王様、何卒々々この老臣が願ひをお聞き下さいますやう、王家のため國家のため赤心を捧げて祈り奉ります」

アリナは社の中に身を潛めながら、父ガンヂーの祈願を残らず聞き終り、
「や、こいつは大變だ。爺までがグルになつて俺を探し出し民衆の前で殺すつもりだな。よし一人より無い子を殺さうといふ鬼心なら、此方も此方だ。父父たらずんば子子たらずとは聖者の金言、よし一つ神様の假聲を使つて、爺の肝玉を挫いてくれむ」
と獨りうなづきながら、社殿も「はじける」ばかりの唸り聲を出し、臍下丹田に息を詰めて、

「ウーウー」

と唸り出した。左守のガンヂーを初め守侍どもは殿内の唸り聲に肝を潰し、體を慄はせながら大地に蹲踞まつてしまった。

アリナ「此方は大宮山に齋き祭れる盤古神王鹽長彦大神の一の眷族天真坊でござるぞよ。汝ガンヂーとやら、その方は不届き至極にも十年の昔モンドル姫を唆かし悪逆無道を敢行せしめ、カラピン王の精神までも狂はせ、無二の忠臣左守のシャカナを城内より追ひ出し、己とつて代つて左守となり、國民を苦しめ國家を亂せし悪逆無道の張本人だ。去る五日の城内の大騒動も元を糺せば汝がため。なぜ責任を悟つて自殺を遂げ、王家および國民にその罪を謝さないのか、不届き至極の癡漢奴。その皺腹を掻き切るくらゐが惜しいのか、いや命が惜しいのか。痛さに怯えてよう切らないのか。てもさてもいい腰拔野郎だなア」

ガンヂーは慄ひ聲を出しながら、

「いやもう恐れ入つてございます。老先短き吾が命、決して惜しみは致しませぬが、いま此際私が目を眠りますればタラハン國は瞬く間に滅亡いたし、王家は滅

び、遂に赤色旗が城頭に立てらるるやうになるでござりませう。これを思へば大切な私の命、國家のためを思へば死ぬ事は出来ませぬ」

ア「其方が此世にある事一日なれば一日國家の損害だ。國家の滅亡を早めるのは其方が生きてをるからだ。眞に國家國民を救はむとする赤心あらば、一時も早く自殺を致すか、それがつらいと思はば一切の重職を王家に返上し、焼け残つた別荘も國家に獻じ民衆の娯樂場と爲し、其方は罪亡ぼしのため乞食となつて天下を流浪いたし、下萬民の生活状態を新しく調べて見るがよからう。どうだ、合點がいつたか」

「ハハ、ハイ、左様心得ましてございます。しかしながら私は乞食になつても國家のためなら厭いませんが、あの倅奴を代りに助けて下さいませ。さうして細々ながらも左守の家を継ぎますやう、御守護を願ひ奉ります」

「これやこれや老耄、汝は狼狽たか、血迷うたか。倅のアリナを一時も早く捕縛し、民衆の面前にて重き刑に處せなくては民心を治める事が出来ない」と唯今申したではないか。汝は神の前に來たつて口と心の裏表を使ふ不届き至極の奴だ。

待て、今に神が手づから成敗を致してくれむ、ウー」
と社殿も割るるばかりの大音聲にて唸り立てた。守侍はガンヂーを捨てて吾先に
と階段を下り、武器を捨て命辛々逃げて行く。ガンヂーもまた、怖ろしさ淋しさ
に居耐まらず、百二十段の階段を毬の如く轉げながら落ち下り、數ヶ所に打ち創
を負ひ、ほふほふの體にて玉の原の別莊さして杖を力に歸り行く。
アリナは父ガンヂーその他の逃げ歸りしを見て、やつと胸を撫で下し、宮山を
南に下り危なげな一本橋を渡つて山といはず河といはず、膝栗毛に鞭うちて月照
る夜の途を、薄の穂にも怖ながら、もしや追手に出遇ひはせぬかと安き心もなく
西南の空を目當てに逃げて行く。

父と子が内と外との掛合を

聞きて御神は笑ませたまはむ

赤心はたしかアリナの倅とは

知りつつ爺御前に訴ふ

ある時は吾が子を憎みある時は

いとしと思ふ親心かな

タラハンの城の曲神も大宮の

佯り神に恐れて歸りぬ

守侍は吾が職掌を打ち忘れ

主をすてて歸る卑怯さ

(大正一四・一・六 新一・二九 於月光閣 加藤明子録)

第一二章 妻狼の囁(一七三六)

若葉はそよぐ初夏の風

山時鳥四方八方の

密樹みつじゆの蔭かげにひそみつつ
悲かなしき聲こゑを張はり上あげて

神かみの造つくりしタラハンの
國くにの行末ゆくすゑ歎かこつなり

李すもも杏あんずも梅うめの實みも
色いろづき初そめて遠近をちこちの

田たの面もに數多あまたの首陀しゆだたちが
生いのち命のちの苗なへを植うゑつける

その有ありさま様を眺ながむれば
降ふる五さ月み雨だれに蓑笠みのかさを

おのもおのもにつけながら
三さん々さん伍ご々と隊たいをなし

田たの面もに唄うたふ勇いさましさ
一いち年ねん三さん百ひゃく五ご十じふ日にち

たつた一度いちどの植うゑ付けの
好かうシーズンのめぐり來きて

人ひとの心こころもせいぜいと
希き望ぼうに充みてる折をりもあれ

タラハン市街しがいの大火災だいくわさい
忽たちまち暴徒ばうと蜂起ほうきして

特權階級とくけんかいきふ富有者ふいいうしやどもの
大邸宅だいていたくに火ひを放はなち

婦女ふぢよをば姦かんし金錢きんせんを
不逞ふていの首陀團しゆだだんりやくだつ掠奪りやくだつし

諸種しよしゆの主しゆ義者ぎしやは一いち時ときに
手てに唾つばきして立上たちあがり

吾等われらが日頃ひごろの鬱憤うつぶんを
晴はらすは今いまや此時このときと

警戒厳しき警察を
向方に廻して戦ひし

その勢ひは枯野をば
燃えゆく焰の如くなり

ここに軍隊出動し
漸く一時は暴徒も

鎮壓したれど何時か又
大騒動が起らむと

期待されたるタラハンの
城下の人心恟々と

安き心もなかりけり
左守右守の神司

吾が權勢の忽ちに
おち行く虞れありとなし

あらゆる手段をめぐらして
軍隊警察召集し

水も洩らさぬ用心に
さすが不平の連中も

一時は影をひそめけり
カラピン王は重病に

苦しみ玉ひて國政を
見玉ふ術も更になく

太子の君は騒動に
紛れて影を隠しまし

左守の司のガンヂーは
心ばかりは焦てども

よる年波に力落ち
勇氣は頓に阻喪して

單に無用の長物と 誹られながら氣がつかず
萎れ切つたる兩腕を ウンと叩いて雄健びし
敦圀く様は螳螂が 斧を揮うて立てる如
そのスタイルの可笑しさよ 心汚きサクレンス
この有様を見るよりも 國家の前途は風前の
燈火の如しと吾が妻の サクラン姫と頭をば
傾け前後の策略を めぐらしめるこそうたてけれ。

サクレンス「サクラン姫よ、世の中が追々と、かう物騒になつて來ては、俺もウツかりはして居れない。今までとは世の中が、何もかも一變し、吾々如き特權階級や資本階級の滅亡する時期が迫つて來たやうだ。このままに放任しておけば、タラハンの國家は言ふに及ばず、王家も吾々の階級も遠からぬ内に地獄の憂目を見るやうな事が出來はせまいかと案じて寢られないのだ。お前は一體、今日の世態を何う成行くと考へてるか」

サクラン「仰せの通り、世はだんだんに行詰つて参りました。經濟界、政治界、宗教界は申すに及ばず、實業方面においても一切萬事行き詰り、實に惨めな状態となりました。しかしながら窮すれば通ずとか申しまして、禍ひの極端に達した時は、キツと幸ひの芽を吹くものでございます。去る五日の大火災にも、城内の茶寮は焼け落ちて、あらゆる國寶は全部灰燼に歸し、左守の邸宅まで、あんな惨めな事になりました。それにも拘らず、右守の邸宅は一部分暴徒に破壊されたばかりでこの通り安全に残りましたのも、右守家に對し盤古神王様が、大なる使命のある事を暗示されたものと考へられます。斯様に混亂状態に陥つた社會では、弱いと見られたならば忽ち叩き潰され、亡ぼされてしまふものです。それゆゑ此際は國家のために満身の力を發揮し、空前絶後の大計畫を遂行して、國民上下の膽を奪ひ、右守の威力を現はし、威壓と權威とを示して、國民の驕慢心を抑へつけねばなりませんまい」

「お前のいふ事も一應もつとものやうだが、人心極端に惡化し、吾々の階級を殲滅せむと國民が殆んど一致して時期を待つてゐるといふ時代に際し、【なまじひ】

に小刀細工を施してみたところが、かへつて萬民の怒りを買ひ、滅亡を早めるやうなものだ。ぢやといつてこの難關を打ちぬけ、民心を收攬し、太平無事に國家を復興することは難事中の難事だ。如何なる聖人賢人と雖も、この際かかる世態に對し、メスを揮ふ餘地はあるまい。アア困つた事だワイ。大王殿下は御重病、何時お國替へ遊ばすやら計り知られぬ今日の有様、太子の君はお行方は分らず、左守司は老齡激務に堪へず、また彼が倅のアリナは踪跡を晦まし、タラハン國はすべての重鎮を失はむとしてゐる。要のぬけた扇の如く到底收拾すべからざる内情となつてゐる。今後また去る五日の如き騒亂が勃發せうものなら、それこそ王家を始め貴族階級の斷滅期だ。何とかしてこの頽勢を挽回する事は出來よまいかなア

私の意見としては此際思ひ切つて大鎧を揮ひ、大改革を斷行せねば、到底駄目でございますませう。老朽ちて將に倒れむとする老木も、根元より幹を切り放たば新しい芽を吹き、その爲再び生命を持續する事が出來るものです。吾が夫様、此際あなたは大勇猛心を發揮し、國體を根本的に改革遊ばす御所存はございませぬか

「イヤ、俺にも考案はない事はないが、さりとて餘りの叛逆だからなア」

「ホホホホ、叛逆無道の世の中を立替立直すのが何故に叛逆でございますか。よく考へて御覽なさいませ。大王様はあの通り、太子殿下は御行方分らず、左守の老衰、かくのごとく國家の重鎮に大損傷を來たした上は、もはやタラハン國における最大權力者は右守家を措いて外にはないぢやありませんか。民心を新にするため、思ひ切つて王女バンナ姫様を表に立て、弟のエールを王位につかせ、國民上下の人心を收攬し、あなたは國務總監となつて、無限絶大な權威を揮ひ、政治の改革を斷行なさるより外に、國家を救ふ道はございません」

「なるほど、俺も其事は今までに幾度か考へてみた事もあるが、あまりの陰謀で、女房の其方にも言ひ兼ねてゐたのだ。お前が其心なら、俺は強力なる味方を得たも同然、思ひ切つて斷行を試みやう。しかしながら、ここ暫くは祕密を嚴守せなくてはならうまい。萬々一この計畫が夫婦以外に洩れ散るやうな事があれば、それこそ右守家の一大事だ」

「凡て大業を成さむと思へば、祕密を守るのが肝心でございます。暫く人心の治

まつた潮時を考へ、公々然と天下に向かつて國政改革を標榜し、エールを王位に上らせ、バナナ姫を王妃と成す事を發表遊ばせば、茲に始めて維新改革の謀主として貴方を國民が欣慕憧憬するやうになるでございませう。それより外に適當な方法手段はございませんまい」

「それについては、第一氣に懸るのは太子の君だ。折角エールとバナナ王女を立て、國家の改造を標榜してゐる最中、ヒヨッコリ太子が歸つて來て、異議を唱へ給ふやうな事があれば、吾々の折角の計畫も水泡に歸するのみならず、右守を叛逆者として大罪に問はるるかも知れぬ。それゆゑ俺の思ふには、まづ太子の身上から片付けて掛らねばなるまい」

「成るほど、それが先決問題でございます。しかし幸ひに太子様を巧く片付けたところで、左守の倅アリナが此の世に在る限りは、再び折角の計畫を覆へさるる虞れがございます。これも序に何とか致さねばなりませんまい」

「ウン、それもさうだ。しかしながらこの兩人を處置するについては、石で臨むか、眞綿で臨むか、何れかの方法を取らねばなるまい、どちらが能からうかなア」

□ 天下混亂の際、生温い方法手段では駄目でございますよ。疾風迅雷耳を掩ふに暇なき早業を以て、キツパリと幹を切り根を絶ち葉を枯らし、新生面を開かねば腐敗し切つたる現代を救ふ事は到底出来ません。但しその方法手段は……斯様

とサクレンスの耳に口をよせ、奸佞邪智のサクラン姫は何事が右守に教唆した。サクレンスは幾度となくうなづきながら、

□ ウンウンよからう。なかなかお前も隅にはおけぬ悪人だ。悪にかけては抜目のない逸物だ、ハハハハ

と小聲に笑ふ。サクランは目を怒らせ口を尖らせながら、サクレンスの膝を叩いて小聲になり、

□ 國家の大改革を斷行し、國民塗炭の苦しみを救ひ、國家萬年の策を立つるのがそれほど悪でございませうか。どうも腑におちぬ事を仰有るぢやございませぬか。

勝てば官軍負ければ賊子、とかく世の中は勢力が最後の勝利を占めますよ。一切萬事躊躇逡巡せず、ドンドンとやつて下さい。妾は貴方の爲、いな國家の爲に内々

奮闘努力を致しませう」

「ヤ、頼母しい。お前は見かけによらぬ偉女夫だ。この夫にしてこの妻ありだ。

俺も始めてお前の心の底が解り、安心をしたよ」

「二十年も夫婦となつてゐながら、まだ妾の本心が解らなかつたのですか。お側に近く寢食を共にする妻の心が、二十年目に始めて解るやうな事で、よくマア今日まで右守の職掌が勤まつて来たものですなア。本當に之こそ天下の奇蹟ですワ」

「オイ、サクラン姫、馬鹿にするない。政治家は政治家としての方法があるのだ。天下國家を憂慮するあまり、小さい家庭などの事に氣をつけてゐられうか」

「家庭も治まらず、二十年も添うた妻の心が解らぬやうな事で、どうして大政治家が勤まりませう。まして多數國民の心を收攬する事が出来ませうか」

「ヤ、さう追撃するものでない。今の大政治家を見よ、一家を治める事は知らいでも、堂々として政治の樞機に參與してゐるぢやないか。左守だつて、決して家庭は圓滿でない。また左守の心と彼が倅アリナの心とは正反對だ、犬と猿との間柄だ。それさへあるに國家の元老、最大権力者として左守は立派に今日まで地位

を保つて来たではないか」

「自分の地位を保ち得たのみで大政治家とは言へませぬよ。今日の國家の不安状態に陥つたのは、輔弼の重臣たる左守様に本當の技倆が缺けてゐるためではありませぬか。現代の政治家は何れも皆袞龍の袖に隠れて、僅かにその地位を保ち、國民を威壓してゐるのです。虎の威を借る狐の輩です。貴方だつて、ヤツパリさうでしよう。眞裸にして市井の巷へ放り出してみたならば、履物直しにもなれないぢやありませんか」

「馬鹿いふな、俺だつて曲人官ぐらゐにはなれるよ」

「自惚もいい加減になさいませ。あなたは大王殿下のお引立てがなく裸一貫の男として、自分の運命を開拓遊ばす勇者とすれば、精々小學校のへボ教員かポリスぐらゐが關の山でございませう。それだから國民が貴方を稱して死人官だと言つてゐるのですよ」

「エー、モウそんな小言は聞きたくない。主人を馬鹿にしてゐるぢやないか」

「ホホホホ、馬鹿にしたくても、あなたは本當の馬鹿になれない方だから困りま

すワ。世の中よなかの才子さいしだとか智者ちしやだとか言いはれる人ひとは何時いつも失敗しつぱいばかりするものです。それに引替ひきかへ馬鹿ばかとならば、何事なにことにかけても無頓着むとんちやくで、如何いかなる難關なんくわんに出會であつても少しも恐れおそれず又後悔またこうかいする事こともなく、物ものに慌あわてて事に驚おどろき氣きをもんで、無駄むだ骨折ねをりに損そんをせない。そして禍わざはひを化くわして自然しぜんに幸さいはひになす態ていの馬鹿ばかになつて頂いたきたいものです」

「アアア、何なにが何なんだか譯わけが分わからなくなつて來きたワイ。さうすると俺おれもまだ馬鹿ばかの修業しうげふが足たらぬのかなア。オイ、何なんだか胸騒むなさわぎがしてならない。一杯いっぱいつけてくれ、熱爛あつかんでグツとやるから」

「お酒さけをおあがり遊あそばすのも結構けつこうでございますが、大事だいじの前まへの小时せうじ、ここ少時しばらくはお寤たしなみなさるが宜よろしからう。あなたはお酒さけをおあがり遊あそばすと、精神せいしん錯亂さくらんして、どんな秘密ひみつでも人ひとの前まへに喋しゃべり立たてるといふ、つまらぬ癖くせがおりなさるから、この大望たいまうが成就じやうじゆするまでは盤古ばんこ神王しんのうさまの前まへにお酒さけを斷たつて下ください」

「ヤ、こいつア耐たまらぬ。飯めしよりも女房にようぼうよりも國家こくかよりも大切たいせつな酒さけを斷たつて、おまけに暗雲やみくも飛乘とびのりの危あやふい藝當げいたうをこの老人としよりにやらさうとするのは、隨分ずぶんひどいぢや

ないか」

「少時の御辛抱でございます。夜も深更に及びました。サア寝みませう」と手を取つて奥の一間に導き行く。二人はこれより夜を徹して細々と寝物語の幕を續けた。果たして何の祕事が畫策されたであらうか。

（大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 松村眞澄録）

第一三章 蛙の口（一七三七）

五月五日の城下の騷亂勃發に恐怖心を極端に抱きゐる右守の司サクレンスの邸宅は、衛兵警夫數十人を以て厳しく警固され、怪しきものの影だにも近寄るを許さなかつた。かかる物々しき警戒裡の門を潜つて悠然と入り來たる一人の女は、殿中深く仕へたる女中頭のシノブであつた。彼は何の恐るる色もなく殿中に奉仕するといふ權威を肩にふりかざしながら、玄關口に立現はれ、

「右守様、殿中のお使でございます。通つても宜しうございますか」と訪うてゐる。

玄關番のサールは丁寧ていねいに頭かしらをさげながら、

「これはシノブ様、よくマア入らせられました。只今御主人ただいまごしゆじんに傳へて参りますから、暫時しばらくここにお待ちを願ひます」

と言ひ捨てコソコソと奥おくの間に進み入つた。少時しばしあつて右守はニコニコしながら出で來たり笑えみを満面まんめんに浮かべ、いとも慇懃いんぎんな口調くつてうにて、

「ヤアこれはこれはシノブ様でございましたか。サアどうぞ奥へお通り下さいませ。御用の趣承りませう」

このシノブの職掌しやくしやうは右守に比して非常ひじやうに低級ていきふではあるが、大王殿下だいわうでんかのお居間ゐま近く仕へ奉る身みなるを以て、どことなく權威備けんゐそなはり、かつまた左守さもり、右守うもりといへど、殿中の女官ぢよくわんに對しては常に一步いっぽを譲らねばならなくなつてゐた。萬一まんいち女官ぢよくわんの怒いかりに觸れやうものなら、忽ち影響えいきやうは各自かくじの地位ちゐに及ぼすの恐れおそあるをもつてである。奸佞邪智かんねいじやちに長けたる流石さすがの右守も、特にこの女中頭ぢようちうがしらたるシノブに對しては、あら

む限りの媚を呈し追従至らざるなく、地にもおかぬ待遇振りを發揮するのが常である。シノブは悠然として右守に導かれ庭の植込をすかして、彼方に見ゆる、餘り廣からねども、どこともなく瀟洒たる別間に案内され、宣徳の火鉢を中において二人は頭を鳩め密談に耽る。

右守「これはこれは早朝より御入來下さいまして有難うございます。ツイ寢坊をかわきまして屋内の掃除も行届かず、この間の騒動によつて下男下女等も逃走いたし、誠に不都合きはまる處へ御來臨を仰ぎ、實に汗顔の至りでございます。さうして今日お越し遊ばした御用の趣は、如何なる事でございますか。仰せ聞けられ下さいませれば誠に有難うございます」

シノブは儼然として威儀を正し、言葉もやや莊重に右守を見下しながら言ふ、
「今日参りしは餘の儀に非ず、大王殿下の勅使として右守殿に申し渡したき事これあれば、謹んで承り召され」

右守はハツと頭を下げ二足三足、後退りしながら、
「お勅使様には御苦勞千萬、殿下より御淀の趣、謹んで拜承仕りまする」

シノブ「今日妾、勅使として参りしは餘の儀に非ず。「汝も知る如くスダルマン太子の君は行方不明となり、大王殿下におかせられても御病氣の折柄、御煩慮の最中、またもや王女バンナ姫様、昨夜よりお行方を見失ひ、殿中は上を下への御混雑、折り悪しくも左守の司は先日せんじつの罹災りさいに依つて、胸骨きょうこつを打ち病床びやうしやうに呻吟しんぎんいたし、未だ参内さんだいいたさず、已むを得ずえ警官けいくわんを四方しほうに派し、夜よを徹てつして搜索そうさくすれども、今いまに何なにの手掛りてがかもなし。汝右守なんぢうもりも病氣中びやうきちゆうとは聞けど、今日こんにちの場合ばあひ、少々せうせうの病氣びやうきは隠忍いんにんし、勇氣ゆうきを鼓こして参内さんだいせよ」との御錠ごぢやうでござる。右守殿うもりどの、御返答ごへんたふは如何いかがでござる」

右「ハイ、畏れ多くも御勅使おちよくしの趣おもむき、拜承はいしよう仕りました。直様すぐさま、身を淨きよめ、身拵みごしらへをなして参内さんだいいたしますれば、大王殿下だいわうでんかの御前ごぜん、よろしくお取りなしを願ねがひ上げ奉たてまつります」

シ「早速さつそくの承引しょういん、大王殿下だいわうでんかにおかせられても、右守うもりが誠忠せいちゆうを御満足ごまんぞく遊あそばさるるであらう。然しからばこれにてお別れわか申まをす」

と言葉終ことばをはると共にとも、ツと立上たちあがり早はやくも歸路きろにつかむとする。右守うもりは低頭平身ていとうへいしん、

敬意を表しながら、勅使の玄關を出づるまで見送つてゐた。

シノブは一旦表門まで立出で再び引返し來たり、又もや玄關口に立つて、

「右守の神様、御在宅でございませうか。妾は女中頭のシノブと申しまして卑しき

身分のものでございますが、折り入つてお願い申上げたき事のございますれば、

どうか玄關番様、別格の御詮議をもつて、右守様に面會の出來ますやうお取次を

願ひ上げ奉りまする」

今まで玄關の次の間に出張つて頭を傾け思案にくれてゐたサクレンスは、この

聲を聞くより隔ての襖をサツと引きあげ、現はれ來たり、

「やア其女はシノブ殿か。ようまアござつた。どうか奥へ通つて下さい。いろいろ

と相談もし度いからな」

「やア之は之は右守の司様、御壯健なお顔を拜し、大慶至極に存じます。妾のや

うな不束者が朝も早うからお驚かせ致しまして誠に申譯もございませぬ」

「いや、その御挨拶には恐れ入る。さう七難く言はれずに奥の別室においで下さ

い。内々相談があるから」

「ハイ有難う。左様ならば遠慮なく、奥へ通らして頂ませう」

と言ひながら右守の後について別室座敷の一間に座を占た。右守は、さも鷹揚な體にて巻煙草を熏らしながら、

「ハハハハ、シノブ殿、この間の騷動には随分氣を揉んだでせうね」

「はい、氣を揉むの揉まないのつて、口で申すやうな事ではございませぬワ。最前もお勅使の申された通り、殿内は大騷動でございませぬ。さうしてアリナ様までが行方不明となられたのですから、妾の心配と申したら一通りや二通りではございませぬ」

「ハハハハ、貴方の最も氣にかかるのはアリナさまと見えますな」

「ホホホホ、そらさうですとも、二世を契つた夫ですもの。女房の妾、これがどうしてジツとしてゐられませうか。御推量を願ひまする」

「イヤ、これは恐れ入つた。別に結婚の御披露もあつたやうでもなし、何時の間に情約締結をなさつたのですかい」

「どうかお察しを願ひます。年頃の女に對し根ほり葉ほりお聞き遊ばすのはちと

慘酷ぢやありませんか、ホホホホ」

と些と顔を赤らめ袖に顔をかくす。

「あなたはかかる混乱の際にも拘らず、戀愛味を充分に味はひ遊ばす餘裕がおありなさるので、實に偉大な女傑ですよ。この右守も驚愕、否感服仕りました。時にシノブさま、最前御勅使のお傳へによれば、バナナ姫様はお行衛不明の事、太子様といひ、お二人とも肝腎の方が御不在では、城内は重鎮を失ひ、王家前途のため實に憂慮に堪へないぢやありませんか」

「その點は妾も、貴方と同感でございます。しかしながら太子様も王女様も貴族生活を大變に忌み嫌つてゐらつしやつたから、あの騒動を幸ひ、何處かの山奥にでも隠れて、簡易生活を送らるる御所存のやうに伺ひます」

「ヤア！かかる王家の一大事をシノブ殿は、あまり意に介してゐられないやうだが、殿中深く仕ふる臣下の身として、あまりに不都合ぢやありませんか」

「不都合でも仕方がないぢやありませんか。何を言つても肝腎の方が居られないのですもの、澤山の警官やスパイは四方八方に駆け廻り、鶉の目、鷹の目で搜索

しても見當らないもの、もうこの上は人力の如何ともすべき處ではございません。何事も神様のなさるままですわ」

「イヤ、呆れましたね。しかしながら拙者はお前さまの心の底を看破してゐるのだが、何事も包み隠さず、ここで打割つて明してもらへますまいか。類は友を呼ぶとかいつて、この右守とても腹を叩けばお前さまも同じ事、あまり心の白うない男ですよ、アツハハハハ」

「右守様、あなたのお心の底も、妾にはよく解つてをります。あなたは弟御のエルさまをこの際王位に上せバンナ様に娶し、あなたは外戚となつて國務を總攬し、大望を遂げむとして、種々劃策を廻らしてゐらつしやるでせう」

と星をさされて、右守は稍たぢろぎながら流石の曲者、わざとケロリとした顔を突き出し、

「ハハハハ、シノブさま、お前さまの天眼通は落第ですよ。どうしてそんな野心を持ちませう。よく考へて下さい、拙者が平素の行動を」

「ホホホホ、右守様の白々しいお言葉、妾は平素の貴方の御行動によつて斯くの

ごとく推定したのでございますよ。何ほど秘密を明かし遊ばしても、妾は決して

口外はいたしませぬから御安心下さいませ」

「エー、拙者の事は、おつて申し上げませう。種々と痛くない腹を探られては、

この右守もやりきれませぬからな、ハハハハ。それよりもシノブさま、お前さま

の心の秘密を、スツパ拔來ませうかな」

シノブは思はずビクツとしたが、こいつも曲者、ワザと平氣を粧ひ、片頬に笑

を湛へながら、

「サア何なつと仰しやつて下さいませ。妾の心はあくまで清淨潔白、只一點の野

心もなければ欲望もありませぬ」

「どこまでも押の強い貴女のやり口には、さすがの右守も舌をまきました。お前

さまは左守の倅アリナ殿を王位につかせ、自分は王妃となつて榮耀榮華にタラハ

ン國の名花と謳はれ暮すつもりでございませうがな」

「右守様、何事かと思へば身に覺えもない、否、心にも期せない妙な事をおつし

やいますな。妾は、左様な陰謀を企むやうな悪人ではございませぬよ」

「アツハハハハ、それだけの度胸があれば、一國の王妃として恥づかしからぬ人格者だ。また左守の倅アリナ殿も近來稀なる才子だ。寛仁大度にして慈悲を辨へ人情に通じ、その上容色端麗にして美男子の譽高く、一國の主權者として、吾等が頭に戴いても恥づかしからぬ人材、いい處へシノブさまは氣が付きましたね。ヤア右守もズツと感心いたしました。御存じの通り、ほとんど暗黒に等しい今日の國状、アリナさまの膽勇と、シノブさまの度胸をもつて國政の總攬をなさつたら、キツと國家は安全無事に治まるでせう。實は右守においても大贊成でございます。その代り、アリナさまと貴女の目的が達成した上は、この右守を拔擢して、國務總監左守の役に使つて下さるでせうな」

と、うまく釣り込んで蛙の腸を暴露させむと試みた。賢いやうでも流石は女、さも嬉しげに答へて言ふ、

「さすがは賢明なる右守殿、その天眼力には敬服いたしました。御推量の通りでございます。さうしてアリナ様は太子様とお約束が濟んでをります。それゆゑアリナ様が太子になられるのは別に何の不思議もございません」

「なるほど、承れば承るほど、萬事萬端、注意が行届き、水も洩らさぬ御經綸、いよいよ右守、末頼もしく欣喜に堪へませぬ。ついては、ここに一つの妨害物がございませぬが、これを何とかして排除せねばなりませんまい」

「妨害物と仰有るのは何物でございませぬか」

右「外でもござらぬ、太子の君をこの儘放任して置いては後日の迷惑、たとへ太子殿下において、再び王位に就かむとする念慮は起こらないにしても、金枝玉葉のお方なれば、また良からぬ不逞團が太子を擁立し、王統連綿の眞理の旗を翻へし押寄せ來たらば、折角の貴女の幸福も夢となるぢやありませんか。貴女が太子のお行衛を御存じの筈、まづこの方面から處置を致さねば成りますまい」

「如何にもお説の通り、將來の邪魔者は、太子様でございませぬ。幸ひ妾はお所在を存じてをりますれば、何ならお知らせ申しても宜しうございませぬ」

「大王様も御存じでいらつしやるのかな」

シ「イエイエ、どうしてどうして御存じがございませうぞ。妾はアリナ様から詳しう承つてをります」

「成るほど、ア、そりやおでかしなさつた。それでは太子を捕虜となし、再びこの世に上がれないやうに取計ひ、一時も早くアリナさまを迎へて王位に即かせ、新に華燭の典を擧げさせ、國政の重任を背負つて立つて頂かねばなりませんから、どうぞお二方の所在を明細にお知らせ下さいませ」

「これ右守様、高うは言はれませぬ。天に口、壁に耳、どうかお耳をお貸し下さいませ」

と言ひながら右守の耳許にて何事かクシヤクシヤと囁いた。右守は吾が計略圖に當れりと心中雀躍りしながらワザと眞面目を粧ひ、

「イヤ承知いたしました。シノブ殿、御安心下さいませ。大王の手前、よしなにお取り計らひを願ひます。そして拙者は御存じの通り目も悪く足も悪く、且つこのごろ流行の感冒に犯されてをりますれば、到底ここ二三日は參内は叶はないだらうと、そこは、それ、よろしく言つておいて下さい。何よりも太子を處分し、アリナさまをお迎へ申すのが焦眉の一大急務ですからな」

シノブは心の中にて、

「しすましたり、右守の司も比較的組しやすき人物だ。欲に迷うて吾が辨舌に翻弄され、本音を吐き、かつ妾がためによくも欺かれよつたな」
と微笑みつつ自分が騙されてゐるのを、うまく騙してやつたと得意になつてゐる。實にうすつぺらの知恵の持主である。盤古神王、もしこの場に御降臨あらば彼が心を憐れみ、且つ笑はせ玉ふであらう。

シノブは欣然として右守に別れを告げ、足もイソイソ殿内さして歸り行く。後見送つて右守は吹き出し、

「アツハハハハハ、到頭、シノブの古狸を征服してやつた。何ほど利口に見えても、華族女学校の校長を勤め天下第一の才女と言はれてゐる女でさへも、葦野の如き怪行者に頭使され、情けの種まで宿し馬鹿を天下に曝す世の中だから、何ほど偉いといつても、女はヤツパリ女だ、アツハハハハ。たうとうこの右守が知恵の光に晦まされ、最愛の夫の難儀になる事も知らず、本音を吹いて歸りよつたわい、イツヒヒヒ」

かく一人笑壺に入つてゐる。そこへ襖をソツと押あけ入り來たりしはサクラン

姫ひめであつた。

「旦那様だんなさま、天晴あつぱれ天晴あつぱれ、それでこそ妾わらはの夫をつと、右守うもりの司かみさま様さまですわ。否いな近ちかき將しやうらい來らいにおける國こく務む總そう監かん様さま。本ほん當たうに、知ち識しきの寶はう庫ことは旦那様だんなさまの事ことですわ。妾わらは、只ただ今いまの掛かけ合あひを襖ふすまを隔へだてて一いち伍ぶ一し什じ承けたり、旦那様だんなさまの、非ひ凡ぼんな端たん倪げいすべからざるお知ち惠ゑには、ゾツコン惚ほれてしまつたのですよ、ホホホホ」

右守うもりは威あ猛た高たかになり、

「エツへへへへ、俺おれの腕うで前まへは、まア、ザツとこの通とほりだ。俺おれの今こん後ごの活くわつ動どうを刮くわつ目もくして待まつてゐるがよからう、イツヒヒヒヒ」
と腕うでを組くんだまま、上じやう下げに身しん體たいを搖ゆすり、床ゆか板いたまでもメキメキと泣なかしてゐる。

(大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 北村隆光録)

第四篇

月光徹雲げつくわうてつうん

第一四章 會者淨離（一七三八）

青春の血に燃ゆる若き男女に取つては、戀愛なるものは實に生命の源泉である。戀愛熱の高潮した時は、倫理道德の羈絆を脱し理智を捨て、富貴何物ぞ、名譽何物ぞ、なほも進んでは親兄弟を忘れ、朋友知己を忘るるに至る。しかしながら戀愛そのものより見る時は、理智や道德の範圍内に入ることとは出来ぬ。どこまでも擴大性を帯び、かつ流通性を備へてゐる。もし理智を加味した戀愛ならば、戀愛そのものの生命は既にすでに滅亡してゐるのである。實にやたらハン國のスタルマン太子は、尊貴の家に生れ九五の位に上るべき身でありながら、今年十五の春を迎へた山奥育ちの乙女に満身の心血を注ぎ、十二分に戀を味ははむとして國家の危急を忘れ、父が瀕死の状態に陥りつつあることも見捨てて、大原山の谷間に古くより立てる破れ寺に落ち延び、ひそかに戀を味はつてゐる。左守の倅アリナは太子の品行を亂したる大罪人として、逮捕命令を出されたる蔭裡の身、さすがに繁華な都大路にも住み兼ね比丘の姿に身を糞し、晝は山林に伏し、夜はトボト

ボと野路を傳うて、廣い世界に吾が身一つの置き所もなく彷徨ひ廻りしが、辛うじて大原山の谷間の古ぼけた破れ寺に一夜の宿を過さむと立ち寄り見れば、本堂の須彌壇の後ろに若き男女の囁き聲、傷もつ足のアリナは暫し佇み息を凝らして内の様子を考へてみた。

因にいふ、彼アリナは殿中を逃げ出す時、最愛のシノブに囁いていふ、

「餘はこれより少時の間大宮山の盤古神王の社の中に潜伏し、世の中のやや治まるをまつて歸り來たるべければ、汝はどこまでもこの殿中を離れな」

と告げておいた。シノブはそれ故アリナは依然として、大宮山の社殿の中に居るものとのみ信じてゐたのである。彼が右守の耳に囁いたのも矢張これである。

スバール「太子様、貴方どこまでも妾を見捨てず愛して下さいなア」

太子「ハハハハ。そんな心配はしてくれな。お前との戀愛を遂げむがために、太子の位まで捨ててこんな所へ匿れてゐるのぢやないか。お父様は御大病、何時御昇天遊ばすかも知れない、この場合にも戀にはかへられず、世の中の粹を知らぬ

人間は定めて餘を「不孝ものだ、馬鹿者だ、腰抜け男だ」と笑つてゐるだらう。

何ほど笑はれてもお前の愛には換へられないのだ」

「殿下がそのお心なら妾はどこまでも貴方に貞操を捧げます。たとへ野の末深山の奥、猛獸毒蛇の棲處でも殿下と共に苦勞をするのなら些しも厭ひませぬ。山奥の生活に慣れた妾でございますれば、木の實を漁り芋を掘つてでもきつと殿下を養ひます。どうぞ御安心して下さいませ」

太子はスバールの優しき言葉に絆されて思はず知らず落涙した。

「いや殿下は泣いていらつしやいますの。妾が言つた言葉がお氣に障りましたか。もし障りましたら、どうか御容赦下さいませ」

「いやいや、氣に障るところか、お前の心が嬉しうて思はず知らず感謝の涙が迸つたのだよ」

「工工勿體ないことを仰せられますな。殿下のためならば命を捧げても満足でございます。それにつけても淺倉山の谷間に残しておいた父上はどうしていらつしやるでせうか。定めて都の大變を聞き、吾が子はどうしてゐるか、御心配を遊

ばしてござるでせう。どうか一度父に廻り會うて、二人が無事なところを見せた
いものでございますわ」

「お前がさう思ふのも無理もない。餘だつてその通りだ。殊に病氣の父を、あの
混亂状態の危ふい中に残して、お前と此處に忍んでゐる心はどれだけ苦しいか。

スバル、私の心も推量してくれ」

「親も大切なり、また戀愛もなほ大切なり、この世の中は思ふやうには行かない
ものでございますなア」

「山はさけ海はあせなむ世ありとも

汝が身を戀ふる心は散らじ」

「有難し太子の君のみことのり

わが胸板を射抜くやうなる」

父君ちぢぎみの身みは思おもはぬにあらねども
戀こひの羈絆きづなに引ひかれてぞ住すむ

戀衣こひころもよしや破やぶる世よありとも
君きみが赤心まごころ如何いかで忘わすれむ

よしやよし吾わが身みは野邊のべに朽くつるとも
照てらして行ゆかむ戀こひの暗路やみぢは

吾わが君きみの情なさけの露つゆに霑しづひて
開ひらき初そめけり梅うめの初花はつはな

野のに咲さける白梅しらうめの花はな手折たをりつつ
今日けふ山奥やまおくに生いけて見みるかな

手折たをられて生いけたる花はなはいつの世よか
萎しほれむためしあるぞ悲かなしき

山奥やまおくの匂におへる梅うめを根ねこぎして
都みやこ大路おほぢに植うえつけて見みむ

土埃つちぼこり立つ都路みやこぢは梅うめの花はなも
匂におひのあするためしあるべし

いつまでもこの山奥やまおくに植うゑられて
實みを結むすぶなる春はるに遇あひたしし」

戀こひといふものの辛つらきを今いまぞ知しる
嬉うれし悲かなしの中なかを隔へたててし」

嘆なげきつつ又また樂たのしみつ喜よろこびつ
戀こひの淵ふち瀬せに浮うきつ沈しづみつし」

戀こひといふものに涙なみだのなかりせば
枯かれ木の如ごとく淋さびしかるらむし」

ㄣ 遇あひ見みてののち後のこころ心こころは猶なほ更さらに
昔むかしにむかしまむかしさむかしるむかし戀こひ衣ころもかむかしなむかし ㄣ

ㄣ 世よのなか中なかのひと人ひとはなん何なんといもい言いはいばい言いへ
不ふ思し議ぎきぎはぎまぎるぎ戀こひのみち路みち芝しば ㄣ

ㄣ 戀こひのやみ暗やみわやみけやみ行ゆくゆ二ふ人ふたりのみ身みのはて果はては
天あま津つ御み國くにのすま住すまみすまなすまるすまらすまむすま ㄣ

ㄣ 目まのあた當あたりあま天あま津つ御み國くににあそ遊あそぶあそなあそる
戀こひのひろ廣ひろ道みち進すすむすす吾われなわれりわれ ㄣ

アリナは外より、

「吾が慕ふ太子の君はこの寺に

たしか「ありな」と尋ね來しかな

都路の百の騒ぎを餘所にして

深山の奥に居ます君かな

スバールの姫と諸共ましますか

優しき聲の吾が耳に入る」

太子「夢現あこがれゐたりし汝の聲

耳に入るこそ嬉しかりけり

村肝の心嬉しく吾が胸の

高鳴り如何に止むるよしなし」

太子はスパールと共に須彌壇の裏より表に出で、すつくと立てる比丘姿のアリナを見るより、吾を忘れて駆けより、堅くその手を握り涙を腮邊に垂らしながら、
「ヤア、アリナ、よく尋ねて来てくれた。遇ひたかつた、見たかつたぞや」
アリナ「ヤ殿下、よくまあ無事でゐて下さいました。今の殿下の安全なる御様子を見て、私は最早この世に思ひの残る事はございませぬ。御覽のごとく私は修験者となり、世の中的一切と断ち、山に伏し野に寝ね、一生を念佛三昧に送る考へでございませぬ。一笠一蓑一杖の雲水の身の上、何處の竝木の肥にならうやら、再び殿下の御壯健のお顔を見る事が出来ませぬや、味氣なき浮世でございませぬれば、何事も因縁づくだと諦め、どうか私にお暇を下さいませ。そして殿下はスパール姫様と末永く戀を味はつて頂きたくございませぬ」
太子はほつと一息吐きながら、青ざめたる顔にて力なげにアリナの手を揺すりながら、

「オイ、アリナ、も一度思ひ直して都に歸つてくれる事は出来ないか。餘は最早王位を捨てて妻と共に乞食生活を送る決心ではあるが、そなたは時勢を解した前

途有望の青年、今から修験者となつて朽ち果つるは國家のため惜しい事だ。どうか父を助けて再びタラハン城の柱石となり、餘が意志を繼いでくれまいか」

アリナは聲を湿ませながら、涙を兩眼にしたたらしめて、

「殿下の思召しは實に有難う存じます。しかしながら最早今日の私は刑状持ちでございませう。たとへ大赦を蒙つて再び都の地へ無事に歸りませうとも、民心を失つた父左守の倅でございませうれば、どうして國民が私の赤心を認めてくれませう。もはや私は政治欲に放れました。そして情欲も斷ちました。雲水を友として天下の民情を視察し一生を送る考へでございませうから、どうか此事ばかりは仰せられないやうにお願いいたします」

太子は太き吐息をつきながら、

「アア是非もない。タラハンの國家は最早滅亡したのかなア」

スバールはアリナの前に進み出で、悲嘆の涙にくれながら、

「アリナ様、貴方はまア何と見すばらしいお姿におなり遊ばしたのでですか、おいとしようございます」

アリナ「いや、これはこれは姫様、必ず必ず御心配下さいませ。私の心から斯やうに零落れたのでございます。今の境遇は私の身にとつて結局幸福でございます。一筆の食一瓢の飲、山水を友として天下を遍歴するの亦一興でございます。どうぞ私の身については御懸念下さいませな」

ス「待ち侘びし親しき友と廻り會ひ

またも嘆きの種をまくかな

如何にせむ逸り男の敏心を

止めむ力の缺けし吾が身は

ア「何事も神の守らす世の中に

人の思ひの通るべしやは

行く雲の空を眺めて折をりに

吾が身の末を偲び來にけり

太 右左たがひに袂を別つとも
魂はたがひに添ひてありけむ

ア 有難し忝なしと拜むより
外に術なき今日の吾かな
吾が君の貴の御心いつもながら
身に染み渡り涙こぼるる

太 世の中に汝とスバル姫おきて

外ほかに力ちからと頼たのむものなし
片腕かたうでをもがれしごとき心地こころして
今いま別わかれ行く胸むねの苦くるしさ
『』

ス 『如何いかにしてアリナきみの君きみの御心みこころを
翻ひるがへさむか果敢はかなきの世よや
『』

ア 『姫君ひめぎみよ心こころやすけく思召おぼしめせ

汝なれには神かみの守まもりありせば
吾わが君きみも汝なれも吾わが身みも神かみの御子みこ
神かみの捨すてさせたまふべしやは
いざさらば太子よつぎの御子みこと姫君ひめぎみに

惜しき袂を別ち行かなむ

いつまでも安く健在おはしませ

神の恵みの露に濡れつつ

かく別れの歌を残してアリナは又もや法螺貝を吹き、山野の邪氣を清めながら、どこを當ともなく山奥さして進み入る。後見送つて太子、スバルは大地に轉び伏し、

「オーイオーイ、アリナよアリナよ、も一度顔を見せてたべ」と呼べど叫べど法螺の音の響きに遮られて、二人の聲は彼の耳に入らぬものの如く、後をも振り返らず、足早に密樹の蔭に姿を没した。アリナは道々歌ふ、

「雲霧四方に塞がりて
獸の世とはなりにけり

黑白も分ぬ常暗の
朝日は空に昇れども

下界を照らすよしもなく
 月は地中に潜めども
 世をあかすべき術もなし
 雲井の空は日に月に
 怪しき星の出没し
 妖邪の空気を地の上に
 散布しながら火の雨や
 剣の雨を吹きおろす
 風の響きも何となく
 滅びの聲と聞こゆなり
 虎狼や獅子熊の
 吠え猛る野を進み往く
 吾が身は神に守られて
 いや永久の臥床をば
 求めて進む修験者
 神が此世にましますば
 曇り果てたる世の中を
 一度は照らさせたまふべし
 いかに權威があればとて
 神ならぬ身の人草の
 いかでか此世が治まらむ
 そも人間は神の子と
 誇りまつれど實際は
 夏の草葉に宿りたる
 旭の前の露の身ぞ
 永遠無窮の神業に
 如何でか仕へまつるべき
 ああ惟神々々

靈幸倍ましませよ

吾が行く後のタラハンの

神の造りし御國を

いとも平らに安らかに

守らせたまひて大王の

萬機の政を助けませ

心汚き吾が父の

深き罪をば赦しませ

右守の司の逆心を

戒めたまひて御代のため

天が下なる人草を

勞り助けタラハンの

國の司と歌はれて

名を萬世に残すべく

鞭うちたまへ大御神

ひとへに祈り奉る

まづ第一にタラハンの

君の太子とましまする

若君様のお身の上

守らせたまひて永久に

國の柱と立ちたまひ

吾が國民の幸福を

來たさせたまふ名君と

ならしめたまへ大御神

深く包みし戀雲を

科戸の風に吹き拂ひ

天と地とは清らけく

明け渡りたる御心に

かへし玉へよ惟神
ひとへに願ひ奉る

ひとへに祈り奉る

(大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 加藤明子録)

第一五章 破粹者(一七三九)

那美山の南麓、秋野ヶ原の片隅に古ぼけた茅葺きの水車小屋が建つてゐる。附
りに人家もなく、見わたす限り、東南西の三方は原野の萱草が天に連なつてゐる。
この水車小屋は水車の杵も損じ杵も折れ、所どころに雨もりがして、今は全然活
動を中止してゐる。カーク、サーマンの二人は何事かこの茅屋に秘密の藏するも
のの如く、お勤め大事と蛙面をさらして仁王の如く仕へながら、雑談に耽つてゐ
る。

カーク「オイ、サーマン、この間は随分骨が折れたぢやないか。あの古寺へ十人づつの手下を引きつれ、つかまえに行つた時や、俺も「到底こいつア駄目かなア……」と一時は匙を投げたが、断じて行へば鬼神もこれを避くとかいつて、たうとう物にした。あの時に俺の勇氣が途中で挫けやうものなら、サツパリ目的物は取逃し、百圓づつの懸賞金は駄目になるところだつた。汝たちも俺のお蔭で、百圓の大金にありついたのでから、チツとは俺の恩恵も知つてゐるだらうな」

サーマン「ヘン、偉さうにいふない。汝は太子の一瞥に會うて、ビリビリと震ひ出し、地上へ平太張つて、息をつめ、物さへ碌によ言はなかつたぢやないか。その時、俺が「オイ、カーク、しつかりせぬかい」と靴で汝の尻を蹴つてやつたので、漸く輿を上げよつたぢやないか。行きなり、女つちよに鞆丸をつかまれて悲鳴をあげて青くなり、齒をくひしぱり白目ばかりにしやがつて、フンのびた時のザマつたらなかつたよ、あまり偉さうにいふものぢやないワ」

「それだつて、太子のカーク場所はこの古寺だと、カーク信をもつて報告したのは俺ぢやないか。それだから何と言つても俺は功名手柄の一番槍、譽れは天下

にカークカークたるものだ」

「何ほど発見者だと言つても、ヤツパリ俺の勇氣がなかつたら、汝はあの山奥で冷たくなり、狼どもの餌食になつてゐる代物だ。命の親のサーマンさまだぞ。オイ百兩の内五十兩ぐらゐ俺にボーナスを出しても、あまり損はいくまいぞ。五十兩で命が助かつたと思へば安いものだ。俺の名を聞いても一切衆生が成佛するんだからなア」

「へん、欲なことをいふない。こつちの方へ五十兩よこせ。右守の大將、誰も彼も平等に、皆百圓づつ渡しやがつたものだから、論功行賞の點において、非常に不公平があるのだ。俺やモウこんな淋しい所で、一ヶ月わづか十圓やそこの月給を貰つてをるこた厭になつた。俺やモウ明日から辭職するから、汝一人で番するがよからう。汝は自ら稱して救ひの神だと言つてゐやがるから、虎が來たつて、狼が來たつて大丈夫だらう、ウツフフ。【とつけ】もない救世主が現はれたものだ、イツヒヒヒ」

「コリヤ、カーク、あまり馬鹿にするない。お經の文句にも、「曩莫三滿多」と

いふ事があるぢやないか。「三満多」さへ唱へたら、三災七厄も立所に消滅し、豺狼毒蛇盗人の難も、火難水難劍の難も、一遍に逃れるという結構なお経だよ。

その名をつけてるサー満だから、俺は即ち天下の救世主サーマンといふのだ、エツへへへへ」

「しかし地下室の太子はどうしてゐるだらう。舌でも噛んで死によつたら大變だ
がなア。「どこまでも殺さないやうにせ、飲食物を與へず、干殺せ」と、右守司
の御内命だから、自殺でもやられちや、忽ち俺等の首問題だぞ」

「そんな心配はすな。何というても隣室に古今無雙の美人が這入つてゐるのだも
の、あの細い窓の穴から互ひに顔を覗き合つて、甘い囁きをつづけ、楽しく面白
く平然として日夜を送られるかも知れぬ。吾々下司下郎の心理状態とは又、格別
違つたものだからのう」

「何ほど太子だつて美人の面ばかり見てをつても腹は膨れないよ。諺にも「腹が
へつては戦争が出来ぬ」といふぢやないか。饑渴に迫つて戀だの鮎だのと、そん
な陽氣な事思つてゐられるか。汝もよほど理解のない奴だなア」

「ナア二、」とかく浮世は色と酒」と、俗謡にもある通り、飯よりも酒が大事だ、酒よりも大切な色だ。その色女とたとへ隔てはあるにしても、毎日顔見合はして、甘つたるい事いつて楽しんでゐる太子の胸中は、暖風春の野を渡るがごとき心持ちであられるだらうよ。戀は生命の源泉だといふぢやないか。俺だつてあんな美人に戀されるのなら、百日や千日、一杯の水を吞まいでも、一碗の食をとらいつでも得心だ。何と言つても天下の名譽だからなア」

「アツハハハハ、法外れの馬鹿野郎だなア。飲食物を断てば人間は死ぬぢやないか、」死んで花實が咲くものか」といふ俗謡があるだらう。世の中は命が資本だ。人間は飲食物を取り命を完全に保つてこそ、戀といふものの味はひが分るのだ。笥笥のやうに骨と皮と筋とになつて瘦衰へ胃病薬の看板のやうに壁下地が現はれ、手足は筋骨立つて竹細工に濡れ紙をはつたやうなスタイルになつては、戀も宮もあつたものかい」

「戀でも宮でもないよ。海魚の王たる鯛子様だ。それだから太子靈従の行動を遊ばすのだ。政治なんか如何でもよい、親なんか如何でもよい、自分の戀の欲望さ

へ遂げれば人生はそれで可いのだ……などと言つて、あらう事か、あるまい事か、山海に等しき養育の恩を受けた父親の難病を見捨てて、好いた女と手に手を取つて隨徳寺をきめこむといふ粹なお方だからなア」

「それだから親の罰が當つて、こんな所へ投げ込まれたのだ。つまり吾が身から出た錆だから、氣の毒でも仕方がないぢやないか。「天のなせる災は或は避くるを得べし。自らなせる災はさくべからず」といふ教がある。丁度それにテツキリ符合してゐるぢやないか。虎か山犬のやうに檻の中へ放り込まれて、飲食物を與へられず、悶え苦しんでゐるとは、實に氣の毒千萬だ。しかしながら之も自業自得だから仕様がなないワ」

「さう悪口を言ふものぢやない。汝だつて俺だつて百圓の大金にありつき、女房に立派な着物の一枚も買つてやれたのは、體主靈從様が、アアいふ事をして下さつたお蔭ぢやないか。あまり粗末にすると冥加が悪いぞ。オイ汝、何とかして焼芋のヘタでも買つて来て、ソツと放りこんだらどうだ。そのくらゐな人情はあつても、あまり罰ア當るまいぞ」

「馬鹿いふな、そんな事をしやうものなら、俺たちの身の破滅だ。何と言つても自己愛世間愛の尊重される世の中に、そんな宋襄の仁は止めたが可からう。吾が身の保護上險呑至極だぞ」

「それでも汝、萬々一太子が再び世に出られ、王者に成られた時は如何するつもりだ。俺を苦しめよつたといつて、首をうたれても仕方あるまい。さうだから今の内にチツとぐらゐ同情の涙を拂つて、焼芋のへたぐらゐは恵んでおく方が、自己愛の精神上最も賢明な行き方ぢやないか」

「ヘン、モウかうなつた以上は籠の鳥だ。天が地になり、地が天となり、太陽が西から上る事があつても、世に出るやうな事があるものか。ともかく長い者にはまかれ、強い者の前には尾をふつて従ふのが、自己保存上唯一の良法だ。俺は斷じて何物も與へないつもりだよ」

「汝、さういふけれど、太子の死なない内に右守の司の陰謀が露顯し、太子の在處が分つて、立派な役人どもがお迎へに來たとすれば、その時や大切にしておきやよかつたに」と、地團駄踏んで悔むでも、もはや及ばぬ後の祭りだ。六日の

菖蒲十日の菊だ。それだから汝の利益上、俺がソツと忠告するのだ」

「俺は斷じてそんな女々しい卑屈な事はせないよ。時の天下に従へといふぢやないか。權威赫々として、月日の如く輝き亘る右守の君にさへ、お氣に入れば可いのだ。オイ汝、地下室へ行つて、一寸査べて來い。俺や此處で外面の看視に當るから……」

太子は地下室の牢獄に投げ込まれて今日で三日、一飲一食もせず、細い狭い窓を覗いて、スバル姫の顔をかすかに眺め、それをせめてもの慰めとなし、死期の至るを從容として待つてゐた。そこへ看視役のサーマンがやつて來て、
「モシモシ太子様、貴き御身をもつて、かやうな處に斷食の御修業を遊ばすとは實に恐れ入りました。私もタラハン國の國民の一人でございますれば、何とかして殿下に對し御恩報じが致したい考へでございますが、何分相棒の力クといふ奴、無情冷酷なる鬼畜の如き動物でございますから、私の申す事を聞き入れず、何かお腹にたまる物を差上げたいと焦慮してをりますが、もしそんな事をいたしましたしまして、右守司の耳へ入れば忽ち私の首は一閃先へ轉り、ヤツと叫ぶ間

もなく死出の旅立ち、つまらない事になつてしまひますなり、殿下の御境遇は察し参らしてをりますが、今日の場合いかんともする事が出来ませぬから、どうぞ因縁づくぢやと諦めて、姫様の顔を見て心をお慰めなさいませ。暗があれば明りもある世の中、殿下だつて何時までもかやうな不運が續くものぢやございますまい。屹度元の貴い御位にお上り遊ばす事が無いとも限りませぬ、その時にはどうぞ私をお引立て下さいませ。お馬の別當でも、お馬車の馭者にでも結構でございますから……」

太子「八八八随分辭令の巧みな野郎だなア。それほど親切があるなれば、なぜ餘を捕縛したのだ。汝が二十人の悪人輩を指揮して、餘を斯様な所へ投込むやうにいたしましただないか。そんな偽善的同情の詞は聞くも汚らはしい、そちらへ行け」

「それは殿下の誤解と申すものでございます。私は決して殿下をお苦しめ申さうなどの悪心はございませぬ。元より殿下に對し、何の怨みもない私でございますから」

「アツハハハ八八八怨みはなからうが恩恵は味はつただらう。餘を捕縛したために百

圓ゑんの懸賞金けんしょうきんを貰もらったぢやないか

「ハイ、ソリヤ受取りうけとしましたけれど、女房にようぼうの着物きものを買かつたりなど致いたしまして、私の身みには一文いちもんもつけた覚えおぼはございませぬ。甘い酒うまの一杯さけも呑のんだ事こともなく、つまり全部ぜんぶ嬢かかあの奴やつにふんだくられてしまひました。どうか恨うらみがあるなら内うちの嬢かかあを恨うらんで下ください。一文いちもんも儲まうけてゐない私わたくしに對たいし、そんなこと仰有おつしやるのはあまり御無ごむ理りぢやございませぬか

「ハハハハ、妙な團子だんご理窟りくつを捏こねる奴やつだな。汝きさまは常識じやうしきをどこへやつたのだ

「ハイ、情色じやうしきは女房にようぼうが内うちに大切たいせつに保護ほごいたしてをります。何なにほど夫婦ふうふの間柄あひだでも、かう所ところを隔へだつて住すまつてをりますれば、情色じやうしきの樂たのしみも到底たうてい味あぢはうことは出來でませぬ

「テモさても情なさけない野郎やろうだなア。サ早はやく此場このばを立たち去され

「殿下でんか、さうポンポンいふものぢやありませぬよ。生殺與奪せいさつよだつの權けんは、いはば間接かんせつに吾々われわれが握にぎつてるやうなものですから、チツとは監視役かんしやくの私わたくしに對たいしては、もうチツとばかり丁寧ていねいに仰有おつしやつても、あまり御損ごそんにもなりません。あまりポンつき遊あそ

ばすと、あなたのお爲になりませぬぞや」

と堅固なる檻に、猛悪なる虎を押し込めて、外から苛責んであるやうな心持ちにな

つて、下司下郎が威張つてゐる。隣の室よりスバル姫は窓をさし覗きながら、

「あの太子様、左様な獣に相手におなりなさいますな。妾は残念でございます」

太「成るほど、そなたのいふ通りだ。今後は何も言ふまい。オイ野郎ども、邪魔

になる、早く上へ上つて、水車小屋の立番でもいたせ」

と大喝され、さすがのサーマンも首をすくめながら、鼠のやうに此場を逃去つた。

カークはこの間に頼杖を突きながら、コクリコクリと居睡つてゐた。

サ「コリヤコリヤ、カーク、職務を大切にせぬか、白晝に居睡るといふことがあ

るか」

カ「ヤア、サーマンか、俺やチツとも居睡つてはゐないよ。俯むいて沈思黙考、

哲學の研究をやつてゐたのだ」

「ヘーン、うまい事いふない。鼾をかいてゐたぢやないか」

「きまつた事だ。哲學上鼾の原理は如何なるものなりやと、實地の研究をやつて

ゐたのだ。無學文盲な汝に哲學の研究が解るか。それだから常識がないといふのだ」

「エー、太子にも、情色がないと誹られ、また汝にも情色がないと誹られ、本當に男の面はまるつぶれだ。しかしながら餘りいうて貰ふまいかい。女房がある以上情色はあるぢやないか。汝こそ鰥暮らしだから、情色なんか味はつたこたあるまい」

「ハハハハ、色情と常識と間違へてゐやがるな。オイ、コラ、このカークはな、天下第一の男地獄、色魔の先生と謳はれてきたものだよ。汝等のやうな唐變木の敢て窺知し得る範圍ぢやない。鼠とる猫は爪隠すといつてな。女のないやうな面してる奴に、かへつて女が澤山あるものだ。汝はこの間の消息を知らないから、戀や情を語るに足らない人物だ」

「ヘン、仰有いますワイ、汝のやうな、鳶の巢と間違へられるやうな頭の毛をモシヤモシヤと生え茂らせ、和布の行列然たる着物を着やがつて、色魔だの、男地獄だのと、そんなこと吐す柄ぢやあるまい。ヤツパリ睡呆けてゐやがるな。オイ、

その小溝で手水でも使おうて来い」

「そこが汝らたちの解らないところだ。……戀の上手は裏れてかかる……と言つ

てな、俺のやうな者が却つて女に惚れられるのだ。汝のやうに女子の眞似をして、

頭にチツクをつけたり、石灰の粉を塗つたり、嬢の月経を頬邊に塗つて、色男然

と構へてる奴にや女の方から愛想をつかし、唾でも吐つかけて逃げてしまふもんだ。

尻の大砲や肱の鐵砲を打ちかけられ、鳩が豆鐵砲を喰つたやうな面で指を喰はへ

て、女の後姿を怨めしげに眺めてゐる代物は、汝のやうな柔弱男子の身の果だ。

へん馬鹿々々しい」

「ほつといてくれ、女房のある立派な人間と嬢なしとは到底間が合はんからのう。

汝は最前俺を無學文盲だと言ひよつたが、汝ぐらゐ無學文盲な奴はあるまいよ。

無學の奴を稱して、ヨメない力かないと言ふぢやないか、ザマア見やがれ。これ

には一句もあるまい、イツヒヒヒヒ」

「コリヤ、そんなこたどうでもよい。地下室の様子はどうだつたい。隊長に報告

せぬかい」

「なんにも報告すべき原料がないぢやないか」

「ハハア、汝は太子に叱りつけられ、謝罪つて歸つて來やがったな。どうも汝の素振りが怪しいと思つてゐたよ」

「然り然り、然り而うして俺の方から叱りつけて來たのだ。さすがの太子もオンオンと聲をあげて泣いてゐたよ。何といつても偉い者だらう。畏れ多くもタラハンの城の太子を一言の下に叱咤するといふ蘇如將軍のやうな英雄だからなア」

「ヘン、そんなことが何自慢になるか。堅固な檻の中へ這入つてゐる以上は太子だつて、虎だつて、狼だつて、どうする事も出來ぬぢやないか。誰だつて叱るぐらゐは屁のお茶だ」

「ナニ、理窟からいへばそんなものだが、實地に臨んでみよ。どこともなく威嚴が備はつてゐて、その前へ行くと體はビリビリ慄ひ、目はまくまくし、舌は上臑の方へひつついて固くなり、胸はドキドキ、足はフナフナ、なかなか叱る勇氣は容易に出て來ないよ。俺なら【こされ】、一口でも叱りつける事が出來たのだ」

「アツハハハハ、手厳しく反對に、叱りつけられよつたのだらう」

かく話すをりしも、吹來る西風に送られて幽かに宣傳歌の聲聞こえ來たる。

(大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 松村眞澄録)

第一六章 戰傳歌(一七四〇)

高天原に宮柱 千木高知りて永久に

鎮まりいます伊都能賣の 神の命を畏みて

山野河海を打ちわたり 照國別に從ひて

河鹿峠や懐の 谷間を越えて漸くに

祠の森に辿りつき 山口浮木の森を越え

ライオン川を打ち渡り 葵の沼に照りわたる

月に心を清めつつ あなたこなたの山々に

立籠りつつ國人を 苦しめなやむ曲神を

言向和し梓弓 引きて歸らぬハルの湖

玉の御舟に身を任せ 數多の人を救ひつつ

スガの港に上陸し 神の教を傳へつつ

又もや山野を打ち渡り 照國別の師の君の

神の軍と合せむと 夜を日についで進むをり

巽の方に鬨の聲 炎々天を焦がしつつ

タラハン城市の大火災 救はにやならぬと雄健びし

歩みを運ぶをりもあれ 曲神どもに遮られ

五日六日と徒に あらぬ月日を過しつつ

標渺千里の荒野原 進み來るこそ勇ましき

天に日月冴え渡り 下界を照らし玉はむと

心をなやませ玉へども 中津御空に黒雲は

十重や二十重に塞がりて 天津日影を隠しつつ

初夏しよかの頃ころとはいひながら　　まだ肌寒はださむき秋心あきごころ地
田たの面もに植うゑし稻いねの苗なへ　　發達はつたつあしく赤あからみて
飢饉ききんの凶兆きよつてつを現あらはせり　　ああ惟神かむながらかむながら々々
御靈みたま幸さちはへまして　　下萬民しもばんみんの罪科つみとがを
許ゆるさせ玉たまへ又上またかみに　　立ちたて霸張はばれる曲人まがびとの
心こころを清きよめ罪つみをとり　　誠まことの人ひととなさしめて
天あめの下したには仇あだもなく　　暗やみも汚けがれもなきまでに
照てらさせ玉たまへ惟神かむながら　　梅公つめこう別わけの宣傳使せんでんし
嚴いづの靈みたまや瑞靈みづみたま　　合あはせ玉たまひてなりませる
伊都いづ能賣めみたま靈たまの大おほ神かみの　　御前みまへに懼伏ひれふし願ねぎ奉まつる
朝日あさひは照てるとも曇くもるとも　　月つきは盈みつとも虧かくるとも
たとへ大地だいちは割わるとも　　誠まこと一ひとつつの三五あななひの
神かみの教をしへに從したがへば　　この世よの中なかに一いつとして
怯おそぢ恐おそるべきものはなし　　神かみが表おもてに現あらはれて

神かみと鬼おにとを立たて別わかける 此この世よを造つくりし神かむなほひ直なほ日ひ

心こころも清きよき大おほ直なほ日ひ だなだ何なに事ごとも人ひとの世よは

ただかむながら惟かむながら神かむながら々々 廣ひろき心こころに宣のり直なほし

罪つみを見みな直ほし聞き直なほし 許ゆるして通とほる神かみの道みち

行ゆく方かたに曲まがの現あらはれて 吾わが身みに如い何かなる仇あだなすも

神かみの恵めぐみに包つつまれし 誠まことの身み魂たま何なにかあらむ

襲おそひ來きたれよ曲まが津つか神かみ 戦たたかひ挑いどめよ大をろち蛇ちども

吾われには嚴いづの備そなへあり 生いく言こと靈たまの武ぶ器きをもて

幾いく億おく萬まんの魔ま軍いくさも 瞬またたく中うちにいと安やすく

言こと向むけ和やはし進すすむべし 三さん千せん世せ界かいの梅うめの花はな

一いち度どに開ひらく神かみの教のり 開ひらいて散ちりて實みを結むすぶ

月つき日ひと土つちの恩おんを知しれ この世よを救すくふ生いき神がみは

高たか天あま原はらに現あれませり アいアい勇さましや勇いしや

神かみの任よさしの宣せんでん傳し使し 月つきの御み國くにに降くだり來きて

いろいろ雑多の災や

百の苦しみ甘受しつ

無人の境を行くごとく

春野を風の渡るごとく

神の大道を開き行く

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

水車小屋の立番に雇はれてみたカーク、サーマンの二人は宣傳歌の聲を聞いて、少時耳を傾けてみた。

カーク「オイ、サーマン、どうやらあの聲は三五教の宣傳歌の聲のやうだぞ。何とはなしに心持ちが悪くなつて来たぢやないか。もしもあんな奴が此處へでもやつて来よつたら、忽ち地下室の太子の遭難を看破し、俺たちを靈縛とやらをかけた倒しておき、肝心の玉を搔つ攫へて、歸るかも知れないぞ。幸ひにして外の道を通ればいいが、どうやら馬に乗つて此方に来るやうな鹽梅式だ。こいつア何とか考へねばなるまいぞ」

サーマン「ウン、いかにも、身體がビクビク慄ひ出して来た。金玉寺の和尚が上

京しさうになつて來たよ」

「向かふも宣傳使だ。宣傳使を追つ拂ふには、こつちも宣傳使の眞似をせなくちやなるまい。靈をもつて靈に對し、體をもつて體に對し、力をもつて力に對するものが神軍の兵法だからのう」

「宣傳歌を歌へと言つたつて、俺は不斷から無信心だからウラル教の宣傳歌なんかチツとも知らぬわ。「飲めよ騒げよ一寸先や暗よ」ぐらゐは知つてるが、それから先はネツカラ記憶に存してゐないからな」

「ナ―ニ、そこはいい加減に出鱈目を喋るのだ。聲さへ【さし】ておけばいいのだ。あまり明瞭した事をいふと【アラ】が見えて却つて威嚴のないものだ。チツタわけの分らぬことを囀る方が、よほど奥があるやうに見えて、敵を退散させるのに最善の方法だ。マア貴様から一つやつて見よ。肝心要の正念場になりや、このカークさまが堂々と言靈を發射するから、まづ先陣として貴様が出鱈目の宣傳歌をやつて見い。まだ距離が遠いから何をやつてもいい、ただ歌らしく聞こへたらよい。こちらの歌が明瞭解るやうになつたら、俺が本陣を承るのだ。いいか一

つやつてみい」

「俺や貴様の知る通り牝鶏だから到底歌へないよ。どうか歌はお前の専門にしておいてくれ。一生の頼みだから」

「よし、歌へなら俺一人で引受けるが、その代り、この間取った百圓の中二十圓はこちらへ、歌賃として渡すだらうな」

「エー、二十圓も出さんならぬなら俺が歌つてみせる。その代り貴様も歌ふのだぞ。貴様が歌はねば此方へ二十圓もらふのだ」

「ヨシヨシ、もし俺がよう唄はなんたら百圓でもやるわ。サア歌つたり歌つたり、敵は間近く押寄せたりだ、早く早く」

「エー、やかましい男だな。何分腹に貯蓄がないのだから、さう着々と出るものかい。嬢が子を産り出すのは、ずるぶん苦しいといふけど、何ほど難産と言つても腹の中にあるものを出すのだから易いものだ。俺たちは腹にないものを出すのだから苦しいものだよ。アア二十圓の金儲けは辛いものだな」

「エー、グズグズ言はずに早く歌つたり歌つたり」

サーマン 飲めよ騒げよ一寸先や暗よ 暗の後は月が出る

つきはつきぢやが酒【づき】ぢや 俺のお嬢のサカツキは

何處にあるかと尋ねたら 草野ヶ原の谷の底

お舟のやうな形した 池の真中に島がある

カーク 馬鹿、そんな宣傳歌が何有難い。もつとしつかり言はぬかい

生れてから初めての歌だもの、さううまく行くものかい。さう茶々を入れない。

サアこれからやり直しだ。しつかり聞け、

大宮山の神の森 千木高知りて永久に

おさまり玉ふ神さまは 盤古神王といふことだ

この神様はカラピンの 大王様の氏神だ

さて此頃は何として あれだけ力が無いのだらう

大切の大切の氏子さま カラピン王のお城まで

飛火とびひがいたして大切なたいせつお寶物たからものが焼けたのは

神かみの守護しゆごのない證しるし今は洋行やうかうが流行はるので

神王しんのうさま様も澤山たくさんな旅費りよひをこしらへ船ふねに乗り

常世とこよの國くにへ渡わたつたかお宮みやの眷族けんぞく八咫やたがらす鳥

一月ひとつき前から一匹いっぴきも森もりでカアカア鳴なきよらぬ

ただ悲かなしげに杜鵑ほととぎすホホホホ亡ほろぶと鳴ないてゐる

右守うもりの司かみに頼たのまれてカラピン王わうの太子たいしをば

懸賞けんしょう付きで縛しばり上げ地底ちていの牢獄らうごくに繫つないだは

皆俺みなおれたちの功名こうみやうだもし神かみさまがござるなら

氏子うぢこと生あれます太子たいしをばこんな酷ひどい目めに會あはしたら

必ずかなら罰ばちをあてるだらうチツとも崇たりのないのんは

神かみがお不在るすの證しるしぞやそれそれそれそれ宣傳歌せんでんか

だんだんだんだんだん近ちかうなつたオイオイカーク用意よういせよ

交代時間かうたいじかんが迫せまつたぞ俺おれの宣傳歌せんでんかは種たねぎれだ

もう此上は逆様に 振つたところで蝨さへ

こぼれる氣遣ひないほどに どうやう鼻血が落ちさうだ

胸と腹とはガラガラと 大騷擾が勃發し

地震雷火の車 臍の邊りが熱うなつた

お臍が茶でも沸かすのか 暑くて苦しうて堪らない

これこの通り汗が出る くら くら くら くらカーク奴め

早く代つて歌はぬか 白馬の姿が見え出した

どうやら立派な宣傳使 こちらに向かつて来るやうだ

盤古神王鹽長彦の 不在の神さましつかりと

私の願ひを聞きなされ いよいよ歌の種ぎれだ

アア叶はぬ叶はない 目玉が飛び出て来るやうだ

オイ、カークこれで二十圓の價値はあるだらう。サア早く貴様もやらぬかい。敵
は間近に押寄せたぢやないか』

よーし、俺の武者振りを見てをれ、立派な歌だぞ、へん、

右守の司に仕へたる
俺は誠のカークさま

頭をカーク恥をカーク
終ひの果には疥癬カク

人に禮儀をカク奴は
俺ではないぞや今ここに

吠面かわいて慄うてゐる
小童野郎のサーマんだ

カークのごとき腰抜けを
俺の相棒にした奴は

サツパリ向かふの見えぬ奴
右守の司も氣がきかぬ

どことはなしに氣がおくれ
向かふ猪には矢が立たず

近く聞こゆる宣傳歌
胸に響いて「せつろ」しい

いやいやまてまて之からだ
捻鉢巻をリンとしめ

二つの腕に撚りをかけ
ドンドンと四股をふみ

三十六俵の眞中を
俺が陣屋と定めつつ

いかなる強き敵軍が
押しよせ來るも追ひ散らし

殴り倒して吼面を
かわかせやるは目のあたり

盤古神王鹽長彦の
貴の大神守りませ

アアアますます近よつた
こんな處へ宣傳使

やつて来たなら何とせう
どうか彼方の方角へ

迷うて行くやうにして欲しい
誠の神があるならば

俺の願ひを聞くだらう
こりやこりやサーマン地下室に

心を配れよ油断すな
大切の玉を奪られては

後で言譯ないほどに
ああ惟神々々

かうなる上は地下室に
隠れてござる太子こそ

却つて俺より幸福だ
ほんとに怪體な聲がする

彼奴の歌を聞きたびに
腹はグレグレグレついて

胸元苦しく嘔げさうだ
にはかに頭が痛み出す

胸はつかへる腹痛む
足の付根がガクガクと

遠慮もなしに慄ひ出す
ああ惟神々々

わづか百兩の金貰うて　　こんな辛い目をさせられちや
ほんとに誠につまらない　　あの百兩は玉の緒の
命一つと掛替へだ　　思へば思へば俺たちの
命はお安いものだな　　ああ惟神々々

叶はん叶はん、到底俺たちの挺にも棒にもあふ代物ではないわ。一層地下室に潜り込まうか。かへつてこんな處にをると宣傳使の目につき、首つ玉でも引抜かれちや大變だ。三十六計逃ぐるが奥の手、サーマンだつて地下室に潜り込んで土龍の眞似をしてゐやがる。ナーニ俺一人頑張る必要があらうか
と言ひながら水車小屋の中に慌ただしく走り込み、ドンドンと地下室さして降り行く。

（大正一四・一・七　新一・三〇　於月光閣　北村隆光録）

第一七章 地の岩戸（一七四一）

三五教の宣傳使梅公別は白馬に跨がり、渺茫として天に續くデカタン高原の大原野を、東へ東へと那美山の南麓を目當に進み來たり、古ぼけた水車小屋の前に駒を留め獨言、

「ハテ、訝かしや、今この附近に人聲が確かに聞こえたやうだ。駒を早めて近寄り見れば人の住みさうにもないこの破屋一つ。水車はあれど運轉中止の有様、何かこの小屋には秘密が潜んでゐるに相違ない。どれ一つ調べて見やう」

と駒をヒラリと飛び下り、水車小屋の柱に縛りつけおきながら、いろいろと四邊を耳をすまして窺つて見た。どこともなしに人の聲が聞こえて來る。地の底のやうでもあり、また上の方から聞こえて來るやうでもあり、聲の出所が解らぬ。梅公別は菰を敷きて端坐し瞑目して祈願を籠めたその結果は、「地下室に立派な人が投げ込まれてゐる」といふことが解つて來た。あたりをよくよく調べ見れば、草鞋に摺りみがかれた床板がある。グツと手をかけ一枚めくつて見ると、地下室

へ相當の階段が通つてゐる。梅公別はこの階段を四五間ばかり右に左に折れ曲りながら降つて往くと、そこに二人の男が抱き合つて慄つてゐる。

梅公別「やアその方は何者だ。察するところ、何か良からぬ祕密の伏在する魔窟と見える。有體に申し上げる」

サーマン「ハイ、ワワワ私はサササーマンといふヒヒヒ一人の人間でございます。何も別に悪い悪事をいたした覚えは更にございませぬ。右守の司様の御命令に依りまして、ここに勤めてゐるのでございます。どうぞ今日の所は見逃して下さいませ。お慈悲です、お情けです、頼みます。コココラ、カーク、貴様もチチつと言ひ譯の辨解をいたさぬか」

カーク「いや申し宣傳使様、私はカークと申しまして餘り悪くもない、良くもない世間並みの人間でございます。實のところは右守の司が大變な謀叛を企らみ、カラピン王の太子スタルマン太子を、二千圓の懸賞付きで取つ捉まえてくれと、内々御命令が下りましたので、二十人のものが、ソソその百圓づつ確かに儲けさせて頂きました。どうぞ御了見下さいませ。いつでも、取る金は取つたのですか

ら、太子様は何時でもお返し申します。のうサーマン、ソソさうぢやないか」

サ「ソソそれでも太子様をココこの人に渡さうものなら、俺達のクク首が飛ぶぢやないか」

梅「お前たちのいふ事は些とも要領を得ない。要するにタラハン城の太子様を右守に頼まれて何處かへ匿したと申すのだな」

サ「ハイ、その通りでございます。毛頭相違はございませぬ。何處かへ匿しましてでございます」

梅「何處かでは解らぬぢやないか。「かつきり」と在所を言つたらどうだ」

サ「ハイ、たうとう……所へ匿しました」

梅「何といふ所へ匿したのだ」

サ「ハイ、チチチのつく所です。オイ、カークお前も半分いへ。俺も祕密を明しては責任があるからなア。一口づつ言はうぢやないか」

カ「ハイ、宣傳使様、包まず隠さず申上げます。カーに匿しました」

サ「シーに匿しました」

カ 「ツ―に匿かくしました」

梅 「なに、チ―とカーとシーとツ―と、アア地下室ちかしつか。地下室ちかしつと言いへば此處ここではないか」

サ 「サーでございます」

カ 「ヨ―でございます」

梅 「オイ、邪魔じやまください。左様さやうでございますと言いへば可よいぢやないか」

サ 「こんな祕密ひみつを申まを上げやうものなら、右守うもりの司かみから打うち首くびにあはされますから、それで態わざと解わからぬやうに言葉ことばを分わけて申まをしました。御推察ごすゐさつくだ下さいませ、あな

たの明敏めいびんの頭腦づなうでお考かんがへ下くだされば解わかるでせう」

梅 「なるほど、それも一理いちりがある、面白おもしろい。それでは二人ふたりが分わけて話はなしてくれ。

自分じぶんは言靈ことたまわけ別わかれだから一言ひとこと聞きけば大抵たいてい解わかる。さうしてこの地下室ちかしつに押おし込まれてゐる方かたは一人ひとりか二人ふたりかどうだ」

二人ふたりは互たがひに一言ひとことづつ、

「フ、タ、リ、サ、マ、デ、ゴ、ザ、リ、マ、ス。ソ、シ、テ、ヒ、ト、リ、ハ、

ス、ダ、ル、マ、ン、タ、イ、シ、サ、マ、ヒ、ト、リ、ハ、ス、バー、ル、ヒ、
メ、サ、マ、デ、ゴ、ザ、イ、マ、ス。ミ、ツ、カ、マ、へ、カ、ラ、ナ、ニ、
モ、ク、ハ、ズ、ノ、マ、ズ、ニ、オ、シ、コ、メ、ラ、レ、ク、ル、シ、ン、
デ、イ、ラ、レ、マ、ス」

梅「ヤ、もう解つた。貴様達は此處を些とも動くことはならぬぞ」

カ「ハイ動けと仰有いましてこの通り腰が抜けてしまったものですから、動く事は出来ませぬ」

梅「荒金の土の洞穴底深く

繋がれ給ふ君を救はむ

吾こそは三五の道の神司

君を救はむと忍び來にけり」

太子は石牢の中よりさも爽かなる聲にて、

☞ 惟神かむながらの恵めぐみの幸さちはひて

岩戸いはとの開ひらく時ときは來きにけり

三五あななひの神かみの司つかさの御恵みめぐみの

露つゆに露つるほふ若わか緑みどりかな

吾わぎ妹も子は隣となりの牢屋ひとやに繋つながれぬ

とく救すくひませ吾われより先さきに☞

スバール姫ひめは最前さいぜんからこの様子やうすを考かんがへてゐたが、
地に堪たえず、さも嬉うれし氣げに、
地獄ぢごくで佛ほとけに遇あうたる心地こころ、喜よろこ

☞ 訝いぶかしきこれの牢屋ひとやに捉とらはれて

泣なき暮くらしけり吾等われら二人ふたりは

皇神すめかみの珍うづの御光みひかり現あらはれて

常夜とこよの暗やみを照てらす嬉うれしさ☞

梅公別は牢獄の鍵を探せども、何處にも鍵らしきものが見當らないので、兩人に向かひ厳しく訊問して見ると、牢獄の鍵は右守の司が持つて歸つたとの答へである。梅公別は途方に暮れながら一生懸命に天の數歌を奏上し祈りはじめた。不思議や牢獄の岩の戸は自然にパツと開けて、五色の光明が室内を射照らした。太子もスバル姫も轉ぶがごとく牢獄を走り出で、梅公別の體に前後より喰ひつき嬉し涙にかきくれ、少時言葉さえ出し得なかつた。

梅「承れば殿下はタラハン城の太子様、また貴女はスバル姫様とのこと、どうしてまア斯やうな所へ押し籠められ玉うたのでございますか」

太「恥づかしながら吾々二人は戀におち城内をひそかに脱け出で、山奥の破れ寺に入つて匿れ忍んでをりました所、心汚なき右守のサクレンスなるもの、王家を奪はむ企みより、吾々を邪魔者と見做し、惡漢に命じ金を與へてふん縛らせ、かやうな所へ連れ參り、吾ら二人を干し殺さむとの企み、もはや決心の臍は極めてをりましたが、思ひも寄らぬ貴方のお助け、かやうな嬉しい事はございませぬ」
ス「宣傳使様、有難うございます。お蔭で命を救うて頂きました。この御恩はミ

口クの世までも忘れは致しませぬ。命の親の神司様、辱なふ存じます」

梅「人を救ふは宣傳使の役、そのやうに禮を言はれては却つて迷惑をいたします。神様が私の體を通して貴方がたをお救ひ遊ばしたのですから、國祖國常立大神様、豊雲野大神様にお禮を仰有つて下さいませ。サア私と一緒に聲を揃へてお禮をいたしませう」

「ハイ、有難う」

と兩人は梅公別司と共に、心のどん底より満腔の赤誠を捧げて、感謝の辭を大神に奏上し終り、梅公別は兩人に向かひ、

「サア皆さま、かやうな所に永居は恐れがございます。これから私がタラハン城へお送りいたしませう。今までの間違つた心を取り直し城内へお歸り遊ばし、大王殿下の宸襟をお安め遊ばしませ」

太「ハイ、何から何まで、御親切に有難うございます。しかしながら此女は父には内證で連れてをりますので、此女を連れて歸るわけには参りませぬ。それだと言つて今更捨ててゆくことも可愛さうで出来ませぬ。また私の戀愛至上主義より

見ても捨てるわけには行きませぬから、どうぞお慈悲に此處から二人をお見捨て下さいませ。一生の願ひでございます」

梅「アーそれは間違つたお考へ、どうあつても私がお伴をいたしませう。さうしてお二人の戀愛は敗れないやうに私が媒介となつて、父王殿下の御承諾を得る事にいたしませう。必ず御心配なくお館へお歸りなさいませ」

「父は大變に頑固でございますから、神司のお言葉といへども到底承知はいたしませんまい」

「それは貴方の心の偏見と申すもの。天の下に子を愛せない親がございませうか。あなたがこのスバル様を愛してをられるよりも百層倍増して、貴方の父上は貴方を愛してをられますよ。愛する貴方の心を慰むる戀人をどうしてお憎み遊ばしませう。宣傳使の言葉に二言はありませぬ。生命を賭しても貴方の戀を完全に成功させませう。承ればタラハン國は紛擾絶間なく、國家は危機に瀕してゐるやうです。御父殿下も御心配の折りから、天にも地にも一人子の太子様のお行衛が分らないやうな事では、層一層父殿下の御心配は増すばかり、國家の擾亂は日を逐

うて激烈を増すばかりです。その虚に乗じて悪臣どもが非望を企て、世は一日と修羅の巷となるばかりでせう。是非私に跟着いてお歸りなさいませ」

「ハイ重ね重ねの御教訓有難うございます。そんならお言葉に従ひ一先づ城内に歸る事に決心いたします。まことに濟ませぬが、どうか送つて下さいませやう」

「やア早速の御承知、さすがはタラハン國の太子様、私も満足いたしました」

「妾もお言葉に甘へ、宣傳使様のお伴をいたしまして、太子様と共に參らしていただきませう。どうか宜敷うお願いいたします」

梅「や、御心配遊ばすな。きつと圓滿に解決をつけてお目にかけてませう。何事も神様にお任せ申せば大丈夫ですから。しかし太子様、この兩人はどう遊ばします

か」

太「ハイ、許し難い悪人でございますれば、この兩人を牢獄へぶち込み懲らしめてやりたいは山々でございませうが、私も牢獄生活の苦しみを味はひましたので、吾が身を抓つて人の痛さを知れとやら、どうも可憐さうで放り込んでやる氣もいたしませぬ。この處置については宣傳使様の御判断に任せませう」

カ「アア、もしもし宣傳使様、決して私は此の後に於いて悪事は致しませぬから、どうぞ牢獄へ入れることだけは許して下さいませ。その代りお馬の別當でも何でもいたします」

梅「人を救けるは宣傳使の役だ。しかしながら恐れ多くも太子殿下を苦しめ奉つたその方どもなれば、一人だけ助けてやろう。一人は氣の毒ながら此の牢獄に打ち込んでおくつもりだ。太子様、どちらが比較的善人でございますか」

太「ハイ、私としては甲乙の區別がつきませぬ。揃ひも揃つて悪い奴でございませぬから」

サ「もし太子様、私は何時も貴方に對し同情を持つてゐたぢやございませぬか。このカークと言ふ奴、私が「太子様にお腹が空くだらうから、焼甘藷の蒂でも買って来てソツと上げたらどうだらう」というたところ、大悪黨のカークの奴、
「私はそんな宋襄の仁はやらない、斷乎として水一杯も吞まず事は出来ない。右守の司にそんな事が聞こえたら、俺の首が飛ぶ」と極端に自己愛を發揮した奴でございませぬから、どうか私をお助け下さいませ」

梅「アツハハハハ、オイ、カーク、お前はサーマンが今言つたやうな事を申したのか」

カ「ハイ、是非はごさいませぬ。神様の前で匿したつて駄目でごさいます。あの通り申しました。誠に今となつて思へば申譯のない事をいたしました。どうか私を牢獄に投げ込んで歸つて下さいませ。サーマンは女房も有ることなり、私は一人身、どうなつても構ひませぬ。妻も無く、子も無く、何時死んでも泣く者さえごさいませぬから」

梅「ハハハハ、わりとは正直な奴だ。どうやらお前の方が善人らしい。さう有體に白状した上はお前の罪は消えてしまつた。氣の毒ながらサーマンを牢屋に投げ込むより仕方がなからう。太子様、殿下のお考へは如何でございますかなア」

太「や、それは面白いでせう。人の秘密を明して自分が助からうといふやうな悪人は懲らしめのため、何時までも冷たい牢獄に投げ込んでおくが宜敷いでせう」

サ「もし太子様、殿下様、どうぞ今までの悪事は大目にみて下さいませ。その代り殿下のためならば、今死ねと仰有つても死にますから」

太「やア面白い。しからは牢獄に投げ込む事は許してやらう。どうぞや嬉しいか」
サ「ハイ嬉しうございます。ようまアお助け下さいました。今後は殿下のためなら何時でも命を差し出します」

太「やア愛い奴だ。そんなら餘の身代りとなつて今此處で死んでくれ。汝の首を提げて右守司の前に差出し、スダルマン太子の生首と申し、首桶に入れて進物にいたす考へだから」

サ「メメめつさうな、今ここで命を取られては助けてもらつた甲斐がございませぬ」

太「ハハハハハ、汝のごとき生首がどうして餘の身代りにならうか。瓦は金の代りにはなるまい。アア總て人間の心は皆こんなものだらう。父王殿下のお側に親しく仕へ侍る老臣どもは「大王殿下のためならば何時でも命を的に働きます」と、臆面もなく口癖のやうに申してゐたが、五月五日の大騒擾の勃發した時は、左守、右守を始め重臣どもは四方に逃げ散り、唯の一人も参内したものはなかつた。高祿に養はれた重臣でさへもその通りだから、匹夫の汝が命を惜しむのは無理もな

い。餘は宣傳使に救はれた祝ひとして、汝等兩人を立派に放免する。何處へなりと勝手に行ったがよからうぞ」

太子のこの情けの籠もつた言葉を聞くより、今まで腰を抜かして居た兩人はムクムクと起き上がり、長居は恐れ又もや御意の變らぬ内にといつたやうな調子で、「ア、リ、ガ、ト、ウ、サ、マ」と互ひに一言づつ謝辭を述べながら、一目散に階段を昇り、雲を霞と吾が家をさして馳せ歸り行く。

梅公別は遙の原野に遊んでゐる二頭の野馬を捉へ來たつて兩人に勧めた。スバル姫は騎馬の経験がないので、梅公別が乗り來たつた鞍付きの馬に乗せ、二人の男は荒馬に跨がりながら駒の蹄に土埃を立て、東北の空を目當に驅けて行く。

捉はれし太子の御子も三五の

神の恵みに放たれてけり

（大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 加藤明子録）

第五篇 神風駘蕩

第一八章 救の網（一七四二）

浅倉山脈の千尾千谷より流れ落つる玉野川の下流をインデス河といふ。この河はタラハン國の中心を流れ、北より南に遠くカルマタ國の牛の湖水に注いでゐる。左守の倅アリナは、身なりも輕き比丘姿、深編笠を被りながら、十二夜の月の朧げに照りわたる野路を辿つて、インデス河の畔に着いた。激流飛沫を飛ばして涼々たる水音、見るも凄じく川瀬に龍の跳るがごとく、川一面に散在せる岩にせかれ、水は白玉となつて高く飛び散つてゐる。アリナは橋の傍の藁小屋をみとめて、息を休むべく潛り入つた。ここは橋番が出張して、通行人一人に對し片道三厘の橋錢を取るために拵へた小屋である。アリナは月の光を仰ぎながら、藁屋の戸を開けて、涼しき風を浴びてゐた。

かかる所へ二三人の黒い影、向かふ岸より一本橋を撓つかせながら渡り來たる者がある。黒影の一人、

甲「やア家來ども、今日は大變に草臥れたであらう。なかなか搜索隊も骨の折れるものだ。やア幸ひここに橋番小屋がある。どうぞや、まだ家へ歸るには四五町道のりがあるから、ここで休息してボツボツ歸らうぢやないか」

乙「ハイ、休息して歸りませう。夜道に日は暮れませぬからなア」

「夜道の怖い汝も、今日は主人と一緒だから大丈夫だよ」

「ハイ左様でございます。今日は旦那様と御一緒でございますから千人力でございます。何ほど那美山の狼が唸ったところで、ビクともいたしませぬわ」

丙「アツハハハ旦那様、此奴ア評判の臆病者でございました、今まで夜道はした事のない奴でございますよ。夜道は晝でも恐い、その代り夜食は晝でも甘いとぬかす奴ですもの」

甲「アツハハハ」

乙「馬鹿いふない。晝の夜食が何處にあるかい。汝も餘程間の抜けたことをいふ

奴やつだな」

甲かふ「ヤアどうやら此この番ばん小屋こやには生物いきものがあるやうだ。コリヤコリヤその方ほうは何者なにものだ」

アリナ「拙僧せつそうは諸國しよこく遍歴へんれきの修験者しゆげんじやでござる」

甲かふ「ハハア、そこらあたりを法螺吹ほらふきまはる比丘びくだなア。ヤア分わかつた分わかつた。

エー、比丘びくならばチツとばかり豫言よげんや神占うかがひが出来できるだらう。どうか一ひとつ拙者せつしやの願ねがひを聞きいてくれまいかなア」

「ハイ、何事なにことでも承うけたまはりませう。拙僧せつそうはスガ山さんに立籠たてこもつて佛道ぶつだうを修業しゆげふいたす天然坊てんねんばう

と申まをす者もの、たいていの事は百發百中ひやくぱつひやくちゆう、天然坊てんねんばうの星當ほしあたり、合あふも不思議ふしぎ、合あはぬも不思議ふしぎ、六十一卦ろくじふいつけ筮竹ぜいちくの變化へんげによつて、あるひは陽やうとなり陰いんとなり、乾坤けんこん離兌りだな

どと、種々しゆじゆざつた雑多ざつたに變化へんげいたすによつて、拙僧せつそうの神占うかがひをよく翫味くわんみなさらぬと間違まちがひが出来できますよ。お前まへさまは夕ゆふラハン城じやうの大權力者だいきんりよくしや、右守司うもりのかみの職掌しよくしやうを勤つとめてゐらつ

しやる方かたでござらうがな」
「ヤ、これは恐おそれ入いつた。如何いかにもお察さつしの通とほり、右守司うもりのかみのサクレンスでござる」

「アツハハハ、貴殿は何か搜索物があるやうだが、サクレンスといふ名前では、紛失物の所在は到底サグレンスでござる。貴殿の尋ねらるる者は、物品でもなく、家畜でもなく、米食ふ蟲でござらうがな」

サクレンス「ハイ、その通りでございます。どうしてマアそなたはそれ程よく御存じでございますか」

ア「アツハハハ拙僧は月の精より衆生濟度のため、この地上へ降りし者、悪人を懲らし善人を救はむがため、一笠一蓑一杖に八尺の身を任せ、諸國を遍歴いたしてゐるが、タラハン國は大變な騒動が起つた様子でござるなア」

「ハイ、一つお伺ひを致したうございますが、私の希望は成就するでございませうか」

「どういふ希望だ。有體に言はつしやい。道德を守つて、如何なる秘密も決して拙僧は他言は仕らぬ。事と品によつては、そなたの力になつて進ぜたい」

「ハイ、有難うございます。實のところはタラハン國の大王殿下は命旦夕に迫り、太子様は女に現を抜かして、驅落ちを遊ばし、今に行衛は分らず、國家の滅亡は

旦夕に迫る場合、某は右守司として國家の窮状をみるに忍びず、吾が弟エールをもつて、已むを得ず王位にのぼせ、幸ひ王女バンナ姫を后となし、タラハン國家の復興を企てつつある最中でございます。この目的は必ず成功いたすでございますませうかな」

「ハハハハ、危ふいかな災ひなるかな。そなたの面相には殺氣が漲つてをりますよ。そして眉間の間にありありと劍難の相が現はれてゐる。すぐさま其野心を改めざるにおいては、忽ち災身に及ぶでござらう。そなたは太子殿下を何處かへ隠し、再び世にあげない考へでござらうがな。拙僧はいささか太子に由縁のある者、そのお行衛を捜さむため、實は修騷者と化け、この界隈を夜間を窺ひ、實は捜してゐるのだ」

「ナニ、太子殿下に由縁のある者とは、何人でござるかな」

「アツハハハハ右守殿も耄碌せられたなア、そらその筈でもあらう。二つの眼は近眼でもあり、片足は不具でもあり、左様な難き不完全なる體を動かして、アリの所在を尋ねまはるとは、テもさても御苦勞千萬、右守殿が躍起となつて尋ね

てゐるアリナの君は斯く申す拙僧でござる。美事相手になるならなつて見なされ、アツハハハハ」
「最前から何だか怪しき奴だと思つてゐたが、いかにも其方は左守の倅アリナに間違ひない。ヤアよい所で出會うた。オイ家來ども、有無をいはず此のアリナをふん縛れ」

「アイ」

と答えて兩人は前後よりアリナに武者振りつかむとする。アリナは飛鳥のごとく身をかはし、右に左に敵の鋭鋒をさけながら、金剛杖にて、白刃の刃をうけ流してゐる。しかしながらアリナも到底多勢に無勢、グツグツしてゐて命を取られちや大變と、一本橋を一生懸命に西側の岸に向かつて驅け出す途端、粗末な橋杭に躓いて、ザンブとばかり激流の中に落込んで了つた。右守その他の家來どもは手を拍つて萬歳を三唱し、肩肱怒らしながら勇み進んで家路をさして歸りゆく。

民衆救護團の女團長バランスは、澤山の乾兒を養ふその費用に窮し、右守司が禁斷の場所と定めておいた、魚が淵といふインデス川の稍水の淀んだ場所におい

て、乾兒と共に網打ちを月夜を幸ひ始めてみた。この地点は岸邊に老木繁茂し、魚の集合所には最適當の場所であり、かつ澤山な種々の魚介が棲息してゐる。萬一この場所に網を入れ、役人に見つかからうものなら、たちまち石子責の刑に處せらるるといふ厳しき掟である。バランスは數十人の乾兒に見張りをさせながらバサリバサリと網を打ち、澤山な魚を捕獲してみた。十網ばかり打つた時、非常に重たいものが網にかかった。バランスは腕力に任せて引上げて見ると人間の死骸である。義侠心に富める彼女は、

「吾が網にかかるは何かの因縁だらう。いづくの人かは知らねども、もし命の助かるものなら、あらゆる手段を盡して助けてやらねばなるまい」

と、乾兒に命じ澤山の焚物を集めさせ、河縁に火を焚いて温めてみた。そして人工呼吸や、種々の手段を盡してみたが、息を吹き返さず、ほとんど絶望の淵に沈んでゐる時しもあれ、駒に跨がり此の場に現はれて來たのは、水車小屋に捉はれてみたスタルマン太子の一行である。バランスは一目見るより月影にすかして、スタルマン太子たる事を知り捨鉢氣味になり、ゴテゴテぬかさば強力に任せ、馬

もろとも河中に投じてくれむものと、身構へをした。太子は後を振りむながら、
「宣傳使様、どうやら土左衛門が網にかかったやうです。助けてやる事は出来ま
すまいかなア」

梅「いかにも溺死者とみえます。神様に祈つて蘇生さして頂きませう」
と言ひながら、駒をヒラリと飛下り、バランスの前に進みよつて、丁寧に腰を屈
め、

「見れば溺死人と見えますが、貴女がたは親切に介抱して下さる様子、實に奇特
神妙の至りでござる」

バランスはこの言葉を聞いて、案に相違し、握りかためた拳のやり場に困つた
といふ顔付きにて、

「ハイ、私は實のところバランスといふ漁業團長でござりますが、禁断の場所を
犯して魚族を捕獲するをりしも、吾が網にかかったのは比丘姿の旅人、どうかし
て助けたいものだ、この通り火を焚いて温め、いろいろと手を盡しますれど最
早駄目でございます。もしこれが蘇生するものならば、どうか宣傳使のお祈りに

よつて助けて頂きたいものでございます」

梅公別は直ちに天津祝詞を奏上し、天の數歌を唱へ死者の前額部に右の示指をあてて、一生懸命に靈を送る事ほとんど五分、不思議や死人は「ウン」と唸り出し、幽かに手足を動かし始めた。バランスを始め一同の歡喜は例るに物なきほどであつた。やうやくにして死人は元氣回復し、四邊をキヨロキヨロと見まはしながら、篝火にすかし見て、

「ヤア貴方はスダルマン太子様でございますか」

「何、汝はアリナであつたか、ヤアいい所で其方に出會ひ、餘も満足だ」

「スアリナ様、妾はスバールでございます。貴方は死んでいらつしやつたのでございませよ。ここにござる大きなお方の網にかかり貴方は救われたのです。種々と此の方が御介抱を遊ばしたさうでございますが、どうしても蘇生の望みがないので、失望落膽してゐられた所へ、三五教の宣傳使梅公別様、即ち此のお方が神様に祈つて、あなたを助けて下さつたのですよ。サアお禮を申しなさい」

「アハイ、有難うございます。モシ宣傳使様、エー、漁師様、再生の御恩、末代

までも忘れはいたしませぬ」

と簡単に、落涙して感謝の辭を呈する。

太「ヤア結構々々、汝バランス、禁斷の場所を冒した罪は國法上許し難いなれど、汝が仁愛の心に免じ忘れておく」

バラ「これはこれは太子殿下でございましたか。御仁慈のお言葉骨身に堪へて有難う存じます。大體かやうな不公平な法律を發布し、自然に發生く魚族を右守の司の特別漁獵區域となし、人民一般に天然の恩恵を均霑させないといふのは餘り矛盾ではございませんまいか。妾は民衆の味方と成つてかかる不公平なる法律を撤回し、四民平等の神意に基づき、タラハン國の政治を根本的に改革いたしたく念願してをります。かやうな所で太子様に申し上げるのは畏れ多うはございますが、妾の一言は國民全體の聲でございますから、何とぞ何とぞ仁慈の御心をもつて、かかる狭苦しき法律を撤回遊ばすやう、違法ながら謹しんで殿下に直訴をいたします」

「ヤ、實に天晴れな汝の志、感心々々。餘はこれより城内に歸り、國政の大改革

を斷行する考へだ。汝は民衆の母として今日まで國家のため大活動をやつてゐたことは、うすうす聞いてゐる。ついてはどうだ、餘の政治を助けてくれる心はな
いか」

「ハイ、思ひもよらぬ殿下の思召し、何分鄙に育つた不作家者、到底廟堂に立つ事は出来ませぬ。まして今まで茶坊主の妻とまで成下つてをりました卑しき女でございませぬから……」

「そちにも似合はぬその言葉、國民救護のためならば、勇んで餘が言葉を聞いても可いぢやないか。今までのごとく特權階級が威張り散らし、下民衆の難儀を知らず顔に、吾が身勝手の事を致すような惡政はやらせないつもりだ。どうか餘が頼みを聞いてはくれまいか」

「ハイ、思ひがけなき殿下のお見出しに預かり、日ごろの願望も成就の時が参りましたやうでございませぬ。左様ならば令旨に従ひ、殿下に付添ひ入内致すでございませぬ」

「ヤア満足々々、時を移さず、汝は餘について城内へ來てくれよ」

「畏まりました。しかしながら此のアリナ様は到底この様子では歩行は難からうと存じますから、妾が馬となり、背に負ぶつてお供をいたしませう」

梅「ヤ、バランスさま、天晴れ天晴れ。男子にまさる貴女の勇氣、あなたこそ神の化身ともいふべきお方でございます」

バラ「左様にお褒め下さつてはお恥づかしうございます。サア参りませう」

とバランスはアリナを背に負ひながら、駿足の後より従ひ行く。

この時、大空の月は淡雲を押し分けてニコニコしながら、一行五人の夜の道芝を清く明らけく照らせ玉うた。インデス河の河波は月光を浴びて金鱗の如くキラリキラリと瞬いてゐる。

（大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 松村眞澄録）

第十九章 紅の川（一七四三）

カーク、サーマンの二人はインデス河の河邊を膝栗毛に鞭うち一生懸命に走り行く。右手の草村より手招きして「オーイオーイ」と叫ぶ者がある。二人は聞覚えのある聲と立ちとまつて、息をついでゐた。そこへ萱草を分けて、のそりのそりとやつて来たのは右守司サクレンスが弟エールであつた。二人はエールの顔を見るより、地上に蹲まり、

カーク「これはこれは、エールの君様、思はぬ所でお目にかかりました。あなたはまた斯様な所に何をしてゐらつしやるのですか」

エール「イヤ、一寸秘密の用向きがあつて」

「秘密の御用向きと仰有るのは、アリナの行衛を捜してゐられるのでせう。貴き御身をもつて供をも連れず、ただ一人なせ斯やうな所にお出ばりになつてゐられるのですか」

「イヤ、アリナの行衛も搜索せなくてはならぬが、王女バナナ姫様のお行衛を尋ねて、此處までやつて来たのだ。この少し先方に賤の岩屋と言つて岩窟がある。此處はカラピン王様の御先祖の奥津城の跡、それ故もしや、バナナ姫様がお参り

になつてゐるのではあるまいかと、ただ一人ワザとに捜しに來たのだ」

「姫様は、そしてゐられましたか」

「イヤ、お姿が見えないのだ。アア困つた事だワイ。しかしお前は秋野ヶ原の水車小屋の番を仰せつかつてゐた筈だが、どうして又歸つて來たのだ」

「之については大變な珍事が突發いたしました。それゆゑ御報告がてら、歸つたのでございます」

「椿事とは何事だ。民衆救護團でもやつて來て、太子を奪ひ取つたのではないか」

「ハイハイイイエエエー、さうでもございませぬが、三五教の宣傳使がやつて參りまして、太子殿下およびスバル姫を救ひ出し、たつた今駒に跨がつて、ここを通るでございませう。太子が城内へ歸られたならば、まづ第一に右守司様の御迷惑、用意を遊ばさねばなるまいと、一生懸命に御注進に歸る途中でございませう」

「ヤ、そいつア大變だ。オイ兩人、事成就の上は汝を立派な役に使うてやるから、どうだ、この少し向方に、一方は河、一方は岩山、そこには古ぼけた宮が建つて

ある。之これからその宮みやのうしろ後に三人忍さんにんしのび居をり、太子たいしの歸かへるのを待伏まちぶせ、太子たいしの命いのちを取とつてしまふか、但ただしは激流げきりうへ投込なげこむか、何なんとかして片付かたづけねばならぬ、どうだ、俺おれの命めいを聞きくか」

「八八八八ハ、貴方あなたの御命ごめい令れいなれば、決けつして否いなみは致いたしませぬが、三五あななひの宣傳せんでん使しといふ奴やつ、到底たうてい一筋繩ひとすぢなはではゆかぬ奴やつでございますから、用心ようじんをせなくちやなりませぬ」

「ナアニ、あの地ち點てんは攻せむるに難かたく防ふせぐに易やすきタラハン國ごく第一だいいちの險要けんえうの喉首のどくびだ。彼處あそこにさへをれば、たとへ千萬人せんまんにんの敵てきが來きても大丈夫だいぢやうぶだよ」

カーク「如何いかにも左様さやう、成程なるほどご尤ももつと。オイ、サーマン汝きさまどうだ。御命ごめい令れいを奉ほうずるかな」

サーマン「そら……、俺おれだつて、出世しゅつせのおなしたいのは同おなじ事ことだ。そんな安全あんぜんな所ところなら、俺おれも御用ごようを承うけたまはらうかい」

エール「ヤ、兩人りやうにんとも、合點がってんがいたなれば、早はやく岩山いはやまの森もりまで行ゆかう。やがて太子たいの一行いっかうが歸かへつて來くる時分じぶんだらう」

といひながら岩山の森を指して走り行く。

一方アリナは體中、肉付のよいブクブクとした柔らかな背中に負はれ、何となく妙な氣分がして來出した。そしてバランスもまたアリナのどこともなく男らしく、凜々しい姿に、この男ならば……といふやうな妙な氣になつてゐた。
太子は聲も涼しく、馬上豊かに月光を浴びながら行進歌を歌ふ。

アア有難し有難し 九死一生の苦しみを

三五教の宣傳使 梅公司に助けられ

妹背の縁も恙なく ふたたびここに相生の

松の緑の色深く 駿馬に跨がり夏々と

峰の嵐に吹かれつつ インデス河の河邊を

勇み進んで上る内 心は頓に冴えわたり

神のまします天國の 旅路を進む心地せり

月の光は波の上に 瞬き初めて麗しく

飛沫の音はタラハンの
國家復興を歌ふ如

耳をすまして聞こえ来る
アア勇ましや勇ましや

神が表に現はれて
善と惡とを立別けて

吾が舊國を根底より
改め給ひ民衆の

永き平和と幸福を
與へ給ふぞ嬉しけれ

吾が師の君に従ひて
川邊の森に來てみれば

月夜に瞬く篝火の
影に寄りそふ數十人

何をなすやと伺へば
網にかりし旅人の

死骸をあぶり肉體の
命を救ひ助けむと

民衆團の團長が
力かぎりに介抱し

心を碎くをりもあれ
吾が師の君の言靈に

死人は漸く甦り
よくよくみれば吾が慕ふ

賢き友のアリナなり
アリナは漸く元氣づき

バランス團長に負はれつつ
河邊を傳ひスタスタと

吾等一行に加はりて 此處まで無事に歸りけり

ああ惟神々々 神の恵みの尊さよ

向方に見ゆる岩山の 神を祀りし森のかけ

吾等は其處まで驅けつけて 一先づ息を休めつつ

神のまにまに城内へ 轡を竝べて歸るべし

アア樂もしや樂もしや 一陽來復春は來ぬ

ああ惟神々々 御靈幸はへましませよ

かく歌ひつつ、駒の足音に大地を響かせながら、漸くにして岩山の森蔭、古き社の前に着いた。太子一行はバランスやアリナの身の疲れを休養さすべく、ワザと此處に駒を止めたのである。梅公別は早くもこの古社の後ろに怪しき者ありと勘付いたが、まさかの時には言靈をもつて靈縛せむものと夕力をくくつて、何食はぬ顔しながら、一行五人一の字形になつて社前の敷石に腰打ちかけ、煙草を熏らしてゐた。

社の後ろには三人の囁き聲、

「オイ、カーク、来たぞ来たぞ。サア俺に忠義を盡すのは今だ。彼の正中に居る奴が太子だ、彼奴を矢庭にこの刀を以て袈裟掛けに切り捨てるのだ。それさへすれば外の奴アどうでもよいから、サア行け行け」

「ハイ、参ります。しかし、旦那様、私に跟いて来て下さい。何といつても向方は五人、そんな所へ私一人行つたところで駄目でございますからなア」

「エー、氣の弱い奴だな、そんならサーマンと一緒に飛び出して行け」

「ハイ行かぬこたございませぬが、何だか手足がワナワナ致しまして、怖くて堪りませぬワ」

「チヨツ、エー口ばかりの代物だなア。サア俺に跟いて来い。そして俺の手ぎはを見るがよい」

と言ひながら、バラバラと不意に立ち出で、木下蔭を力に太子を目がけて、暗に閃く白刃の雷、アワヤ太子は眞二つと思ひきや、ヒラリと體をかはし、太子は「曲者、待てツ」と大喝したり。バランスはこれを見るよりエールの腕を強力に

任して撲りつけたる。其の途端に腕はしびれ、白刃はガチャリと大地に落ちた。バランスはエールの首筋を掴んで高く差上げながら、川邊に持ち行き、月に曲者の面を照らしてみれば、まがふかたなきエールなりける。

バラ「もしもし、宣傳使様、太子様、一寸御覽なさいませ。この面は右守の弟エールのやうに思ひますが、お調べ下さいませぬか」

太子外四人はバラバラとバランスの側に駆けより、曲者の面を眺め、太「ヤ、いかにも此奴はエールだ。怪しからぬ事をいたす、悪黨奴」

バラ「殿下の御證明がある以上は、このエール、この世に活かしておく代物ではございませぬ。此奴の面には剣難の相が現はれてゐます。何れ遠からぬ内、漁業団員に命を取られる奴、エー邪魔臭い、太子様お許し」

といひながら、激流目がけて、小石を投ぐるが如くドンブリと投げ込んだ。エールは投げ込まれた途端に、川中の突き出た石に脳天を打ち割り川水を紅に染めて、ドンドンと流れて了つた。この隙にカーク、サーマンの二人は一生懸命倒けつ轉びつ、命あつての物種と右守の館を指して逃げてゆく。

第二〇章 破滅（一七四四）

蓄財と名望欲と政治欲、その外自己愛の道にかけては抜け目のない右守の司サ
クレンスは、日頃の願望成就の時刻となし、妻のサ克蘭姫と共に、都下大
騷擾の跡仕末もつけず、民衆怨嗟の聲も空吹く風と聞き流し、珍味佳肴に酒くみ
交はし得意となつて、心の埃芥を平氣の平左で吐き散らしてゐる。得意の時、圖
に乗るは小人の常とは言ひながら、あまりに知恵の足らぬ男である。人心恟々と
して物騒至極の今日此のごろ、しかも玄關口に現はれ訪問客を相手にしながら、
已に國務總監になりすましたやうな氣で盛んにメートルを上げ、いきりきつて居
る。

右守は女房の酌でへトへトになり、凹んだ目をボツとさせながら、眼鏡越しに

女房にようぼうの蜥蜴面とかげづらをうち眺めなが、出来損できそこねた今戸いまど焼やきの狸たぬきの人形にんぎやうのやうな不可解ふかかい千萬せんばんの面つらをさらし、舌鼓したつづみを打ちながら、

「オイ、奥おくさま否いな、女房にようぼう、嬢かかんつ殿どの、何なんと俺おれの劃策くわくさくは水みづも洩もらさぬ注意ちういの届とどいたものだらう、エーン」

サク「旦那様だんなさま、何なんですか、車夫しやふか馬丁ばていか何なんぞのやうに嬢かかだの、嬢かかんつだの嬢村屋かかむらやだのと、こんな玄關口げんくわんぐちで見みつともないぢやありませんか。警固けいこの兵士へいしが若もしもこんな事ことを聞きましたらキツと馬鹿ばかにしますよ。どうぞ之これから妾わらはを呼よぶには奥おくとか、後室こうしつとか言いつて下ください。お願ねがひですから」

右う「イヤ、これは失敬しつけい千萬せんばん、恐おそれ入谷いりやの鬼子母神殿きしもじんどの、釜がまの下したの燃杭もえくひぎ左衛門さゑもん、閻魔えんまだ大王おおうのすけ之介のすけ、嬢左衛門尉かかざゑもん尉のじやう挽ひき臼うす殿どの、サクレンスが酒さけの上うへの暴言ばうげん、眞平まつびら眞平まつびら御免ごめん候さふらへ、何分なにぶん奥おくさまのお名前なまへがサクラン姫ひめだから、チツとばかり此この右守うもりも精神せいしんがサクランいたし、何なんとなくボツといたしたやうだ。サクラン……ではない、サフランでも煎せんじて一服飲いっぷくのましてもらひたいものだな。サフランが無なければ朝鮮人てうせん参にんじんでも結けつ構こうだ。しかしながら諺ことわざにも言いふ通り「人参にんじん買かうて首くびを吊つる」といふ事こともある。右うも

守の貧乏世帯では到底左様な高價な醫藥品は挺には合ひ申さぬ。それよりも奥方殿のお麗しきおん顔を拜し奉り、恐悅至極に存じ奉つておいた方が、何ほど愉快だか知れないわ、アツハハハハ

「旦那様、いい加減に妻を嘲弄しておきなさいませ。口に關所がないといつても、あまりぢやございませぬか。時に旦那様、太子殿下やスパール姫は大丈夫でございませうかな」

「ウンウン、大丈夫大丈夫、不要緊不要緊。アアしておけば自然に餓死を爲るだらう、さうすりやこつちの幸福だ。何ほど辛抱が可いといつても、十日も二十日も飲食を絶たれたならば、到底生命は保てない、寂滅爲樂とおいで遊ばすは、決まりきつたる天地の道理だ。エー、俺に子供があればバンナ姫に娶して、うまく國政を自由自在に操るのだが、惜しい事にはお前が石女だから、惜しいながらも他人にやるより「マシ」だと思つて、父違ひの弟に顯要の地位を譲り、弟はやがて大王殿下となり、肝心の兄貴は臣下となつて、アタ阿呆らしい、神妙に仕へねばならぬのだ。しかしながら弟は只單に看板に立てておくのみだ。その實權はヤ

ツパリこのサクレンスの手に握にぎつておくのだから、まづ芝居しばゐだと思おもへば辛抱しんぱうも出で來きやうかい、エツへへへへ。てもさても愉快ゆくわいな事ことだわい」

「旦那様だんなさま、そしてあのアリナはシノブの言いつた通り大宮山おほみややまの神しん殿でんに居をつたでせうか」

「イヤ、彼奴あいつは到頭風たうとうかぜを喰くらつて逃にげ失うせ、比丘びくの姿すがたとなつて法螺貝ほらがひを吹ふき、そこら中ぢゆうを深網笠ふかあみがさで廻めぐつてゐるといふ報告ほうこくが來きたので、千圓せんゑんの懸賞けんしやう付きで今搜索いまそうさくしてるところだ。彼奴あいつを捉つかへたら、否應いやおういはさず秋野ヶ原あきのがはらの水車小屋すゐしやこやの地底ちていの牢獄らうごくに投げ込こみ、人知ひとしれず干ほし殺ころしてやる計畫けいけいがチャンと整ととのつてゐるのだ。あんな奴やつの事は、さう意いに介かいするに足たらないよ。何なんと言いつても肝腎要かんじんかなめの太子たいしを、アア仕して置おいて して了しまへば最早俺もはやおれの天下てんかだ。エツへへへへ、何なんと妙案奇策めうあんきさくだらう」

「そりや本當ほんたうに心地ここちのよい事ことでございますな。さすがは右守様うもりさま、いや大名總監様だいみやうそうかんさま、天晴あつぱれ天晴あつぱれ。あなたが御出世ごしゅつせなされたならば、麻あさにつれる蓬よもぎも同然どうぜん、妾わらはの地位ちゐも高たかまる道理だうり。しかし女中頭ぢようちうがしらのシノブが聞きいたら、さぞ失望落膽しつぱうらくたんする事ことでせうね」

「どうで彼奴あいつは、ドテンバの淫亂いんらんの兩屏風りやうびやうぶと來きてゐるのだからいい氣味きみだ。いつ

もいつも大王様のお側近く侍りよつて、耳嗅ぎばかり得意にしてゐる曲者だから、あんな奴ア臍でも噛んで死んだ方が、何ほど國家の爲になるか知れないわ、エツへへへへ」

「しかしながら旦那様、謀は密なるを要すとか申しまして、どこまでも注意に注意を加へねばなりません。ヒヨツとすればあの女は右守家にとつて爆裂弾かも知れませぬから、そこは、うまく言つて、操つておいて下されや」

「エー、そんな事に抜目のあるサクレンスと思つてゐるか、いふだけ野暮だよ。サア一杯ゆかう。今日は土堤を切らして充分酔うてくれ。目的成就の前祝ひだからのう」

かかる處へ玄關の障子の外からかん走つた女の聲、
「右守様、妾はシノブでございます。這入りましてもお差支へはございませんか
な」

右守はギョツとしながら顔色をサツと變へ、女房と狸と蜥蜴の面合せをしなから、唇で舌を噛み三つ四つ腮をしゃくり、二人一時に、

「ハイ、差支へはございません。サアサアお這入り下さい」

シノブ「左様なれば御免を蒙ります。臍でも噛んで死ねばいいのに、憎まれ子世に覇張ると申しまして、この通りピンピンしてゐます。決して爆裂弾ではありませぬから御安心なさいませ。何と言つても太子様を水車小屋の地底の岩窟に入れて、干し殺さうと爲さる凄いお腕前、實に感心いたしましたよ。もしもし御夫婦様、別に青い顔して、お慄ひ遊ばすには、當らぬぢやありませんか。アリナさままで引捕らまへて地底の牢獄に投げ込み、干し殺さうとしてござるのですもの、本當に呆れて了ひますわ。如何でございます。梟の宵企み、うまく計劃が成就いたす見込みがございますかな」

右「これはこれは思ひがけなきシノブ殿のお言葉、どうして、さやうな無道な事が出来るものですか。人間として恐れ多くも太子様を干し殺さうなんて、人間の面を被つたものがする事ぢやございません。實は酒に酔うたまぎれに、嬪左衛門に向かつて擲擲つてゐたのですよ。もとより根なし草の戯れ言、氣にかけて下さつては困ります」

「人間として出来ないやうな、大それた畏れ多い事を平氣でおやり遊ばす右守様だもの、到底妾のとき耳嗅ぎのお轉婆女では側へも寄せませぬわ。どうか爪の垢でも頂いて煎じて飲みたいものでございますわ」

「こりや怪しからぬ、さう疑つてもらつちや、右守も一切事情を逐一辨明せなくちやなりませんまい。マアゆつくりと氣を落付けて、忠臣義士たる拙者の言葉をお聞き下さい」

「あなたはもうお忘れになりましたか。先日妾がお直使に化けて参りました時、太子様をせうとお約束なさつたぢやござりませぬか。そしてアリナさまを王位に上らせ、妾を王妃にしてやらうと、うまく誤魔化しましたね。貴方の腹の中はエールさまを王位に上らせ、王女のバンナさまを王妃とし、勝手氣儘に國政を料理しやうといふ、大した陰謀を劃策してゐらしたのでせう。何もかも一伍一什、只今玄關先にて承りました。しかし妾が、かう言つたと申して驚きには及びませぬ。物も相談ですが、どうです、一層のこと妾を女帝にして下さつては。もしゴテゴテ仰有るなら何もかも上は大王様へ、下は國民一般へ、あなたの陰謀の次第

を吹聴ふいちやういたしますが、それでも貴方あなたにとつてお差支さしつかへはございませんまいか。もしそんな事ことは出来できないと仰おつしや有るなら、サアこの場ばでキツパリと言明げんめいして下さい。一寸すんの蟲むしも五分ごぶの魂たましひとやら、妾わらはにも考かんがへがございますからな

夫婦ふうふはシノブの言葉ことばに一つ一つひとつひとつ錐きりで胸先むなさきを、揉もまるる如ごとき苦しみを感かんじながら、右う「イヤ、恐れ入おそりました。明日あすとも言いはず今日けふ只今ただいまより貴女あなたを主君しゅくんと崇あがめ奉まつり、女帝様にょていさまと申まをし上げますから、何卒なにとぞさう腹はらを立てず落付おちついて下さいませ」

サクラ「夫をととの申まをし上げました通りとほ妾わたくしも女帝殿下にょていでんかと尊敬そんけいし、今日こんにちただ今いまより臣下しんかの禮れいをもつて仕つかへませう」

シノブ「ホホホホうまいこと仰おつしや有いますな。そんな事ことを言いつて妾わらはを安心あんしんさせ、暗打やみうつちでも遊あそばす御計畫ごけいかくでせう。今日けふまでの貴方等あなたがたのやり方かたから推定すみていしても、そのくらゐの事ことは、あなたにとつては宵よひの口くちですからね」

かかる處ところへカーク、サーマンの二人ふたりは慌あわただしく歸かへり來きて、

「右守様うもりさまに申まをし上げます。タタタ大變たいへんな事ことが突發とつぱついたしました」

右守うもりはこの言葉ことばに二度にどビツクリしながら、にはかに酒さけの酔よひも醒さめ、片膝かたひざを立直たてなほ

して、

「なに、大變が起つたとは、何處にだ。サア早く言はないか」

カ「ハイ申し上げるつもりで吾々兩人がスタスタと慌てて歸つて参つたのです。

申し上げなくて何と致しませう。太子殿下をはじめスバル姫は、三五教の宣傳

使に助けられ、駒に跨がつて堂々と城内にお歸り遊ばす事になりました。そして

エールの君様は岩山の神の森において、大女のバランスに、首筋をつまんでイン

デス川へ投げ込まれ、川中の岩石に頭を打ち割られ、川水を紅に染めて、ブカン

ブカンと流れてしまはれました。グズグズしとる時ぢやございますまい。右守様、

あなたのお首が危ふうございますよ」

サクレ「嘘ぢやないか、そんな事のあらう筈がない」

サ「決して決して、誰が嘘なんか申しませうぞ。正真正銘、ありのままの事實の

注進でございます」

サクラ「それだから、いつも貴方に氣をつけなさいませと御意見を申したではありませぬか。一體貴方の頭腦は、あまり粗末過ぎますから、こんな失敗が出来る

のですよ、エー口惜しい、どうしたら宜しいのかな」

シ、イツヒヒヒヒ右守さま、もうかうなりや妾の女帝も、あなたの大名總監も
サツパリ駄目です。男らしく覺悟なさいませ。いな自決遊ばせ。實のところは王
女のバンナ姫様も妾が、うまくちよるまかして、城内からおびき出し、インデス
川の邊で首を締め、川中へ投げ込んでおきましたから、エールさまと一緒に同じ
インデス川で水杯でもしてゐらつしやるでせうよ。もうかうなつた以上は氣の毒
ながら、あなたのお家は斷絶、罪が輕うて切腹、まさか違へば逆磔刑ですよ。妾
だつて、もはや安閑としては居られませぬ。サア右守さま、介錯をして上げます
から腹をお切りなさいませ。そして奥様は首でも吊るか、溜池にでも身を投げて、
早くその製糞器を片付けなさいませ。グツグツしてゐると死後までも恥をさらさ
れますよ。私も冥土のお伴を致します。已にすでに懷劍は用意して参りました。
この鋭利な短刀で喉笛を切るが最後、結構な結構な天國へ國替へといふ段取です
わ」

かく互ひに身の終りの相談をやつてゐるところへ門前にはかに騒がしく、目付

頭は數百の部下を従へ、右守の館を十重二十重に取巻き頭役自ら數名の目付と共に入り來たり、

「サクレンス、サクラン、シノブ三人とも御用だ。神妙に手を廻せ」と呶鳴りながら、懷より捕繩を出し無雜作に三人を厳しく固く縛り上げてしまつた。

（大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 北村隆光録）

第二章 祭政一致（一七四五）

スダルマン太子は宣傳使に送られ、一行と共に無事タラハン城内に立ち歸り、父の大王に面會し、今までの不都合を謝し、かつ今後は心を改めて、父の後を繼ぎ、國家萬機の政事を總攬せむ事を誓つた。カラピン王は太子の姿を見るより、喜びのあまり氣が緩み、ガツカリとしたその刹那、忽ち人事不省に陥り、四五日

を経て八十一才を一期となし、此世に暇を告げた。太子は父王の位を繼承しカラピン王第二世と稱し、天下に仁政を布き、國民上下の區別を撤回し、舊習を打破し、國民の中より賢者を選んで、それぞれの政務に就かしめ、下民悦服して鼓腹擊壤の聖代を現出した。

アリナおよびバランスは國法の命ずる所に従ひ、一時牢獄に投ぜられたが、太子が王位に即くと共に大赦を行ひ、兩人は僅に一週間の形式ばかりの牢獄住居を遁れ、アリナは天晴れ右守司となつて國民上下の輿望を擔ひ、輔弼の重任を盡し奉つた。そして民衆救護團長たりし大女のバランスを妻に迎へ、アリナの家は子孫代々繁榮した。またバランスはスタルマン太子の即位と共に民衆救護團の必要なきを感じ、部下一般に對して、解散の命を下した。

左守司のガンヂーはカラピン王の後を逐うて、これまた眠るがごとく歸幽した。淺倉山の山奥に隠れてゐた前左守司シャカナは新王に召されて、城中に入り元の如く左守の職に就き、國政の改革に全力を傾注し、國民一般の大いに信任を得た。太子の最も寵愛せしスバル姫は王妃の位に上り、殿内の制度を自ら改革し、

従前の因習や情實的採用法を全廢し、賢女を集めて殿内の革正に努めた。また向日の森の邊に住む茶坊主のタルチンはスバル姫に終身仕ふる事となつた。

毒婦シノブのためにインデス河に投込まれた王女のバンナ姫は、バランスの部下に救はれ芽出たく宮中に送り歸され、トルマン國の太子に懇望されてその妃となつた。

大宮山の盤古神王の社は梅公別の宣傳使が指揮に従ひ、以前よりも數倍宏大にして且つ立派なる社殿を造營し、社を三棟となし、中央には大國常立尊、豐雲野尊を祭り、左側の宮には神素盞鳴尊、大八洲彦命を鎮祭し、右側の宮には盤古神王および國魂の神を鎮祭し、カラピン王家の産土神として永遠に王自ら齋主となり奉仕する事となつた。

カラピン大王や左守ガンチーの葬祭式には上下擧つて會葬し、開闢以來の盛儀と稱せられた。次いで大宮山の遷宮式ならびに太子の即位式や結婚式等にて、タラハン城市に全國より祝意を表して集まり來たる者引きも切らず、期せずして大火災に會ひしタラハン市は一年ならずして復興し、以前に優る事數倍の繁榮を來

たした。いづれも新王が民意を容れ、平等博愛の政治を布き給ひし恩恵として、
子供の端に至るまで其徳を慕ひ、不平を洩らす者は只一人もなかつたといふ。即
位式の状況については茲に省略し、祝歌のみを紹介する。

新王 久方の天津御神の御心を

麻柱まつり國を治めむ

國民の日々の暮しの安かれと

朝な夕なに神に祈らむ

親々の開き給ひし神の國を

謹み畏み守りまつらむ

新しき國の政を開きつつ

野に在る聖廣く求めむ

大宮の下つ岩根に千木高く

鎮まりぬます神ぞ尊き

三五あななひの神かみの教をしへを今いまよりは

あが國民くにたみに教をしへひろめむ
□

妃ひ 吾わが君きみの勅みことのままに服まつろひて

御國みくにの母ははと仕つかへまつらむ

天あまつ神かみ國津御神みかみを齋いはひつつ

吾わが神國かみにの御民みたみを治をさめむ

諸々もろもろの珍うづの司つかさを率ひきゐつつ

吾わが大君おほきみの道みちを助たすけむ

有ありがた難がたき神かみの恵めぐみの露つゆに會あひて

今け日ふ九重ここのへにわれは輝かがやく

世よの中の御民みたみよ永遠とほに安やすかれと

祈いのるはおのが願ねがひなりけり
□

アリナ 大君は遠く御國に昇りまし

天にゐまして御代をしらさむ

吾が父は吾が大君に従ひて

神の御國に昇りますらむ

足曳の山の名畫と謳はれし

後の宮のうまし御姿

吾は今右守司と任られて

あが大君の御前に侍る

天はさけ地ゆり海はかかるとも

君の恵みは忘れざらまし

大神と吾が大君の御ために

心も身をも捧げまつらむ

シヤカンナ 神去りしあが大君に仕へてし

われは再び世に出でにけり

新たなるあが大君の恵みにて

吾がまな娘人となりぬる

山奥に匂ひ初めたる梅の花

今日は高天に實を結ぶなり

親と子の稱へはあれど大君の

后とゐます君に従ふ

十年ぶり珍の都に立歸り

君に仕ふる事の嬉しさ

今よりは心の駒を立直し

御民の心なごめまつらむ

バ
ラ
ン
ス
バ
ラ
ン
ス
は
鄙
に
育
ち
し
身
な
が
ら
も

今
日
九
重
の
空
に
す
む
哉

背
の
君
と
手
を
携
へ
て
政

輔
け
ま
つ
ら
む
事
の
嬉
し
さ

タ
ル
チ
ン
の
館
に
三
年
忍
び
つ
つ

仇
に
返
せ
し
事
の
苦
し
さ

ブ
ル
ジ
ヨ
ア
や
資
本
階
級
悉
く

打
拂
は
む
と
す
さ
び
せ
し
か
な

都
路
に
火
を
放
ち
た
る
曲
業
も

御
代
を
救
は
む
心
な
り
け
り

タ
ル
チ
ン
力
な
き
小
さ
き
吾
が
身
も
御
恵
み
の

露
に
う
る
ほ
ひ
甦
り
け
る

有難ありがたしきさき後のみや宮の手てを取りとて

茶道さだう教をしゆる身みこそうれ嬉うれしきき

梅公うめこう別わけ 皇神すめかみのうづ貴うづのみひかり御光あら現あらはれて

世よのもとぬ基もとぬをひらばひら開ひらくけふ今日けふかな

大宮山おほみややまのせいじやう聖場せいじやうに 大宮柱おほみやばしら太ふとしりて

齋いはひおほかみまつりし大神おほかみの 御前みまへをかしこ畏かしこみね願ねぎままつる

そもかみくにそもかみくにこれかみくにのかみくに神國かみくには 遠とほつかみよ神代かみよのむかし昔むかしより

民たみのこころ心こころをこころ心こころとし 國くにのつかさ司つかさはあめつち天地あめつちの

神かみのこころ心こころをこころ心こころとし 上じやうげ下げのへだ隔へだてとりさを取とりさ去とりさりて

中なか取とりおみ臣おみとあら現あらはあられて 國くにのこきし國王こきしとたまなりたま給たまひ

四方よもの民たみ草くさ平たひらけく
 畏かしこき御み代よも中なかつ世よに
 皆みな汚けがされて神かみ國くには
 上うへに仕つかふる司つか等さらは
 晦くらませ鬼おにと成なり變かはり
 利り己こ主義しゆぎ一いち途ちゆに相あひ流ながれ
 怨ゑん嗟さの聲こゑは野のに山やまに
 轟とどろきわたる恐おそろしさ
 化け身しんとあれまますスダルマン
 よく民みん情じやうに通つうじたる
 股こ肱こうの臣しんと愛めで給たまひ
 一ひとつになして國くに民たみの
 心こころを碎くだかせ給たまひしが
 御み空そらの雲くもは深ふかくして
 いと安やすらけく撫なで給たまふ
 押おしよせ來きたれる曲まが道みちに
 惡あく魔まの荒あぶる世よとなりぬ
 名め利いりの欲よくに心こころをば
 民たみの苦くるしみ氣きにかけず
 世よは日ひに月つきに弱よわりはて
 都みや大おほ路ぢの隅すみ々すみに
 時ときしもあれや皇すめ神かみの
 太たい子しの君きみは逸いち早はやく
 アリナきみの君きみを拔ば擢つてし
 心こころを合あせ力ちからをば
 苦く難なんを救すくひ助たすけむと
 曇くもり切きつたる九ここの重への
 晴はらす由よしなき常とこ暗やみの

曲まがの健たけびは手てを下くだす 術すべさへもなく一時ひとときは

館やかたを出いでて山やまに野のに 彷徨さまよひ給たまひ千萬ちよろづの

悩なやみをうけさせ給たまひしが 一いち陽やう來らい復ふく時とき來きたり

今いまや王わう位ゐに登のぼりまし 諸しよ政せいの改かい革かく斷だん行かうし

新あらたに國くにを開ひらきつつ 慈じ母ぼの赤せき子しに於おける如ごと

萬よろづの民たみを撫なで給たまふ 畏かしこき御み世よとはなりにけり

ああ惟かむながら神かむながら々々 五み六ろく七しちの御み代よの魁さきがけか

仰あふげば高たかし久ひさ方かたの 尊たふとき神かみの御み惠めぐみか

稱たたへ盡つくせぬ御おん稜みいづ威ゐ 仰あふぎまつれよ諸もろ人びとよ

上うへは國こきし王を始はじめとし 司つかさづ々かさの端はし々ばしも

神かみを敬つやまひ大おほ君きみを 慕したひまつりて邪よこの

心こころを改あらため惟かむながら神かみ 神かみの心こころに叶かなひたる

勤つとめをなせよ惟かむながら神かみ 神かみに代かはりて梅うめ公こうが

名な残しりに一ひと言こと述のべておく ああ惟かむながら神かむながら々々

御靈幸はひましませよ
旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
たとへ大地は沈むとも

誠一つは世を救ふ
神が表に現はれて

善と惡とを立てわける
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
ただ何事も人の世は

直日に見直し聞直し
世の過ちは宣り直し

珍の祭を永久に
執らせ給へよ大君よ

三五教の宣傳使
梅公別が謹みて

神の御旨を宣べ傳ふ

梅公別の宣傳使は、新王をはじめ並みある重臣どもに神の教を諄々と説き諭し、
再び白馬に跨がり、タラハン城を後に眺めて、照國別の隊に合すべく、蹄の音も
勇ましく、矢を射る如く歸り行く。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一四・一・七 新一・三〇 於月光閣 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・二三 王仁校正)

〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕

靈界物語 第六八卷 山河草木 未の卷

終り